
はなだね small bouquet for you

りゅうらんぜっか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はなだね small bouquet for you

【Nコード】

N5250W

【作者名】

りゅうらんぜっか

【あらすじ】

俺の名前は辻村紅高校3年生。ライトノベルや恋愛シミュレーションにありがちな『普通の高校生』だ。3年生になった今年、黒羽雪見との出会いによって俺は大きな困難に立ち向かうことになる。その結果は？雪見とは結ばれるのか？trueルートを最後まで描く、そんな学園物語。

4月3日（前）（前書き）

この作品は昔自分達が作っていた黒歴史ギャルゲー『はなだね』に出てくるヒロインの一人、黒羽雪見のルートを小説版にリライトしたものです。

ゲーム自体は途中までできていたのですが、黒歴史作品ではお約束の『途中放棄』により、お蔵入りしました。

しかし、自分が書いた黒羽ルートは最後まで完成しているので、折角だからこうして投稿してみました。

かなり稚拙な文章とストーリーで、見苦しい部分が多々あるとは思いますが、読んで頂けたら幸いです。

基本的にtrueルート一直線なので、バッドエンドになることはありません。

部分的にファンタジーが混ざっていますが、どちらかと言うと学園ものです。

なお、物語の途中に、現実とは比べものにならないくらい幼稚で、あくまで想像ではありますが『いじめ』のシーンが含まれています。苦手な方や不快に思う人は『戻る』ボタンを押して下さい。

また、少々ネットスラングやメタ発言があります。こちらも苦手な方はお引き取り下さい。

それでも大丈夫だという方は、よければ最後までお付き合い宜しくお願いします。

4月3日(前)

「でありまして、こうして皆さんの元気な姿を見ることができて

」

「ふああああ…」

俺はここで出さないでいつ出すんだといわんばかりに主張してきた
欠伸を噛み殺す。

「早くおわんねえかな…」

そんな願いが通じる訳もなく、唸れた声はテンプレな挨拶を続ける。

「これから一年、心機一転して学業や部活動に勤しみ」

一体今なにが行われているかというところ…

…まあ説明するまでもないが、今は厳かな雰囲気で始業式が行われている。

俺はそれなりに大きな体育館の左下隅を陣取っている、所謂『三年生』の集団の中にいる。

人並み以上に身長は高いから、出来が悪い海苔のような、身長差による凸凹した生徒達の頭を見ることができ、勿論壇上も見える。

その壇上には若干髪の毛が薄くなっているが他の髪を寄せることで辛うじて禿を阻止している校長が突っ立っていて、挨拶の最中だ。

『校長挨拶マニュアル』53ページ辺りにありそうな型にぴったり当てはめて作りしました的な挨拶は続く。

「今年も様々な行事があり、忙しくなると思いますが」

長つたらしい挨拶の間に俺も校長に比肩する位テンプレな自己紹介をしておく。

俺の名前は辻村紅^{つじむら こう}。高校三年生。

母親がいない、父と妹の三人家族だ。

父は今やテレビで自分のコーナーがあるほどの有名な弁護士で、俺はそれ以外で父を見る機会がほぼ皆無。

つまりは家に帰ってくるのが滅多にない。

妹は病弱で現在町の一番大きな総合病院に入院中。

俺は特に特筆することもないような人生を送っている。

普通に生活して、普通に進学して、普通に社会に出る。

今や湯水のようにわさわさ出ているライトノベルの主人公にありがちな『ごく普通な高校生』…の部類に当てはまる。

オマケに部活にも所属していないので、更に無特徴成分を加速させている。

一応弁解しておくが、俺が部活に入っていない理由はある。

だが、今ここで説明しても仕方がないのでそれは後に回すことにする。

そんな俺も今日で三年生になったが、周りとは一番大きな違いは『目標』か。

周りの部活動をやっている人間は所謂『最後の大会』に向けて程度の差はあれど目標はある。

が、部活に入っていない、大学も決めていない俺に目標なんてものは存在せず、ゴールのないマラソンを永遠と続けているようなものだ。一言で言うと俺の人生は『無意味』なのである。

いてもいなくても変わらない俺に、一体この先何が待っているというのか。

…なんか発想が中二病臭くなってきたな。

それに振り返るほど鬱になってくるなおい…。

「というわけで皆さんこれから頑張ってください」

沈んでいく気分には救いの手を差し出すかのように、グットタイミングで校長の話が終わる。

まあ今は深く考えずに適当に生きていこう。

折角三年になったばかりなんだ、まだ先の話は考えるべきではないだろ。

そう思い直して、生徒会の声高な「解散」という言葉を聞き流して、俺はむさ苦しい体育館から早足で出て行く。

…と言うわけにはいかず、生徒を吐き出す出口はとてもじゃないが中の人数をスムーズに出すことができず、俺は足止めを食らう。

「ちょ…押すなよ」

大繁盛している『波のプール』と似た光景が目の前に広がり、俺は人の波にもみくちゃにされる。

「ちょ…やだっ、痴漢っつ、んんっ！」

明らかに男の声なのに喘ぎに近い声を漏らしている馬鹿がいたような気がしたが、無視することにする。

今はとにかくここを抜け出すことだけを考えるんだ。

俺は満員電車の中のようなこの場所から一刻も早く抜け出すため、かき分けるようにして進んだ。

「…、やれやれ」

なんとか脱出が成功した俺は思わず「フーッ」と映画チックな息を

吐いてしまう。

今は数多の教室が並ぶ廊下をだらだらと歩いている。

やれやれ、朝っぱらから汗かかせるなよ…

運動したわけでもないのに俺の額からは汗がにじみ出ている。

俺はズボンの右ポケットに突っ込んでおいたハンカチを取り出そうと手を…

…ない…だと…？

慌てて服に付いている全てのポケットを触ってみたがみたが、ハンカチらしきものはない。

あるのは今朝何故か拾ってしまった星形のキーホルダーだけ。

畜生…さっき落としてしまったか…！

妙な屈辱感を覚えた俺は思わず舌打ちしてしまう。

今から体育館に戻って探そうかと考えたが、あの人混みを思い出すとげんなりした。

きっと誰かが拾ってくれたんじゃないかと、無意味な希望的観測をしてしまう。

だがすぐにあの数の生徒に悪意なく踏まれてボロぞうきんのようになり果てたハンカチしか想像できなくなる。

はあ…朝から最悪だよ…

盛大なため息をついて踵を返そうとしたそのとき

「あ…あの…」

なにかが聞こえた。

普通なら聞き取れないようなそれだが、どこか聞き逃せない雰囲気があるそこにはあった。

「…?」

振り返ってしまう…いや、振り向かないといけない。

「…す…せ…」

そこには小さく息を吐き、胸元に手を当てて呼吸を整える女の子の姿が。

まさか走ってきてくれたというのだろうか。いや、そんなことより

「な…なん…だと…!?」

意外な展開に俺は無意識に素っ頓狂な声をあげてしまった。

「…すいません…」

生涯染める必要など一切ない程の美しい黒髪に、可愛らしいリボンで結ばれたツインテール、そして童顔が抜けきらないものの、よく整った顔立ち。

二次元の女の子をそのまま三次元に次元転換させたような美少女がそこにいた。

なんだ!? 俺は知らぬ間にギャルゲーの世界に潜り込んでしまったのか!?

そう錯覚させるほどの破壊力であったが、周りを見渡せばそこはいつもの学校と変わらない。どうやらちゃんと現実世界のようなのだ。

じゃあこの子がギャルゲーから現実世界に彷徨ってきたというのか!?

目を見開いて勝手な妄想を続ける俺を見る彼女は、どこか怯えたような表情だ。

これでは俺がまるで小動物を威嚇する獣のようではないかつ。

瞬時にコンビ二なんかで使われる接客用の笑顔を浮かべ、こう出だしを伺ってみた。

「俺に何か用ですか？」

今にも歪んでしまいそんな笑顔を必死で保ちつつ、さっきからずっと上目遣いで見てくる彼女の返答を待つ。

そこでの彼女の返事は、俺の期待の斜め上を駆け上っていた。

「…これ…落としましたよ…」

スツと、雪のように純白な手から差し出されたのは、先程ボロぞうきんと確定したはずのハンカチが。殆ど汚れた形跡は無く、俺が登校前に持ってきた状態と遜色なかった。

「ありがとう、どこで拾ってくれた？」

「…体育館の出入り口で」

どこかやりきれない表情のまま視線を逸らした彼女は、拡声器がほしくなるような小さな声でそう言った。

やっぱりさっきあそこでもまれたときに落としてしまったのか。

しかし、と納得しきれない俺は思ってしまう。

あんな足元も確認できやしない混乱した場所で、よくもここまで綺麗なままで拾うことができたのかと。

思わず聞いてしまう。

「そうだったんだ。でもあそこ凄い人の数だったよね。良く見つけられたね」

そう純粋な気持ちで質問したはずなのに、まるで彼女は嫌みでも言われたかのような受け取りをし、落ち込んだ顔になる。

「…私、よく下を見て歩いているので…」

そう言っただけを表現するかのようになんて下を向く美少女。

折角可愛いのに、宝の持ち腐れじゃないか…と、喉元まででかかった言葉を辛うじて飲み込む。

同時に謎の罪悪感が胸に突き刺さる。

「…たまたま、あなたの後ろを歩いていたので落ちたのをすぐ拾うことができました」

「すぐに『落とししましたよ』って声をかけたのですが…気付かれなくて…」

ぽつきりと根元が折れたかのように首を垂らして俯いたまま彼女はそう言った。

ぐ…と、俺はこんな可愛い娘から声をかけられたのに気付かず、あの馬鹿の喘ぎ声に気付いてしまった自分の愚かさに憤怒する。

「ゴメン…、でも本当にありがとうね」

そう言っただけに女神に保護されたなんて強運なハンカチを受け取る。

「それじゃ…」

そう呟きながら俺の脇を通り抜け、あっという間に角まで走っていく女の子

ハンカチをポケットに入れることに気を取られすぎていた俺は反応が一瞬遅れる。

「あ、ちよつと！」

俺のベタな引き留めも虚しく、彼女は階段を駆け上っていった…
一人取り残され立ちつくしている俺を、教室に向かう生徒達は奇異な目を向けながら通り過ぎていく。

…なんだっただ…あの子…

あんな可愛らしい子から落としたハンカチを受け取るだなんて、それこそライトノベルやギャルゲーの話じゃあないか。

…いや、今時そんな手垢のついたイベントを使う人なんかいないか…
あまりに非現実な出来事に、俺は一つの仮説を提示させる。

そう考えるや否や半ば反射的に自分の頬を抓る。当然この行為の根底には『夢』の有無の確認がある。

「いててててっ」

当たり前と言わんばかりに痛みが全身を駆けめぐる。

分かり切ったことではあったが、認めなければならぬようだ。

これは夢や幻ではない、紛れもない…現実…

ひょっとして、俺ってラッキー？

そう思った矢先…

ざわ…ざわ…

無視することのできない視線の雨を感じ、俺は首を扇風機のように180度回す。

…

感じていた視線は教室の中で談笑をしていた新2年生によるもので、それはとっても可哀想なものを見る目だった。

むしろ廊下に佇んでいたかと思えば頬を抓り出す奴を見て冷たい視線以外を送る人間がいるだろうか、いやいない。

「は…ははははは」

苦笑いを浮かべ、逃げるように早足でその場を立ち去る以外の選択肢は残されていなかったようだ。

さっさと3年の教室が連なる4階に向かうことにした。

そういえば新しいクラスを確認していなかった俺は4階に行った後その深刻な事態に気付き、面倒千万ではあるがそれを張り出している1階の多目的ホールに足を向ける。

自分が3年3組だと知り、1階から4階までうんざりしつつも上がり、自分の席に着いたときにはもうくたくただった。

3年生の教室が4階にあるのは『最高学年だから』というのは建前であって、本当はこの先運動不足になりがちな受験生に少しでも運動させたいという先生達のありがたいありがたい気遣いなんかじゃないかと思ってしまう。

無駄な体力を浪費した俺はさっきの女の子ではないが、少し弾む呼吸を整えつつ机に体を預ける形で倒れ込む。

俺の席は比較的窓側に近い場所で、後ろから2番目という居眠りをしているもややばれない、なかなか良い席だ。

「あー…だるい」

普段運動をしない俺にとって、この往復は正直骨が折れる。改めて自分の体力のなさを呪う。とにかく今は動きたくない。

初っぱなからこんな状態じゃ駄目じゃないか…と自問したが、すぐさま消失する。

クラス表をパッと見た限り一、二年で顔見知りの奴等ばかりで、今更自ら歩み寄って挨拶を交わす必要もない。

そついう安心感もあつて俺は体を休めることに耽ることができ…

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

…そうもなかった。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

一言一句違わない、全く同じ言葉が俺の右耳に嫌でも滑り込んでくる。

誰とは言いたくもないが、敢えて言うならあの馬鹿がこいつだ。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかってんだよ？」

台本でも用意したのかと疑いたくなるようなその熱烈な繰返しに、怒りの感情以外こみ上げなくなる。

「おーい、お前体育館から教室まで何時間かかっぱげごはあ！？」

俺の顔に隠れていた右拳を何の躊躇いもなく声の出何処にぶつける。案の定顔面直撃したそいつは、溢れ出る快楽を一切自重しないで、満面の笑みをこぼしていた。

ちなみに今の地の文は嘘偽りもない、真実のみを綴ったつもりだ。

「いんぐててて！な、なにするんだよ！」

すぐに我に返ったそいつは、綺麗にはいった左頬をさすりながら抗議してくる。

「いや、顔面に殴って下さいって言うフリだろ？」

「誰も『殴るなよ？絶対に殴るなよ？』なんて言つてねえよ！」

「あーも、面倒臭いから一人でしているよ」

「でもそれじゃイカ臭くなるけどつか！？H A H A H A H A
！」

…またこうしてこいつと中身のない会話を一年間続けることになるのか…

俺にうざったい程構ってちゃんオーラを出すこいつの名前はk（以下省略）

「kは流石に酷くねえか！？K O Fのあの人ですかーっ！？」
キング・オブ・ファイタンス

人の地の文を読まないでくれないかな…

「こいつの名前は倉金達也^{くらかねたつや}。性格を一言で表すと『だ』
「なんだよその空欄に何が入るんだよ！？ってかなんだその説明口調は？！」

「童貞には見えないんだなあ、これが」

「なん…だと…？いい、いやいや、俺は見えていたんだけどね？見えていたんだけどねっ？」

「すまん、見えたら童貞だったわ」

「ど、ど、ど、童貞ちゃうわー！！」

両手を突き出し手を振る姿が実に童貞らしい。

「ところでその右手に持っている小冊子はなんだ？」

俺は達也の右手に握られた冊子を指さして聞いてみる。

薄い本を丸めて手に収めた感じのそれは、この場に余りに相応しくなかった。

「ん？台本だけど」

「やっぱりあったのかよ！！」

ガラッ

俺のツッコミとほぼ同時のタイミングで唐突に黒板に近い方の扉が音を立てて開けられる。

「……」

クラスの中の生徒という生徒から私語は消え失せ、一斉にその扉に注目を集める。

例外なく俺も達也もざわついた教室に一転の静けさを叩きつけた扉の先に視線を向ける。

「は、はい！席についてくださあい！」

ひょっこり出てきた教師は、去年お世話になった国語の教科担当の先生だった。

身長は150いくかいかないかの低身長。ショートの美しい茶髪に、さっきの女の子にひけをとらない童顔。加えて何が詰まっているんだとツッコミたくなるような豊満な胸。

俗に言う『ロリ巨乳』で、かなりマニアックな路線に属する、AV z…先生だ。

教師歴2年という、所謂新米教師といったところか。
去年結婚しており、それが知らされたとき、その愛くるしい笑顔に虜になった男子生徒達のあの絶望した顔は記憶に新しい。

『NTR！？俺のまかりがNTRされたって！？イヤッッホオオオオウウウ……！』

だが、NTR属性をも取得し、正にHENTAIの天下無双を突き進む達也に隙はなかった。

まあそんなどうでも良いことはともかく、結婚相手もこの学校の体育の先生という事もあり、今幸せの絶頂を迎えていることだろう。両方の意味で。

「…と言うことで、この3年3組の担任になりました甲斐中まかりかいなか まかりです。みなさん宜しくお願いしますねえ」

HRが始まり、卒業式以来久し振りに役目を貰った黒板がチョークをノリ良く滑らせたためか、非常に可愛い字で先生の名前が黒板の中央を縦断する。

というか半分まる文字であり、本当に国語の教師なのかと疑いたくなるが、可愛いからそんなことは瑣末な問題である。

ちなみにではあるが、まかり先生は、結婚した体育の先生とは、学校上では違う姓を名乗っている。

「んふっ、可愛いよっ。書いた文字もっ、身体もっ。んふっ」

その崩れた顔を自重しようとしないう達也を尻目に、俺はこの先生が担任で良かったとほくそ笑んだ。

彼女のとても成人とは思えない（一部を除く）ロリ体型による癒しもさることながら、なにより『楽』なのだ。

その身体立ちに見合った性格であり、よく言えば優しく、悪く言えば甘い。

また、俺達の担任をするということは、先生が専門とする国語も俺達のクラスに教えると言うことになる。

宿題を一つ出さなかっただけで単位の生死を持ち出す教師もいる中、例えば宿題を全部出さなくてもなんだかんだで単位をくれるのがこの

人だ。

別に俺が宿題をサボる癖があるというわけではないが、最悪出さなくても大丈夫という保険があるだけでその安心感は飛躍する。

更に言わせてもらえば授業中何をしていようが何も言われないので、内職や居眠りもやり放題という、『あたり授業』が出来上がる。

良いね良いね最っ高だねえ！

達也までとはいかなくても、ついつい顔が綻んだことに気づき、自制しようと右手で頬を押さえつけたそのとき

「いやーっ、まかりせんせーでホント良かったねっ。すっごく楽しっ」

！？

俺の心の中を見透かし、代弁したかのようなそのあまりに的確な言葉に、手で押さえつけなくとも頬が引き締まる。

だが、この声色はどこかで聞いたことがある。いや、聞いた。

「皆さんは今年は受験生で、勉強が本格的に忙しくなるとおもいますが」

一生懸命担任を演じようとするまかり先生には悪いが、この事態には後ろを振り向かざるを得ない。

恐る恐る肩越しに背後を見る。

「ねっ？」

悪戯を考え、うまくいったときの結果に心を躍らせる少女のような笑顔がそこにはあった。

隣の人に話しかけていたのを、俺に話しかけていたんじゃないかと勝手に勘違いしていたわけではなかったので、その点は安心する。

「…やはりお前か、栗崎」

「あはっ、やっぱり辻村くんだったんだねっ」

その言葉から察するに、栗崎は俺かどうか確かめるべくあたかも隣の人に話しかけているんですよ的な台詞を言っただけを見たわけかなんか見事に罠にはめられてような気がして、少し悔しい。

そんな俺とは裏腹に、そんな悔しさも馬鹿馬鹿しく思えてくる改心の笑顔を惜しげもなく見せながら彼女は言葉を続けた。

「今年も同じクラスだねっ。これから一年間よろしくねっ」

駄目だしにウインクまでかましてくる。なんだこいつ、天然で男を落とせる天才かつ。

…ここいらで、また説明臭くなって申し訳ないが、彼女を解説しよう。

彼女は栗崎あずき^{くりさき あずき}、元ヒロイン。高校2年から同じクラスメイトである。

肩ぐらいまでかかった栗色のストレートの髪で、前髪は三角のピンで髪を分けているこれまた美少女である。

彼女を端的に言い表すと『元氣娘』である。

かなり明るい性格で、彼女の顔から陰りを見たことは、少なくとも俺はない。それくらい彼女はいつも快晴の笑顔模様なのである。

先程のやりとりで分かるように、不純物など欠片もない天然で女の子らしさを振りまくので、コロッとやられた男は数知れない。

そんな彼女は陸上部の部長を務めている。…厳密に言うとなんか務めざるを得ないが表現としては正しい。

つまり今現在陸上部には彼女しか部員がおらず、今年で部員が集まらなければ廃部の可能性もある、正に崖っぷちな状態だ。

その部員集めを手伝うというのはまた別の世界線の話。

「ああ、今年もよろしくな」

栗崎には劣るが、こちらも笑顔を差し出して答える。

それに対しニツと擬音が飛び出してきそうな程見ていて気持ちが良い笑顔を返してきた。

「うんっ、よろしくねっ」

これを誰であろうと無条件でやってくれるのだからたまったものじゃない。それに狙ってやっていないというのだから恐ろしい。

俺はこのままずっと見ていたい衝動をぐっと堪え、視線をまかり先生に向け直し、HRが終わるのを待ったのだった。

4月3日（前）（後書き）

という訳で前半終了です。

所謂『日常パート』ですので、適当に読み流して頂けたのではない
でしょうか。

後半は妹の登場ですよ！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月3日（後）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きを読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで後半です。文章が長くなってしまいました。すいません。

日常パートはもう少し続きます、クスリときてもらえれば幸いです。

4月3日（後）

「、それでは今日はここで終わりにしますね。また明日、お会いしましょう！」

そんなまかり先生の締め言葉の切り口に、ざわっと一斉に教室が生徒達の会話で埋め尽くされる。

今日は始業式という事もあり、授業もなく午前中で学校は終了する。そこからくる開放感と、昼からなにをしようかという期待感が、この教室を騒がしくさせるためには十分すぎる燃料だった。

「それじゃあねーっ」

「おう、またなー」

学校公認で元気印を与えるべき栗崎は、終わったと同時にそれこそ脱兎の如く教室から消え去った。恐らくこのあと部活なのだろう。

「んああ…ようやく終わったかあ…！」

俺も背もたれに身を預け、大きく伸びをしてじっとしていて疼いていた身体に満足感を与える。

「よっしゃっ！学校終わってよっしゃっ！」

意味の分からないテンションに取り憑かれた俺の右隣にいる人は、何故かガッツポーズをしながら喜びを表している。

そしてそのテンションの捌け口が、達也の目が俺をとらえると共に向けられる。

「よ」

「断る」

「ま」

「断る」

……

「…ま」

「断る」

「せめて『まだ1文字しか喋ってないよ』って突っ込ませろや！」

「断る」

「お前はプログラムされた言葉が来ないと同じ言葉しか言えない動物ロボかつ」

俺は信じられないくらい面倒臭そうな面を達也に見せつけながらこう答えた。

「なんだよ、俺に何か用なのか」

「きまつてんだろ！？もう学校は終わったんだ！僕は学校を^{セカイ}とびだせるんだよ！」

「じゃあな」

ガタッ

今日貰ったプリントが数枚ある以外何もない、すっきりした鞆を持ち上げて達也から背を向けて歩き出す。

「ちょ…ちょ待てよ！」

駆けて俺の前に立ち塞がり両手を水平に広げ『ここは通さないポーズ』になる。うっとおしい。

「あたしの話を聞いてえ！」

悲劇のヒロインっぷりを演出する達也。

この目立つ行為に、まだクラスにごまんという生徒から「また達也か」「はじまったよ」と、口々にいわれる。

そう、達也は高校に入ったときからこんな奴であり、初見の人間がこいつを見るときまって「キモい」と言う。

だが本人は全く聞いていないというかもはや耳に届いてないらしく、良い意味で唯我独尊を貫いている。

どうしてこいつとこうしてつるんでいるかというのは、話せば長くなるので割愛する。

なんだかんだで俺もこいつと付き合い初めて3年目になる。ということはこいつの性格が嫌でも分かる。

その経験からして、こうなつてくると聞かないと力ずくで通らなければならなくなる。そんな無駄な体力は使いたくないので大人しく従うことにする。

問題は従ったら従ったでSAN値がガリガリ削られるので、とつちもどつちという事だ。

「はあ…、なんだよ」

「そんなあからさまに溜息つかないでください」

ありもしないめがねを上げるような手つきをし、話を聞く気になった俺に満足げな頷きをする。

そしてなにを思ったのかおもむろに俺に近づいてきた達也は、グーパン準備完了の俺の拳を解きほぐしたかと思えばそつと何かを握らせる。

少しひんやりとしたものを感じ、手を開いて確認すると、何故か鍵がそこにはあった。

視線を達也に戻すと、髪をかき分けてニヒルな笑顔でお出迎えして

くれた。

「コレ…僕の部屋の鍵だ。来る気があるならいつでm」

「ってちよちよちよちよちよっ！ごめんっ！それ俺の家の鍵だからっ！！投げないでっ！？」

…

俺が全力で4階の廊下の窓から人が豆粒に見える1階に投げ捨てようとした鍵を土下座4回してなんとか取り戻した達也は、抱きしめて歓迎した。

母親のお腹の中に男のプライドなど捨ててきた達也の目尻には、涙が溜まっていた。いや、そこまで喜ぶなよ。

「これが最後の問いだ。俺に何のようだ」

「わ、私はただ、一緒に帰ろうって、いいただけなんですう」

頼むから最初からそう言ってくれよ…

俺は大げさに肩をすくめて鞆に鍵を突っ込んでいる達也にこう言った。

「それはいいが、俺は妹の所に行くから途中までな」

「義妹？
いもこと」

冒頭で説明したとおり、俺には7つ下の妹がいる。

産まれたときからかなりの病弱で、人生の大半を病院で生活しているような状況だ。

退院しては入院しての繰り返しで、今のところ回復の見込みはない。

「そんなに早く死にたいのか」

軽く拳を振り上げると、テストで赤点が返ってきたときのような、目を丸くして絶望した顔をする。

「い、いや…お前と義妹の関係の中に俺が入ってきてNTRする…みたいな妄想をしていたんで、つい」

てへぺろ

ガッ

「あがつ?!だ、誰も『ぬるば』だなんていつてないだろ!?謝れよ!」

なにが『てへぺろ』だ。舌を出して片目ウィンク、それに手を頭の後ろに回すというコンボを男がするだなんて、ガンジーさえ助走をつけて殴るレベルである。

これがまかり先生だったら、俺は逆に感謝してしまうことだろう。

やはり世の中可愛い正義だな(キリッ)

「ごめん(棒)。じゃあな」

これ以上この馬鹿と関わっても仕方がないのでさっさと妹…明日香あすかの元へ向かうことにする。

「まったくもう、紅ちゃんっていつつも勝手なんだからっ」

『エロゲの幼なじみヒロインが言いそうな言葉ランキング』8位にランクインしそうな台詞を平然と言ったのけてから、追いかけてくる達也だった。

「…おい」

この場所独特の雑踏や店のおばちゃんのけたましい売り込みの声が俺の耳に否応なしにはいりこんでくる。

「どうしたんだい？」

時刻は一時を少し過ぎたくらいだろうか。辺りを見渡せば、昼飯を食べに来たサラリーマンをチラホラ見かける。

「なぜお前がここにいるのだ」

…ここはこの街最大の商店街である深翁商店街。みおきな

うちの学校からゆつくり歩いたとしても20分程度あれば来ることができるため、学校帰り学生がよく遊びに来る場所だ。

商店街を抜ければ駅もあるということもあり、今の時代には珍しくかなり盛り上がっている（と思う）。

とはいえこの街には特に観光名所と呼ばれるところはないため、あくまで地元で盛り上がっている、という程度だ。

文房具屋にファミレス、小さいがスーパー、ゲームセンターなど、普段の生活で不便を感じることはないくらいの充実っぷりなので、正直このままでいい気がする。

余談だが、一時期温泉ブームの影響で妹のいる隣町が大いに注目を浴び、空前絶後の観光客数を観測したことがある。

そのおこぼれというか、おかげでうちの街にも人が流れ込んできたものの、最近ではブームもすっかり下火になり、いつもの平穏さを

取り戻している。

そんな商店街の方向に達也の家は存在しない。ところがこいつは当たり前のように着いてきている。

この展開にデジャヴを感じたことがないと言えば嘘になる。まさか…

「まさか…　また妹のところにくるつもりか？」

懐疑の念を抱きつつ、横目で質問すると、達也はいきなり腕を組んだかと思えばそっぽを向いてこう言い放った。

「べ、別にあんたの妹に会いたいただけなんだからっ。あんたと一緒にいたいわけじゃないんだから。勘違いしないでよねっ」

『エロゲのツンデレヒロインが言いそうな言葉ランキング』で永久不動の一位の座にある定型文をつかってくるんだからタチが悪い。

「だが断る」

いつでも無駄だが、一応言っておく。
案の定、無駄だった。

「だが断る」

なぜか俺を見下ろすような目線になろうと必死になっている。

至極一般的なことではあるが、こんなことでこいつが引き下がる要素など微塵もない。全く困った奴だ。

… 実際来ても全然構わないが。

「ん？どうしてアへ顔になるん？」

「あへえ」

「ちょおい！本当にすんなよ！？これ小説だからお前の顔見せずに済んだけど、漫画やアニメだったら完全に事故だぞ！？」

「ん、お、悪い悪い。」

顔をキリツとさせる。

さ、様式美は済んだことだしそろそろ行こうかな。

「お前に何言っても無意味なのは知っている。きたければ来ればいい」

そう言って承諾すると

「ヒヤッハーツ！！」

今にも汚物を消毒しかねない悪人面で喜びを表現してやがる。

「だが、病院内では一言も喋るなよ。喋る毎に裏拳一発な」

「フツ、造作もない…え？」

計画通り

「よいk」

「まー待て待て待て！！それじゃ俺行く意味なくね！？ただお前に黙ってついて行くだけだなんて俺はお前のスタンドかつっ！？」

「スタンド名は『ストロングエア空気の強者』だな」

「うわーっ！いろいろ矛盾しているじゃねーか！」

両手で頭をワシ掴みして悶える達也を無視して、俺は駅に歩き出した。

ガタンッ！！

「アガッ?!」

電車に揺られること二十分、俺達は明日香のいる隣町までやってきた。

その矢先、キップを入れたのに改札口は全力で達也の通行を阻止した。

機械にまで嫌われるだなんてなんて不幸な奴なんだ。

「ちよつと駅員さんっ!？」

そんな達也を視界から外し、俺は他の建物より一つ頭抜けたやけにでかい建造物に目を向ける。

それは大々的に『白』を強調したもので、他の景色から余りに異色なため嫌でも目立つ。言わずもがなではあるが、あれはこの町一番の総合病院。

ほかの建物が小さいというのもあるが、巨大な三つの病棟を並べたそれは巨大な城を思わせる。建物の色が白だけに。

殆どの専門家が集結しており、困ったらとりあえず駆け込めと言われるほどの汎用性がある。

そんな病院にうちの妹は長期に渡って入院している。逆を言えばそんな病院ですらも明日香の病気を治すことができないのだ。

「つたく、酷い目にあつたぜ…」

後ろを振り向けば、ようやく解放されてやれやれ顔で戻ってきた達

也の姿があつた。

「ほら、行くぞ」

「ちょ…ちよつと待ちなさいよっ」

…

「…しかし、何度来てもここはすげえって思つちまうな」

そう言いつつ、半分にやけ口で目を見開かせる達也。

こいつにしては珍しくまともな感想を述べる。ネジが五本はずれた達也でさえもそう言わせる程この病院は圧巻なのだ。

病院の入り口、ここをひとたび入れば殆どの病気が治療できる正に

『天国への扉』^{ヘブンズドア} といつても過言ではない。

そんな病院を目の前にし、感嘆に浸るこいつに今から残酷な宣告をしなければならぬと重うと気が重く…なるはずない。

「さ、こつから先はお前は絶対に無言だからな」

サラッとそういつてやると出目金と勘違いしてしまうほど開眼させ、にやけた口は一瞬でへの字に変わる。

「あれ冗談じゃないの！？救いの手はないんですかっ！？」

両手の指をわさわさしながら抗議を申し立ててくる被告人に裁判長^{おれ}は冷徹な判決を言い渡す。

「ねーよ」

もつと面倒な事を言い出すかと思ったが、意外にも達也は突然ない頭で思慮深くなる。

自分の中で何かを納得した達也は頷き、こう言った。

「……フツ、まあいい」

こう変なときにギアチェンジが早いこいつは、気障に含み笑いをしながらこう言った。

「たとえ俺が一言も喋らなくても、明日香ちゃんは俺の魅力の虜になる…そうだろう？」

このドヤ顔につい棒を付けて薔薇を添えなくなるが、そんなものを世に出したら叩き潰されるのは火を見るより明らかである。

「ああそうだな、じゃあいこう（棒）」

自動ドアを二枚隔てて、中に入る。

それとほぼ同時にあの病院の独特のにおいが鼻につく。

中にはチラホラ人が各々の目的で動いており、受付で待っている人、カルテを持って歩くナースなど様々だ。

見慣れた光景なので、俺は妹の部屋に向かうことにする。

「…」

チラッと後ろを見れば、作り笑いを浮かべた達也がちゃんとついてきていた。

さて、いつまでそれが続くことやら…

正面を向き直し、入り口から右手にあるエレベーターのボタンを押

す。

「あら辻村君、こんにちは」

10数秒後、チーンとエレベーターが出迎えの挨拶をしてきたとほぼ同時に、後ろから柔らかい優しい声が俺に向けられている。

栗崎の時と同様、この声は俺の脳が知り合いだと認識している。だが栗崎と違い、完全に確証があるため、確認もせずに挨拶を返す。

「こんにちは」

振り向けば、そこには妹を担当している白い白衣を身にまとった看護師さんが立っていた。

手にはカルテを持っており、今まで誰かの部屋にいつていたのだろうかと適当に推測する。

「今日は妹のお見舞いかな？いつもありがとうね」

天使の微笑みとはこのことだと教えてくれる笑みに加え、若い看護師さんのスタイルは絵に描いたような理想的なもの。なんだ、ゲームのキャラか。

「!？」

看護師さんも大好きな達也の口は閉じられず、だがしっかりいやらしい視線を看護師に突き刺す。ぬかりない奴だ。

「いえ、兄として当然のことをしているだけですから」

その視線をなるべく悟られないよう俺は看護婦に話題を振ってみる。

「えらいわねえ。今時の高校生からそう出る言葉じゃないわ。いいお兄さんね」

「いや、心配いらなかったか。看護師さんは達也など眼中になかったようだ。…そもそも達也がちゃんと見えているのだろうか。」

「い、いえ…」

「さあ、はやく合つてあげて。妹さん寂しがっていたわよ？」

なにかを思い出したらしい看護師さんは、軽く笑いながら胸元で人差し指を天井に向ける。

「本当ですか？」

「フフ、毎日来ない限り、その寂しさは紛らわすことはできないと思うけど」

「…わかりました。それでは急いで行つてきます」

感謝の意を込めて頭を下げ、エレベーターを待つ時間も惜しいので、小走りで妹の元へ。

「病院内は走っちゃ駄目よ」

苦笑混じりの看護師の声が後ろから聞こえた。

ガラッ

「あっ！お兄！」

俺（と ストロングエア 空気な強者）が入るなり、目を輝かせて俺（達）を迎え入

れてくれた。

窓際によく洗濯された真っ白いシーツや布団に身を包んだベットがあり、明日香はその上で半身を起こしていた。

部屋はシンプルな立方体構造で、壁や天井、床の色も白に統一されており、どこか異空間に来てしまったのかと錯覚する。

…いや、この表現はあながち間違っていないのかもしれない。

「お兄が来てくれたーっ」

高校ではまず聞くことはない年相応の幼い声は、俺の耳には新鮮だ。オプーナの頭をモチーフにした帽子を深々と被り、水玉のパジャマという、つい後ろの奴が鼻息を荒げる格好だ。聞き耳を立てれば…ほらっ！

「フン…フン…フン…」

既に顔を赤くして、鼻息を漏らさずにはいらなくなっている。

無理もない、ただでさえやばいのに、そこに『病弱な娘が白いベツトの上で見てくる』という属性攻撃が付和されるわけだから。

ご覧の通り、明日香の格好は幼児異常嗜好ロリコンをオーバーキルで悩殺するには十分すぎたようだ。

これで確信する。こいつの目的は明日香を視姦するためであって、決して見舞いに来たわけではないと。

全く、こいつのHENTAIの万能っぷりには感服してしまう。それをもっと他のことに生かして欲しいものだ。

「久し振りだな、明日香」

興奮することしかできない人形に変わった達也を無視して、軽く手を挙げて挨拶する。

「もーっ、くるのが遅いよっ」

言葉は不満げだが、その顔は白い歯をくつきり見せながら笑っている。

「ブホッアアアーッ」

鬼に金棒なその無垢な笑顔に、スタンド達也は今にも白目を剥いて失神しそうだから危なっかしい。

…しかし明日香はどうして達也に対して何も言わないんだ…？

「いや、ごめんごめんそんなに怒らないでくれ」

歩みながら謝る。

「週一回しかこないお兄が悪いのっ」

「ゴパッ」

顔を頬に食べ物詰めたりスのように膨らませる。これ以上スタンドをいじめないでやってくれ。

明日香の言うとおり、俺は週一回しか妹の病院に行っていない…正確には行けない…だ。

もつと合ってやりたいのはやまやまだが、平常時は、学校が終わって急いで病院に向かってもそのころには面会の時間が終わってしまったっている。

そのため平日はどうしても合うことが出来ない。

だから俺は土日のいずれかを、妹に会う日にしている。

今日は午前中に終わったため、例外だということだ。

俺はベットの近くにある質素な簡易イスに腰を下ろして聞く体勢を

取る。

「僕、お兄が来るのをずっと待っていたんだよ？」

小首をかしげてねだるような目を向けてくる。

「カハッ…ハア…ハア…」

ストロングエア

空気の強者、もういい…！もう…休めっ…！

「本当にごめんな、あまり合いに行けなくて」

家族だというのに、まだこんなに幼いのに、週一回しか会うことができないだなんておかしい話である。

「いいんだよ。会いに来なくても。だってお兄は高校生だもんね。だって高校生はいろいろ忙しいんでしょ？」

明日香のそんな言葉に、俺は胸が締め付けられる思いがした。
こんな小さな妹に気を遣われる俺はなんて不甲斐ないんだ。

「ま、まあな。…でもな！」

なんとかして明日香を安心させたいがために、つい勢いよく言い出してしまった。

こんな何もできない自分に言い聞かせるように。言い訳するように俺は笑顔の仮面に隠れた明日香に向かってこう言った。

「今日で三年生になった。高校生なのは今年までだ。大学生になったら…もっと会いに来る。絶対に」

これが俺の今できる精一杯の言葉。

「んふ」

困惑する俺とは対照的に、明日香は口元に手を当てて小さく笑った。

「そうかなあ？彼女とか出来て、僕にかまっていられなくなるんじゃないかなあ？」

白い歯を見せながら、ジト目で悪戯っぽい笑みをこぼす。

「そ…そんなこと」

「いいんだよ。僕は…」

余りに夢い、今にも崩れ落ちていきそうな小さな手が眼前まで上げられ、制される。

フツとその表情は崩れ、どこか遠い目をしながら風が良く通っている窓の外を一瞥したかと思えば、再び俺に視線を落ち着かせる。そして手の下に隠れてしまったが、そこには仮面を剥いだ本当のほほえみを垣間見せた明日香から、トドメの一言を言われる。

「僕は…僕ができなかった事を、お兄にたくさんしてほしいからね」

！！

生まれて2、3年たった頃からこの病が発症し、この生活が始まった明日香。

外の世界を殆ど知らず、病院という独房の中でずっと病の回復を望んでいる。

俺はそんな明日香を何度連れ出して、いろんな所を見て回りたいと

渴望したことが。

でも、それは今になっても叶わない。いくら願ったところで、神は明日香に外を出ることを許さない。

だからって、そんな言葉は言って欲しくなかった。

明日香：お前は…

「オッ…ウツ…ウツ…オウ…ブヒッ…」

！？……………

…

今の馬鹿の漏らした声のせいで、一気にこみ上げてきていたものが一目散に退散していく。

大半の人間から憎まれている芸能人が涙の引退会見しているときに「やっとなえてくれるんですかwww」と言い出す位空気が読めていない。

…とは言え、良くも悪くも雰囲気殺しなこいつのおかげで、助かった一面もある。

ここで弱気になってしまつては、それこそ明日香の気持ちが無駄になつてしまうからだ。

俺はくじけてはいけない。それが明日香のためであるから。

そう言う意味で達也に救済された。だが…

「ブベッ！！？」

後ろで不快な環境音はないきを垂れ流すスピーカーに明日香に視線を固定しながら一撃裏拳をかます。一度殴っておかなきゃ気が済まない。

「ヒッヒッ！！フッ！ヒッヒッフー！」

何故かラマーズ法で転げ回る達也は放っておいて、改めて明日香を

見る。

そうだよ紅、俺は明日香の兄として、その役割を演じ続けなければならない。

一度深呼吸して、完全に気持ちを落ち着かせてから、口を開く。

「明日香：僕ができなかった事、だなんて言わないでくれ。絶対に病気は治るから。もう少しの辛抱だ。な？」

根拠のない台詞。そう誰もが思うが、それに縋ることしかできないことくらい、わかるだろ？

その一言に少し表情を明るい方向に引き戻してくれた明日香は、真意が読めない笑顔でこういった。

「うんつ。でも僕の分じゃなくても彼女は作つてよね。お兄は優しいし、カッコイイんだから、もったいないよ」

「そ、そんなこと……」

「あーっ、お兄顔真っ赤つかだよ？んふふーそんなに言われて嬉しかった？」

愉快的様子で『m9』を真っ赤になっているらしい俺の顔に突き刺す。

「おま…お、お兄ちゃんをからかったのかっ!？」

「もー、お兄は女の子の言葉に弱いんだからあ。僕みたいな小学生から言われてもそんなに真っ赤にしているようじゃ、」

同い年に言われたらコロッと引っうちやうんじゃない？うふ」

明日香の周りに『ニヤニヤ』が取り巻いている。くそっ謀られたっ。

かと思いきや何かを悟ったようにハツとする。コロコロ表情が変わる奴だ。

「あ、まさか僕みたいな子供から言われたから？えっ、お兄ってまさか…」

「俺はロリコンじゃあなあああいい！」

全身全霊で明日香の狂言を全否定する。これだけは譲れないっくるったものいい

「うふふ 冗談だよ 冗談」

からかいが大成功したため、非常に満足げな顔つきでうんうん頷く。全く、どこからそんな偏った知識を携えたんだ。

どうやらってかやはり俺は明日香のその手のひらで踊らされている道化のようだ。

さっき兄として役割を演じなければならんって言った奴は何処のどいつだよ…。

「く…勘弁してくれよ」

適当に体裁を戻しつつ、妙な汗をかいてしまったためポケットに手をつ突っ込んだそのとき

ポン

…と俺の左肩に手が置かれる。この状況下でこんなことをする奴は一人しかいないわけで。

俺はもう立ち直れたのかと思いつつ後ろを振り返ると

「…」

君も幼女ロリコン異常嗜好かい？ と言いたげな、口元を片方だけつり上げ、

どこか蔑むような目で見られていた。うるさい氏ね。

「んふふふ、やっぱりお兄をいじるのは絵の色塗りなんて霞んで見えるほど面白いなあ。うふ」

『絵』という単語を聞いた途端、壁際に置かれたスケッチブックが無性に存在を強調してきた。これは使える。

「そっぴゃ、絵の方はどうだ？」

これ以上妹のペースに持って行かれるのも癪だし、ロリコン疑惑を引きずってもらいたくないので、微妙に話題を逸らす。
案の定、好きな話題なので飢えた魚のように生きよくガッツリ食いついてきた。

「ん？これのこと？」

明日香が自分の体を覆ってしまうほどのスケッチブックを取り出す。それをペラペラとめくり、自分の過去の作品を鑑賞しながら溜息混じりにこう言った。

「身近なものを描くのは飽きちゃったから、今外の景色を描きたいと思っっているんだ」

その言葉がグサリと心に突き刺さったが、平静を装いつつ言葉を続ける。

「そっぴゃ、ならここから見える景色を描いてみるよ」
「ううん……」

明日香が何度も何度も掴み、表紙にシワが目立つスケッチブックを撫でながら唸る。

俺が明日香にスケッチブックと絵の具セットを買ったのは2年前だ。その頃毎日暇だ暇だと言ってやまない明日香のためになにか遊べるものを色々買い与えていたが、全部駄目だった。

そんなある日、それらを買ってくると、今までゲームや本には全く興味を示さなかった妹が、なにかに取り憑かれたように熱中し始めたのだ。

その上達振りには目を見張るものがあり、驚異的なスピードで描けば描くほどうまくなっていた。

年齢で言えば妹は11歳だが、その上達の早さで、もはや彼女の手から描かれた絵はコンクールの賞を貰える高校生と引けをとらないそれは『自分の家族』という色眼鏡の補正がかかっているからなのかもしれない。が、ハッキリ言おう、これだけはそうでないと太鼓判が押せる。

「この景色なら、ここから動かずに書けるぞ」

俺は開け放たれた窓の先にある、青空が続く外へ指先を向ける。外には特に何もないので、静まりかえった陸上競技場が見える。

「それだけじゃつまらないなあ…ううん…ちょっと考えておくよ」

このレベルになるとこだわりというものがあるのだろう。特に俺は強要するようなことはしなかった。

「あ、それでね、お兄…」

…そんな感じで、しばらく明日香と会話を続けたのであった。

…
気づけば外は赤一色に染められていた。世間的に言えば『夕方』と呼ばれる時間だ。

夕日が病室にも差し込まれ、白メインのこの部屋には夕日が彩ったものはイレギュラー以外の何者でもなかった。

それに気付いた明日香は会話を中断して、少々驚いた顔を浮かべつつこう言った。

「あわ、お兄、もうこんなに時間が過ぎちゃったよ？帰らなくても良いの？」

「別にこれくらい良いさ。それよりお前と話がしたい」

明日香の慌てを鎮火させるように言ったが、それでも炎は燃え続けるようで、開いた手を突き出す。

そのか細い腕には何力所も点滴の管が痛々しくぶら下がっている。

「いいよ。お兄といっぱい話してきたし。お兄には宿題もあるでしょ？」

ない…と言つ隙もないほど明日香は言葉を止まらない。

「それに僕は一人でも寂しくないからね。もう11の強い女の子なんだから、お兄はなにも心配しなくていいんだよ」

矢継ぎ早にそう言った。

…ここは明日香の気持ちを汲んでおとなしく下がった方が良さだろう。

「わかった。それじゃあ、またな」

上げたくない重い腰を上げ、妹に別れの言葉を言う。

「うふ、この右腕が筆を動かせ続けられる限り、僕に暇はないよ」

力こぶに反対側の手を当てながら、努めて明るい声でそう答えてくれた。

明日香に手を振り、病室を後にした。

…明日香…

廊下を出たと同時に、後悔の念が津波のように押し寄せてくる。

無意識にも右手の拳に力がある。

『いいんだよ。会いに来なくても。だってお兄は高校生だもんね』
『それに僕は一人でも寂しくないからね。もう11の強い女の子なんだから』

…あの言葉は全て嘘だっていうのは明白だ。わかりやすすぎる程に。家族に気を遣う必要なんて微塵もない、なのにどうして明日香はこんなにも俺に気を遣ってくれるんだ。

寂しいなら寂しいと言って欲しい。見舞いに来れる俺をもっと頼って欲しい。

しかしその疑問を明日香に問い出すことは俺にはできない。聞き出せば、この関係が崩れ去ってしまいそうだから。

それが怖かった。

「…くそ」

やり場のない虚無感をこらえつつ、俺（達）は廊下を歩く。

廊下には人という人がおらず、薄暗く続く道が俺の気持ちを再現し

てくれているようだった。

そのせいかいつもより周りの音に敏感になっており、病院内の静かなざわめきが良く聞こえる。

その中に…

「…！…！」

俺の視界に入る、ここから2つ先の扉の中から、やたらでかい声で喚いている奴がいる。どうかしたのだろうか。

その前まで来ると、扉越しから声が聞こえる。なにかを主張しているようだ

「い…よ…！…！」

…まあこれ以上聞いていても無駄だし申し訳ないのでとっと行くことにする。

「だあああああああああああああ！！！！やーっとお！！
しゃべれたあああああああああ！！！！！」

「うるせえ」

ガッ

（フンスドア）

天国への扉から下界にでた瞬間、本当に病院内では何もしやべらなかつた達也が、その鬱憤を晴らすが如く怒涛の叫びを腹から出した。

しかしいくら病院外とはいえ、入り口の目の前だ。非常に迷惑なので頭にチョップして、黙らせる。

「あがつ?!だ、誰も『ぬるば』だn(ry)」

「いや、まあ、お前は良くやったよ。今回だけは賞賛に値する」

病院の敷地内を二人で歩きながらそう言っただ也の苦勞を労う。今日は割と本気で労う。

「フツ、俺にかかればこのくらい造作もない…だが…」

今だから許されるキザな髪のかきわけをする達也であつたが、直ぐに額にしわを寄せ困り顔になり、急かすように聞いてきた。その姿は、神に助けを請う迷える子羊そのものであつた。

「…でもさ、どうして明日香ちゃんは俺の事について触れてくれなかつたんだろう…」

確かに。としか言いようがない質問である。敢えて仮説を立てるとすれば…2つ思いつく。

俺という神に縋っている修道士に、2つの解を示してみる。

「そうだな…、達也の存在が視界に収まらなくなるくらい俺しか見えなかつた…か」

「達也のあまりの存在感のなさに、そもそも見えなかつた…かだ」

指を1つ1つ折りながらそう答える。

「つまり前者だろうが後者だろうが、お前は見えていなかったんだな」

ストロングエア

「『空気な強者』の力をいかになく發揮したんですね、わかります…って」

「そんなオチありかよおおおおおおおおおおお！！！！」

…この話にもオチがついたところで、今日は終わりにしておこうか。
綺麗に染まった茜雲を堪能しながら家に帰ったのだった。

4月3日（後）（後書き）

と言っわけで一日目は終了です。

妹の存在は正直この黒羽ルートでは関係ありませんが、共通ルートなのではいつています。

さて、二日目は学校の女の子達との会話が多くなります。
ギャルゲーらしい展開はあんまり無いかもしれませんが、お付き合いをお願いします。

それではここまで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日／火曜日（前）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きを読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで二日目です。さあメインヒロイン黒羽ちゃんの登場です。

正直この子を可愛く書く自信はないのですが、できるだけ頑張ってみます。

ではどうぞ！

4月4日／火曜日（前）

ジリリリイリリリリ

なにかが鳴っている。

それが目覚まし時計だと認識できるわけもなく、思考が完全に停止している俺にとって目覚まし音など意識の中の一部に過ぎない。

ジリリリイリリリリ

けたたましいベル音は、俺の『覚醒』を突き破るまでまで掘り進むドリルの削岩音のようで、少しずつその音が大きくなる。

ジリリリイリリリリ

「……うん…」

ようやく目覚ましの生音まで聞こえるくらい意識を取り戻した俺は右手を頭より高く上げ、音の出所を遮断すべく、それにむかって手を上げ下げする

じりーガチンツ！？

半ば無理矢理止める。っていうか今のはスイッチを押したんじゃない、目覚ましを叩きつけて電池をぶっ放しただけなのかもしれない。

もし後者ならば時間^{とき}を止めてしまい時刻を観測できなくなった時計など、置物以外の価値が無くなってしまふ。

それを確認する意味でも、時間を確認する意味でも、俺は未だに睡眠へと手ぐすねを引いている睡魔を振り抜き、時計へと視線を移動させる。

…
残念ながら寝起きの目は目としての機能をはたしてくれず、その視界は歪曲^{ゆが}み、焦点が安定しない。

目をこする。すると少し緩和したぼやけた視界の中でなんとか時計の針を確認できた。

時計は… 6時… 43分… を指していた。

途端にせつせと時を刻み続けることを証明する稼働音が耳の鼓膜を震わせ、時計がちゃんと動いていることが確認できた。

その謎の安心感から、一気に眠気が押し寄せてきたが、今二度寝したら次目が覚めたときは今の目覚めとは比べものにならないくらいアクティブなものになるだろう。

朝っぱらからそんな誰も得しない焦りや緊張感を味わいたくもないので、さつさと起きることにしよう。

確かに二度寝したときの気持ちよさは格別だが、寝過ごしたときの絶望感もまた格別である。『ハイスクハイリターン』を気軽に味わえる手段が『平日の二度寝』だと個人的に思う。

だが、確実に起こしてくれる『親』という存在があればそんなこと…
ないものねだりをしてもしようがない… か。

迅速に気持ちが悪えた俺は、常時でたままの布団から身を引き出したのだった。

「いただきます」

無論、この言葉に反応してくれる人間は存在しない。

この部屋に音があるといえば、一方的に喋っているテレビの中にいるニュースキャスターくらいなもの。

なんの躊躇もなく使う人数と数が食い違っている箸が積んである筒に手を伸ばし、朝食をスタートさせる。

いや、食い違っているはいなかった。いつからだろうか、こんなにも箸が余るようになったのは。

俺はもくもくと箸を進めて、今朝炊いた白飯を頬張り、昨日帰りにスーパーに寄ったとき特売されていたウインナーをかじる。

その瞬間肉汁があふれ出す。悪くない味だ。

こんな風に一人で朝食：あまつさえ夕食までだが、こんな生活が始まってもう10年がすぎようとしている。

明日香は小さい頃から入院しているのでノーカウントだが、問題は父のほうだ。

自分が小学生にあがってからというもの、弁護士として腕を振るっている父は不自然に仕事に打ち込み始めた。

その頃から仕事軌道に乗り始めていたと言えそうだが、その転機の前と後では雲泥の差で態度が変わった。

そう、人が変わったかのように。

待てど暮らせど夜は帰ってこないことが当たり前。たまに帰ってきたかと思えば、次の日には逃げるように仕事へ行く。

以前はなにかお祝い事や行事の時は無理をしても帰ってきてくれた父だが、その見る影も消え失せた。

考えるのも嫌になってくる。俺はコップに半分ほど注がれた100%オレンジジュースを流し込み、溜息を漏れ出す。

…とにかく父は、10年前から俺達家族に対して父親らしいことをしたことがない。

なぜ父がこうなってしまったのか、心当たりがないわけではない。人間大きな出来事でもない限り、そう簡単に変われはしない。

その心当たりとは、同じく10年前に母が亡くなった事：だろうか。父から病気で死んだと伝えられた。確かにその節がなかったとは言えなくはない。しかし、あまりに突然だった。母には失礼だが、滑稽なほどに。

そこを考慮すると、今の父は最愛の妻を失った悲しみを仕事で紛らわそうとしている…そう解釈することはできる。

肉親の、自分の妻の死は確かに想像の域を出ることはないが、それは鬼すらも涙を流してしまうほど哀しい出来事だと思う。

だが、もうあれから長い歳月がたってしまっているし、この180度回転した態度の変容は、それだけが原因だとは到底思えないのだ。弁護士を務められるほどの精神の持ち主が、妻の死を乗り越えられないとは考えにくい。

別に父が母を愛していなかったと言いたいわけではない。おかしいのだ。

父は俺達に何かを隠している。そんな気がして止まないのだ。

「はあ……」

また深い溜息を一つ。こんな考察、何十回と繰り返してきた。だが結局は『わからない』で俺の頭の中は収束してしまう。

いつの間にか食べられるものはすっかり無くなっており、眼前に映るものは開いた容器達だけだ。

朝食を食べ終わるということは、ここにいる意味もなくなると同義であり、俺には学校に行く以外の選択肢が無くなる。

茶碗を水につけ、俺は学校へ向かうことにした。

丁度天気予報をやっていたテレビからは、若いお天気キャスターが指さし棒で温暖低気圧に円を描いて今後の天気を占っていた。

俺の地域も暫くは晴れらしい。それが分かっただけでもテレビを付けた甲斐があっただけでもんだ。

安心してテレビを消し、鞆を取る。

「いつてきます」

誰の見送りもない玄関から、俺は外の世界へ出た。

雀のちゅんちゅん鳴く声をBGMに、通学路を歩く。

お天気キャスターの予報通り綺麗な青空が、すがすがしい朝をこれでもかと体現してくれている。

登校時間はまばらではあるが、平均して他の連中が学校に登校するには少し早い時間か。

俺と同じ通学路を利用する生徒は、周りを見渡しても数えるほどしか見えない。

うちの学校は家から歩いて20分もかからずにいけるといふなんともありがたい距離だ。

俺は自分の不安定な気持ちを落ち着かせる意味でも、ゆっくり周りの景色を見渡しながら歩いた。

学校まであと一直線でつくところまできた。

例年通り、この道には桜が美しく咲いており、ついつい目が奪われる。

この学校をつなぐ直線の道の両サイドには桜の木が等間隔で並べられており、それは校門まで続いている。

毎年春になると桜は一斉に満開になり、この味気ない道に言葉通り花を添えてくれる。

お花見には絶好のスポットでもあるため、実際に花見シーズンになると花見の客でいっぱいになり、今年も例外なくそうなるだろう。

この通学路を通るのも今年が最後……か。

俺はそんなことを思いつつ道の真ん中を悠々と歩く。

「……ん」

前方にどこか見覚えのある女の子がいることに気がつく。

道の先からでもハッキリと確認することができるその磨き上げられた黒髪。それを惜しみもなくツインテールにしている。

それは昨日こそ左右に揺れて俺の目の前から遠ざかっていたが、今日はその重力に従って大人しくぶら下がっているし、しっかり捕らえることができる。

もう少し近づいてみる。いや、近づくほどでもないか。

彼女は昨日ハンカチを拾ってくれた女の子以外何者でもないではないか。

さっきまで桜に釘付けだった俺の目は完全にターゲットを彼女に変更させ、食い入るように見てしまう。

： いやいや、見てるだけでは駄目ではないか、紅。

昨日のお礼をもう一回述べるべきではないか、紅。

そう決めた俺は、少し足をはやめて女の子に近づく。

女の子は全く気付く様子もなく、俺は容易に彼女の真後ろまで接近することに成功する。

： さて、ここは明るめの挨拶でいってみよう。

昨日俺が妄想を加速させすぎたあまり不審者のような顔になり、彼女には変な印象を植え付けてしまった。

それを払拭するタオルになるような、真っ直ぐな青年という設定で挨拶をして、彼女の不本意な印象をねじ曲げなければ。

意を決して挨拶と同時に横に並ぶように歩く。

「よっ、おはよう」

勿論作り笑^{えがお}いを忘れずに、先輩が後輩へあいさつするような、気軽な挨拶を試みる。

「え？あ？はい？？」

いきなり声を掛けられて驚いたらしい彼女は、素っ頓狂な声をあげてツインテールが揺れてしまう程の速さで声の主へ振り向く。

こうしてよく見ると、女子生徒の身長は俺の胸あたりまでしかなか

った。150を少し超えたくらいだろうか。

漆黒に染まった黒髪から、なんだよこれえ！？といったくなるような甘い香りに少しドキツとするが、辛うじて平静を保ちながらお礼を言う

「え？ああ、脅かしてごめん、昨日ハンカチを拾ってもらったものだよ」

…と追加説明をしておく。

「あ…ああ」

達也のギャグを俺が受け流すときに出てくるような、かなり微妙な反応をありがとう。

脂汗がでてきたいと必死で主張してきている顔から無理に片目ウィンクを作り、てへぺろポーズをする。

こんな見てられない俺をはやくガンジーが助走を付けて殴ってくれないだろうか。

「いやー、ちゃんとお礼ができなかったからさ、ちゃんと言っておこうと思ってね。昨日ハンカチ拾ってくれてありがとう」

その言葉に一切の感情を起伏させなかった彼女は、一応俺を見ながらこう言った。

「え？あ。全然、気にしないでいいです…では…」

そう言うなりそそくさと立ち去ろうと、彼女は足早に俺の隣から離れる。

「あ、ちょ、ちょっと待ってよっ」

俺は少しスキップ気味で女の子に近寄り、再び隣に着く。なんてア
クティブなストーカーだろうか。

横顔からは彼女の心情はわからないが、嫌な顔をされないだけまし
なのだろう。

「ふう、せめて名前くらい教えてくれよ」

「いえ、本当にいいですから…」

ちらつと俺を見るなり俯き気味に彼女はそう答える。俺は完全に嫌
われているのだろうか。

しかし、ここで食い下がる俺ではない。

「いやいや、助けてもらった人の名前を知らないだなんて、俺の気
が済まないってか、失礼だよ」

「そうですか…でも…」

しばしの沈黙

…なんだよこの空気は…

まさかここまで彼女に悪い印象を持たせてしまっていたとは…

そんな俺を嫌っている(？)らしい張本人から、息を呑むような音
が気がした。そして

「く…きm…」

蚊が鳴くような声で言う。

「え？もう一度言ってくれない？」

マイク越しの音を拾えなかったシー マンのようにもう一度聞き返す。…『 がまるで機能しないな、この作品。』

「…」

まるで合格者を発表している掲示板の前で緊張している女子高校生のような、右手の拳を胸に当てて目をつぶってつらそうな顔をしている。

すると意を決したのか、可愛らしいお口に空気が吸い込まれ

「黒羽…雪見…（くろは ゆきみ）です。」

地獄耳でも聞き取れるかわからない声でそういったが、何とか聞き取る。

くろはゆきみ…漢字はわからないが、可愛い名前であることは確かだ。

「くろはゆきみ…ね。俺の名前は 辻村紅だ。昨日は本当にアリガトな」

「あ、はい…。よろしくお願いします。では…」

よっぽど俺という人間に全く興味がいないのか、流れるようにそう言っですつと俺の前を横切り、先に行く。

とにかく俺と話すのが嫌みたいだ。

正直に言おう、ショックだ。

…いや、人見知りなのだろう…とついつい好意的な解釈をしてしまう。

「ああ…行っちゃった。…俺ってkブホヘア!!?」

突然目から火花が散る。明らかにグーパンで殴られたようで、俺は為す術もなく片手を着いて倒れる。

いきなりすぎる出来事に事態をうまくまとめることができないが、誰かに殴られたという事だけはハッキリしている。

「この…」

殴り主を確認するため怒りを顔に出しながら首を振る。すると…

「フッ」

そこにはドヤ顔で俺を見下している、助走を付けて殴ったガンジーならぬタツヤーがそこにいた。珍しく早起きしてきている。

「殴って欲しかったんだろ…？お前の望みは叶えた。」

漫画の序盤で出てくる魔神のような台詞を吐いた達也のスネに遠慮無い蹴りをぶちかます。

「アゲーーっつ！！？な、な、ななにすんだおめえ！？」

容赦ない激痛に耐えきれなかった達也は両手で蹴られたスネを押さえながら涙目で睨んでくる。

「うるせえ、お前に殴られる義理なんかねえってことだよ」

立ち上がり、砂が着いたズボンを払いながら今度は俺が達也を見下しながら言い放つ。

「イチチチチ…、しかし朝からナンパとは、盛んだねえ、ねえねえ」
「見ていたのか…」

なにも一番見られたくない奴に見られてしまった。これは面倒なことになってきた。

一体こいつはどこから聞いていたというのだろうか。
少し声のトーンを落として、やや脅迫気味に聞いてみる。

「…お前いつからいた」

すると、んー…と表情を吟味し、片方だけ唇をつり上げ、目元で笑ってこう言ってきた。

「そう、お前があの子の名前を聞き出していた所辺りかな。でも軽く流されてたな？」

何故か勝ち誇った様な声で言ってくる。こいつに何か言われると、何より腹が立つ。

「…」

「あの子結構可愛いねえ。ちょっと暗いけどなあ。ヤンデレ属性持ちと見た。んーおまえも見る目があるな」

冷静にキャラ設定を解説してくる。

二次元の女の子の設定を現実の女の子に当てはめようとしている辺り、終わってらっしゃるエロゲ脳の持ち主だ。

「ちげえよ。昨日ハンカチを拾ってもらって、それのお礼を言っただけだよ」

このまま勘違いされっぱなしなのは癪なので、端的に彼女との関係を述べておく。

「ふーん？なのに名前まで聞き出すなんて、意味深だなあ…」

達也がにやにやしながらこっちを見ている。

「先行くぞ」

これ以上付き合ってられないので達也が視界に入らない方である学校へ向かう。

「まあ…そうだな。俺たち三年なんだし彼女がほしくなるのも当然かうむだが紅お前はあまりにも恋愛経験が浅すぎる今のままではきっと焦りが生じて失敗してしまうだろうさっきの彼女との会話が何よりも証拠だお前は選択肢をまちがってえらんでいるこのままではバットエンドかノーマルエンドに終始してしまうそれはゆうじんとしてはとてもとても哀しいことだそこで紅この何百人と女の子を後略してきたミスターオンナノコマスター達也にまかせれb…」
上の文は読まなくて良いです。

「っておい！！人の話をきけよお！！！」

せめて句読点くらいつけろよ…

念仏のようにぶつぶつ言っていた達也が後ろから追いかけてくるのを無視して、教室へ向かった。

「…くはあ…」

「くばあ？」

だったらなんだっていうんだよ

ご丁寧に4階にある我が教室を目指してようやく階段を上りきる。

昔は4階から毎日好きなときに外の景色を見られる三年生を少し羨ましく思った。そんな時期が、俺にもありました。

ガラッ

扉を開けると生徒で埋め尽くされたときの独特な空気感はそのこにはなく、朝の気持ちよい風がほどよく通る余裕がある程度の集まり具合だった。

まだ始業のベルになるまで時間があり、朝早くから登校してきている生徒達は席を離れて談笑している。

「みなさんおはようすう」

「……おはよう」

そんなさわやかさをぶち殺す達也君の元気な挨拶で、クラス全体が一つになって苦笑いを浮かべたのを俺は見逃さなかった。

まばらな挨拶が終わったところだし……さて、俺の席はここだったか。なかなか良いポジションである窓側に近い席に座り、一呼吸置いた後、まだ種類の少ない教科書類を出す。

「すごい一体感を感じる。今までにない何か熱い一体感を。 風……
なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、俺たちのほうに」

そう言うて達也は鞆を席に放り投げて飛び出したつきりであるが。こうなると格好の暇つぶしがどこかに行ってしまう、やる事が無くなる。

パーフェクトスマイルマスター栗崎も鞆はあるものの、肝心の栗崎自身がいないので何の意味もない。

『暇』の一文が俺の思考を瞬く間に占拠していく。

無駄な抵抗はせず、さつさと折れて暇に従い寝ておこうか…ん？
伏せようとした目を、俺は伏せることができなかった。

つい10分ちよつと前に見たばかりの既視感たつぷりな後ろ姿が、
教室の隅でちょこんと座っているのだから。

黒羽…！？まさか一緒のクラスだったのか！？

逆にどうして気付かなかったんだと昨日の自分を殴って欲しい。勿
論ガンジーさんが。

…そうか、昨日は全く周りを意識していなかった応酬に、黒羽とい
う存在を知らせてくれなかったのか。

いやまあ、これはチャンスというものだ。

もっかい挨拶してみよう。

…という理性が働くが、反対にまたあしらわれるからやめたほうが
いいという理性も働き、正直迷う。

これが俗に言う『優柔不断』といわれるものだな。…ん、うまいル
ビが振られているじゃないか。

まあ、優柔不断が、優柔不断なりに答えを出させて貰うと、挨拶を
しようと思う。

どうせ嫌でも一年間一緒なわけだし、折角なにかの縁だ。

俺はその腰を上げ立ち上がり、例の美少女に近づく。

教室に通り返ける春風が、妙に俺の肌にまとわりついてくるような
感触を受ける。

彼女の丁度斜め後ろに着き、できるだけ偶然を装いながら一歩踏み
出して話しかけてみる。

「おはよう、またあつたね」

爽やか笑顔とセットで提供する。

よし、掴みは完璧。

「はい？」

先程と全く同じリアクションで振り向いてくれた。

「あ、ああ、辻村君でしたか。おはようございます。」

肩に頭を埋めながら一礼する。その視線は段々俺から遠くなっている。

黒羽のつむじ部分しか見られなくなった俺は、少し見るところをずらし、他の人とは明らかに違う部分に目がいく。

別に黒羽の外見の話をしているわけではない。いや、他の人とは明らかに可愛いのは揺るぎないわけだが。

今はその話をしているのではなく、俺が話題にしているのは机だ。机の上には不自然に机を埋め尽くすほどの教科書やノートが並べられている。

…まだ授業は始まっていないんだが。

なにか違和感を感じる。だが…

…それくらい勉強熱心なのだろうと思いつき、本来の目的である挨拶はまだ終わっていないのでそちらからしようと思いを切り替える。

「俺と同じクラスだね。よろしく」

とにかく今は『黒羽』に集中することにする。

「…、はい、よろしくお願いします。」

そう言うなり、椅子が床を擦る音がしたかと思えば彼女の頭が一気に近くなる。何なのかと思ったら、ただ立ち上がっただけだった。

「す、すいません、用事があるのでこれで…」

早足で教室から出て行く。この間一切俺の顔を見ていない。
やっぱり俺嫌われてんのかなあ…

これ以上ここにいる意味はないので、自分の席に帰る。

そのとき帰ってきていた達也に視線を合わせられ、腕を組みながら意外そうな声で今の俺の行動に感想を述べる。

「へえ、おまえあの子相当気に入ったようだな」

「だからちげえよ。まさか同じクラスとは思わなかったからさ」

「ニヤニヤ」

「声に出していうなよ…」

しかし、ここまで相手にされないととなると、今後俺は関わらない方が良いのかもな…

どこか釈然としない気持ちを抱えたまま、まかり先生の到着を待ったのだった。

「なん…だと？」

その言葉で、俺は四天王を倒したかと思っただけは四天王の中でも最弱と言いつ渡されたときと同じような絶望感を味わう。

「フツ…ついにこうして公にできるときが来たようだな…」

対する達也ははやくやりたくて仕方がない様子。実に滑稽である。

「はあーい！それじゃ、一限目のLHLは、自己紹介してもらいまーすっ」

ロリ巨乳のまかり先生から、小学生に言い聞かせるような口調で高らかに自己紹介開催が宣言される。

しかもこれが教室に入ってきた瞬間そういうのだから、これ以外する気はないのだろう。

どうしてこうなった…

俺はあんまり自己紹介が得意ではない。というか面倒である。

で、あるのにこの自己紹介は自分の印象を4割決定づける大事な儀式であるから無下にすることができない。

そこがまた気怠さを助長してくれる。要は無駄に神経を使うのが七面倒なのだ。

ざわ…ざわ…

教室中がざわめきで支配される。

「は、はいはい、みんな静かにしてえー」

><な目で慌てふためきながら沈静化に勤しむ先生…あざとい、実にあざとい。

やはり可愛いはs（ry

「んー、やだなー自己紹介」

またしても俺の背後にいる栗崎が俺の気持ちを完全に口に出してくれている。

一応前を向きながらではあるが頷いて同意しておく。

「でわでわ、出席番号1番の人からお願いします!」

ようやく静かになったところで、まかり先生は深々と頭下げ、それ平行になるように右手を差し出す。

出席番号一番の男がしぶしぶ立ち上がり、自己紹介し始める。

次号…戦慄…！

ここまでのあらずじ…恐怖の自己紹介開催…！生き残るのは誰か…？

…コロコロでありそうな煽り文はこの辺にしておいて、自己紹介と言えば名前 前のクラス 趣味 一言がセオリーか。

そんなテンプレートに1から3番までの男達は従順にそれにしたがった自己紹介をする。

ここまでは想定内。問題は次のこの男の自己紹介である。

どれだけクラスの連中に悪い印象（良い意味で）を与え、この先過ごしくくなるか（良い意味で）楽しみである。

「次は、4番：お願いしますね」

「はいはい！こーんにーちはー！」

ガラツと椅子を引いてひろ みちお兄さんみたいな挨拶をしながら立ち上がる。

この時点でかなり異質な空気をクラスに呼び込んだこいつは本当にある意味天才である。

手を天高く上げるその姿は完全に自己アピールする小学生と姿が重なる。ええ、揶揄っていますよ。

ここまでで誰のことを言っているのか説明するのは、本人に失礼というものだろう。

「出席番号4番、倉金達也ですっ！」

教室内が若干ざわつく。主にこいつの心配になるほどのハイテンションについて。

「えー、趣味は…エロゲを少々嗜んでいます」

！？

今のこいつの愚言は、口の中に飲み物を含んでいたら間違いなく吹き出してしまうくらい酷かった。

流石に自己紹介でエロゲしてるっていうやつなんていねーよ。わかる俺も俺だが。

クラスの反応はその意味がわかっていてドン引きしているやつと、わかっていなくてきょとんとしているのが半々くらいか。

「えろげ？それって一体なんですか？」

純粹無垢なまかり先生の悪意ない質問であるが、それはまかり先生こそ知って欲しくない世界だ。

世の中知らないことがあった方が良く言ったものである。
ざわ…

教室全体がまかり先生の一言により緊張に包まれる。

「E？先生エロゲ知らないんですか！？人生の4割損していますよ！？」

「ええっ、そうなんですか？ごめんなさい、先生に教えてくれない？」

自分がとんでもないことを聞いているのを自覚しているわけもなく、申し訳なさそうに達也に説明を請う。

それを説明されたら今まで汚れを知らずに生きてきたであろう、心が純白なまかり先生の命が危ない。

達也…と口走りながらボディーブローで止めようとした時には、達也は解説の火蓋を切っていた。

「簡単にいうなら、先生が毎晩夜やっていることをピーーーーーで
ピーーーーーそれでピーーーーー」

達也がピー音混じりで丁寧に答える。

「えええ！？ピーーなゲームでピーーなんですか!？」

「ピーーです」

「ピーーーーー？」

「ピーーーーー」

「ピーーーーー!…わかりました、ありがとうございますっ」

お前らワザとだろ…

というか意外にもまかり先生が積極的に質問しているのはいかに。

これが結婚した女性の力かつ…!大胆…大胆すぎる…!

いや、教師として色々問題ありすぎであるし、俺から右上の女の子
なんて泣いているぞ…

「うわあ…!えろげって面白そうだねえ!」

栗崎が感心した声を上げる。栗崎がエロゲをしている構図など、神
をも冒瀆する。

「頼むから栗崎、そんなこといわないでくれ…」

「?」

そんな眩しい笑顔で小首をかしげないで欲しい。

「そう言うわけで、みんなよろしくなう」

お得意の髪をかき分ける仕草をして達也は見るものに殺意を喚起さ

せるドヤ顔を披露して着席する。

今すぐそこをツッコもうと思ったが、とりあえずさっきのエロゲ談義について指摘する。

「頼むから人前でそんなことは言うなよ…」

「インパクトあつて良いだろ!？」

駄目だこいつ…早くなんとかしないと…

…頭が痛くなってきた。

そんな感じで再び自己紹介が勧められる

俺が自己紹介しているのは割愛するとして、だらだらと進み…

「…」

いよいよ黒羽の番になる。

ある意味俺が一番楽しみにしていた人の自己紹介だ。

人前で話すのが慣れてないであろう彼女が必死に頑張る姿をニヤニヤしながら見させてもらおうじゃないか。

だが、黒羽は凍り付いたように動かない。まるでへびにらみをされて動きたくても動けない鼠のように。

「えーつと？ 出席番号26番さん？あなたの番ですよ」

まかり先生が自分が間違えているんじゃないかと、何度か手元の番号と黒羽を交互に見ながら言う。

生憎俺は黒羽の後ろ姿しか見ることができないため、彼女の今現在の表情がわからない。

「はやくしなさいよねー」

「ハリーハリー」

どこからともなくそんなヤジが飛んできた。しかしそれは達也からではなく女の声達であつた。

お調子者が言うのならともかく、女の子達からそんな野次が飛び込んでくるのは意外だつた。

ざわ…ざわ…

教室がにわかに騒がしくなる。

「は、はいはいー！みんなしずかにしてねー！黒羽さんが発表しにくいでしょ？」

そんなまかり先生のナイスフォローがはいり、再び教室は黒羽がしゃべり出すまでスタンバイ状態に切り替わる。

「はい、それじゃ黒羽さんお願いできる？」

ようやく決心が付いたのか、黒羽は粉薬を飲み込んだときのようにコクリと首を上下させ、静かに立ち上がる。

「出席番号26番、黒羽雪見…です。」

「…」

「…」

この緊張の静けさをスポーツで例えるなら、記録を更新している走り高跳び選手がスタート地点でタイミングを整えている場面と同じである。

「k…」

クラスが水を打ったように静かになる。

そして次の言葉は名前を言ったときよりさらに小さな声であったが、破壊力はこの教室を驚愕させるには十分すぎた。

「か、か、か…れ…し…ぼ…しゅ…う…ちゅ…う…です…！」

な！？

途切れ途切れではあったが、確実にこういった。『彼氏募集中』…と。

黒羽の性格とは全く真逆なこの発言により、クラス全体が爆発したかのような急速さで各々の思いが交錯する。

総理大臣が国会で失言したときに陥るようなこの状況の中、総理は穴に落ちたかのように、どさつと席についた。教室がここ一番の盛り上がりを見せる。

「わ、わーっ！みなさんおしずかに〜〜〜〜」

先生の必死の注意に耳を傾ける奴などおらず…いや、聞こえていないというのが正解か。

そんななかで、ひと際大きい声でしゃべる女生徒たちがいた。

「ちよつとー！自己紹介から大胆ねー！」

「そんなにあせることないんじゃないのー？キャハハw」

「新学期はじまったばかりよー、そんなに男に飢えてるのー？」

キャハハと、女生徒達が笑い合っている。

大胆だなあ…

誰もが思うであろう事を思ってしまう。

「おいおい、辻村が狙ってる女の子、大胆だねー」

ヒューツと言いかねない男が、率直な感想を述べてくる。

「狙ってねえよ…」

言わずもがなではあるが、あれは明らかに誰かに言われるよう指示されている。

わざわざ恥ずかしがってまであんなことを言う理由が何処にあるというのだろうか。

もしさっきの女の子達の言う通り男に飢えているというのなら、もっと俺とかに話しかけてきてくれてもおかしくない。…それは自惚れすぎか。

結論を言わして貰えば、罰ゲームかなにかだろう。そう思うほか無かった。

教室中は、しばらく黒羽の発言で盛り上がっていた

4月4日／火曜日（前）（後書き）

という訳で前半終了です。

父親との関係が、今後のストーリーにどう絡んでくるのか…？
楽しんで頂けたら幸いです。

次回は個人的に好きなキャラが登場しますよ！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日／火曜日（中）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで中編です。少しずつ物語は動かしている…つもりです。とはいえまだまだ日常パートですので、適当に読んで頂ければ幸いです。

それでは、どうぞ！

4月4日／火曜日（中）

黒羽の壮絶なカミングアウトにより予想外に盛り上がった一限が終了し、生徒達の待ちに待った休み時間が到来する。

思わぬ伏兵がいたもので、休憩にはいつてもチラホラとダークホースな彼女の名前が口に出されていた。

そんな雰囲気腰に腰を据える事ができないのも無理もない。噂の張本人は顔から火が出て速攻でここからログアウトした。

確かに可哀想ではあるが、こうして話題に出されるほうが達也みたいに誰にも相手にされないよりましな気がする。

怪我の功名…というやつなのかもしれない。

一方達也はあんなインパクト（笑）の発言をしたのに怪我しかしていないわけだが。

「ふふ、みんな俺の話題で持ちきりなう」

どこまでも都合の良い耳をお持ちな達也は、近いうちに見られるという感覚すら錯覚してしまうかもしれない。

俺も近いうちにこいつに行きつけさせる精神病院をググってやったほうがいいかもしれない。

そんな事を思いながら達也の恍惚にとらわれている間抜け顔を最大限見下した目で見ていると突然その顔が顰めっ面に変化する。

「んん…あいつの声が聞こえたなう」

…あいつ？

「幻聴にあいつもこいつもないだろう」

地の文にするのが面倒なので直々に達也に聞いてみる。

「さっきまでは幻聴だったが、今は違う…」

ニュータイプ

NTさながらなものを感じたらしい達也は、自分が幻聴していたと認めてでもあいつの声は否定するつもりらしい。

こいつにしては潔よかったので、冗談ではないと悟った俺は耳に神経を研ぎ澄ませあいつの声を追いかけてみる。

……

…確かに、あいつの声が聞こえる…というのは語弊がある。あいつの声色は一般的なj - p o pでどんなに伴奏が五月蠅くても主旋律が聞こえるという感覚に非常に似ている。
要はすつごく特徴的ってことである

「ありがたく頂戴させてもらいますわ。それでは」

そして俺達は喉を震わせているものを認識するだけでなく、震わせてる本体もキャッチすることに成功する。

どうやらうちの女子生徒になにかをもらったらしく、上機嫌が見て取れる。

「か、かかか、つか、か神納寺！」

達也が死体を見て叫ぶように、顔を歪ませながら大声で彼女の名前を叫ぶ。

その顔と台詞をもしも演技でやったというのなら、こいつは俳優として食っていけるだろう。

…いや、こいつ割と本気^{マジ}で演技をかましている。こんな所に無駄な才能が…

「？」

そんな声に反応した女子生徒は、後ろを振り返る。

その振り返る様は、キラキラ光るエフェクトが掛かっても何も違和感を感じないそれだった。

彼女の洗練された『ゲイ・ボルグ心の臓を喰らうもの』のような視線が瞬く間に俺達の心臓を貫く。

俺達と確定したらしい彼女は不敵に笑みをこぼして第一声がその艶美な唇から出て行く。

「あゝら、生き方、性格、顔、人生が全て歪んでいる倉金ではないですの」

綺麗な花には棘があると言われるくらいだが、言葉通りの彼女は周囲の人間をあつという間に毒状態にしてしまうほどの猛毒を吐き散らす。

その臭いすぎるほどの貴族を臭わせる話し方は、昔からいっぺんたりとも変わっていない。

ゆつくりと、何度も何度も刺突しながら俺たちの方に歩み寄ってくる。

やられっぱなしは嫌なのか、達也が反撃を試みる。

「それが元クラスメイトに対する言葉ですかねえ。相変わらずだな、かかつかか神納寺」

「さつきから噛みすぎですわよ。なんですか？ かかつかかか神納寺って」

…今「自分でも噛んだよな。おい」

と言うのは頭で変換するよりも先に言葉がでた俺の発言である。

「く…倉金の戯れ言につきあつたままですわっ」

ぷいっとわかりやすすぎて寧ろツツコンで欲しいのかと思いたくなる反応をする。

おう、そうやって取り繕うところがまた可愛いのう。

「そ、そちらも相変わらず阿呆みたいに元気そうでなによりですわ」

まるで立ち絵のように腕を組んでいる姿勢を崩さない神納寺。

…かんのうしなほ神納寺夏帆それが彼女の名前だ。

立ち位置的には攻略対象外k…二年生のときのクラスメイトだ。金髪貧乳微ツンデレという、エロゲコーナーに入って30秒もしないうちにパツケージで見かけそうな特徴である。

そこにツインテールが追加されれば紛う方ないテンプレ鉄板美少女のできあがりだが、生憎彼女はかなり長めのウェーブヘアだ。

二次元の女の子で例えるなら貧乳ツンデレで髪のリュームが若干落ちたシェリルといえばわかってもらえるだろうか。…いくら現実じゃなかないからって『芸能人』で例えるんじゃないやなくて『二次元の女の子』で例える辺り、俺は相当末期なのかもしれない。

これも達也の洗脳に近い教育のおかげである。…はあ…

あとここまでの会話でわかる通り、つくっているのかどうかかわからないがステレオタイプな『お嬢様』口調である。

…元々彼女は存在しなかったのだが、この日常パートが『俺達也栗崎』の会話で埋め尽くされるのを忌避するために誕生したというどうでもいい裏話がある。

逆に言えば個別ルートでは差し支えのない程度しか登場しかない

のが哀しいところである。
そんな不遇なキャラではあるが、個人的には気に入っている。

「つ、辻村殿…そんなわたくしを舐め回すように見ては…／＼／」

普通の人間ならそう思うのが自然であり、神納寺は模範的な解答を示してくれる。

…元々存在しなかった…とか思っていて、ただブーツと見ていただけだなんて口が裂けても言えない。

「まあ…こんなキャラは必要だよな」

達也が突然脈絡もないことを呟く。…俺の地の文を汲み取ってそう言っているのなら話は別であるが。

どうやら『地の文を読み取る程度の能力』を持つ達也にはばっちり観測されていたようだ。

もしかしたらこいつと離れているときでも読まれているんじゃないかという強迫観念に駆られてしまう。

「まあ倉金の意味不明な発言は無視するとしまして…、本当、お久しぶりですわ…辻村殿」

もの凄く感慨深くそう言ってくれるのは非常にありがたいが、別に10年ぶりの再開というわけでもないのに、大袈裟な奴だな。

彼女の気品から手にセンスがあればどれだけ似合っているだろうかと思うが、彼女の右手に握られているのは…

！？

…Gペン？

ないセンスを思い浮かべようと思ったたら先客がいて、しかもそれがBARにジャージ姿でくるような場違いなものが確かに存在している。

Gペンと言えば、アナログで漫画を書くときに一般的に使われている奴ではあるが…なんで彼女がそれを持っているんだ？

「…おう、久しいな」

最もらしい相槌を打つが、心は完全に彼女とは無縁としか思えない異物に奪われている。

なんだ！？彼女は漫画でも描いているのか！？ジャンルは！？二次創作なの！？オリジナルなのかっ！？

Gペン一本ではち切れんばかりに出てくる妄想が止まらない。

「…辻村殿？」

「…ハッ、いやなんでもない」

神納寺が怪訝な顔でこちらをのぞき込んできたので、体裁を立て直すことに集中しすぎてペそんな事を言ってしまう、ペンについて聞きそびれてしまった。

大変興味があるが休み時間ももう終了間近であるし、まあ今度あったときに聞けばいいかと思い直す。

「これからk…おつと」

「どうした？俺に告白することを忘れていたのか？」

神納寺がいつも俺が達也にするような尻目に懸けた目で達也を見る。しかしお嬢様オーラ全開の彼女がそれをすればまたひと味違う。これが本物の見下しなのかと敬服すら覚える。

「…倉金に告白する時間がありましたら気泡緩衝シート（きうほうかんしやうしーと）を潰つぶしている方がよっぽど有意義ですわ」

「ズキユウウン…！ ああ…もう我慢できない…踏ふんで下さい」

サウンドエフェクト

セルフSEを入れながら簡単にドM心を擽くられた達也は人としてどうかと思う発言を当然のように言う。

「なら跪ひざまきなさい」

「ワンツツ踏ふんでワンツツ」

「ノリノリだなおい！」

俺が神納寺にツツコむと、とってもドSっぽい、婉艷わんえんの中に攻めが入っている表情を残しながらこっちを振り返り、口元を僅かに上げてこう言った。

「ホホホ、こんな下僕がいれば乗り気にもなりますわ」

oh…冗談で言っている気がしない。

「もう次の授業が始まってしまいますわ。名残惜しいですが、わたしはクラスが違います故、これにて失礼させて頂きますわ」

跪ひざまきっぱなしの達也を放置してそんなことを言う。これが噂の放置プレイかつ。

「お、おう、またな」

「ごきげんよう」

その綺麗な顔に見合った笑顔を見せて教室から出て行く。

神納寺夏帆…謎が多すぎる子だ…

「ハッハッハッハッ」

踏まれ待機しているこいつの尻を思いつきり蹴るか迷ったが、ここは神納寺に習って放置することにした。

「ハッハッハッハッ」

：

「ハッハッハッハッ」

：

「ハッハッハッハッあギャウンっっ！？なんでお前が蹴るワン！！謝れ！謝れワン！！」

「うるせえお前のせいでいつまで経ってもフェードアウトできねーんだよ！」

この後も適当に時間が流れ、授業が終わってようやく昼休みになる。当たり前ではあるがこの学校に給食という制度は存在しない。

その代わり所謂学食が別館にそびえ立っており、暖かい飯を求める者は食券を握りしめて昼休みを告げるチャイムを合図に一斉に走り出す。

弁当、パンを持ってきているものはゆったり教室で仲の良い友達と食っている。

それらの中間に位置する（？）のが購買部であり、弁当やパン、飲み物が心せましと並べられている。

そこも休憩の10分くらいは戦争状態であり、ちょっとした満員電

車を味わうことができる。

この三つの選択肢の内どれを選ぶかは生徒次第というわけだ。
さて…学食までは行くのは億劫だし、一人暮らし同然なので弁当もないし作る気もない。

そうなると残るのは購買に行くという選択肢だけだ。さて、達也でも誘って…

「はははっ、あはははは！いやいや、そこまで見透かされているとはね。これでは私だけが愉快な道化^{ビエロ}ではないかっ」

某中2病キャラであるヒノエさんの名言を声優ぶって音読するが棒読みなので折角のセリフが陳腐なものになっている輩がいる。
誰がだなんてもはや愚問である。

「おら、小説読んでないでさっさと昼飯を買いに行くぞ」

「なぜなら私は世界^{君たち}を滅ぼす絶対悪なんだ^{ドラゴン}」

「うっせえいつまでやってんだよ」

「なぜなら私は世界^{君たち}を滅ぼす絶対悪なんだ^{ドラゴン}」

腕をピンと伸ばして本を読んでいる小学生に軽い手刀をいい音が鳴りそうな頭に食らわす。

「ウツ…、ふう…」

その一撃でぱたんと小説を閉じた達也は何故か賢者モードに突入していた。

「…さ、昼食を買いに…なぜなら私は世界^{君たち}を滅ぼす絶対^{ドラゴン}悪なんだ」

ルビがずれてでもそう言いきった達也は立ち上がり、すまし顔で出て行く達也の後を追って購買に向かうのであった。
いっておくがツツコむ気は毛頭ない。

1階にある購買部に到着する。

俺達三年生は4階にあるため、2階や3階にいる一二年生に必然的に距離のハンデを与えることになり、更に先程の会話によるロスタムで俺達が到着する頃には人が溢れかえっていた。

相変わらずの盛況ぶりで、このゴミゴミとした風景は始業式の帰りを彷彿させる。

欲しいパンや弁当を我先と購買のおばちゃんに差し向け代金を払おうとしており、おばちゃんたちは目を回しながら怒涛の有限の多連^{ミリテッドジェットストリームア}タック星に対応している。

こんなに人がいたら、捌けた頃には弁当は完売し不人気パンの残骸が戦場後に転がる末路だ。

俺も1年の頃はこの戦争に積極的に参加して欲しいものを強奪していたものだが、全て食い尽くした今、体力を削ってまで参加するほど欲はない。

大人しく余らない日がない『今最高に売れています！』という煽り文句が値札の上に書かれた『生トマトパン』とコッペパンをほぼ全部くりぬいて粉砂糖をただ詰め込んだピザ^{デフ}ご用達の『ピザパン』という、パンの名前が煽りという斬新なパンを買おうとしよう。
もう少し引いてきたら買いに行こうかな。

「人混みがうつとおしいからここで少し待とうぜ」

購買部から少し離れた場所で事の成り行きを見ていた俺と達也。右肩隣にいる達也にそう通告する。

「よかるう」

片目を閉じてゆったりと頷く。

あー…いるよな、特定のキャラが好きすぎてその口癖とか決め台詞を連呼する奴。……なんだこのもやもやとした気持ちは…

「同族嫌悪　ってやつだよ」

「うるせえその通りだよ、いわせんな恥ずかしい」
「はっはっは」

扱いづらい達也を横目に、バーゲンコーナーに群がるおばちゃんのような学生が三々五々していくのを待った。

それから五分後、人の出入りが良い塩梅になってきたので、さっと買い物を済ませる。

「さ、どこで食おうか」

！？

至極普通に聞いてきやがった。

さっきの設定は最初から無かったかのような態度の達也に少々面食らう。

初めから口クな答えなど期待していない、いわば徒労とわかっているが、達也に申し出てみる。

「お前さっきのキャラはどうした」

「は？キャラア　？気持ち悪いこと言わないでくれない！？全く、

これだからキモオタは…」

腕を組んでそっぽを向きながらという伝説のポーズをやりながらその答えやがった。

こいつ殴りたい…

「そ、その言葉をそっくりそのままお前に返すことにして、じゃあ…」

1 屋上

2 教室

3 職員室

…と本来ならここで選択肢が3つ出てくるわけだが、俺はこれを選ぶことしかできない。

「屋上で食つか?」

こんな天気の良い日は外に出て食うのが一番だろう。

「屋上へ行くこうぜ…久しぶりに…キレイだったよ…」

…という訳で屋上に到着する。
勿論屋上という位なのだから、学校の一番上…つまり5階に位置する。

俺と達也は1階の購買部からここまで来たわけだから、一気にのぼってきたということになり、額に少々汗が滲むほどの疲労を強いられる。

そんな学校の屋上は生徒達も自由に出入りができ、昼休みの憩いの場となっている

というかあんまりギャルゲーで屋上が解放されていなかったり、舞台にならないって事はないような気がする。

それにこの作品もすっかり踏襲しているわけだ。

憩いの場と今謳ったばかりだが、夏は熱すぎて冬は寒すぎて利用者は激減する。

が、今のうちに非常に過ごしやすい暖かき春なので、爆発的に利用者は増幅する。

今日も屋上はちょっとした祭りでもやっているのかと錯覚するほどの人ばかりだ。

「今日も賑やかだな」

各人が思い思いの昼休みを過ごしている風景を眺めながら率直な感想を述べてみる。

一方達也は目を細めて顎に手を当ててなにやら呟いている。

今朝黒羽にそうやったように聞き耳を立てる。

「この状態でもしテロリストが来たら俺はこうしてああやってこうなって…ブツブツ」

…ラリアットを食らわせた気持ちをグツとこらえながら中2病バリバリな達也を生暖かい目で見える。

「…あそこで食おうか」

俺が指さす先には丁度カップルがベンチから腰を上げているところだ。

そんな彼等を見た達也は片目を半目にしてゆるい笑みでこう言った。
「ん、なんだリア充か。でもあの男はせいぜい2、3人としか付き合ったこと無いんだろうなあ。フツ、俺なんてもう300人は超えたぞ？ん？」

これが現実と空想の区別つかなかった末期患者の典型的な症状か…非常に良いサンプルになりそうだ。
そんな末期患者^{たつや}は、彼に負けているのに誇らしげにそんな妄言を言うのだからもうどうしようもない。

「俺にドヤ顔されても困るんだが…。それにお前は2Dとしか付き合っていないわけで、あの人とは付き合っている人の次元が違う。」

正論を言っ たつもりだったのだが何一つ顔色変えずに達也は反論してきた。

「はあ！？俺ちゃんと『3Dカスタム小学生』で3Dの彼女と付き合っ たし！はい完全論破！！」

oh…

「も、盲点だったわ（棒）。すまない…」
「ふつ、若さ故の過ちって奴だな。気にするな」

oh…

「まあどうでもいいや、座るか」

達也の返事を待たずに歩き出す。春の陽気が俺を誘ってきて仕方がないのだ。

「ま…待ちなさいよっ」

『お嬢様系ヒロインが言いそうな言葉ランキング』第6位にはランクインしてもおかしくないセリフを言いながらしっかり付いてくる。

「よいしょっと…」

達也と馬鹿な会話をしていたせいで他の誰かが先に座ってきてもおかしくない状況だったが、幸運にも座ることができた。

このベンチの2メートル前後の正面には柵があり、その網の向こう側は所謂空中なわけだが、更に視線を奥へ向けるとこの町をうまい具合に見渡せるかなりおいしいポジションだ。

あれがデネブ アルタイル ベガ…と夏になれば夏の大三角を指さし覚えて空を見るリア充カップルが増える場所でも有名である。

そんな非リア充お断りなベンチに両方非リア充な男二人が堂々と座るのはいかなものか。

本気^{マジ}もんのカップルからひややかな視線が送られているのか、爽やかなはずの風が妙にしめっぽい気がする。

「ハムツ ハフハフ、ハフツー！」

鋼の心を持つ達也は全く気にした様子もなく購買で買ってきたのり弁をカツ食らっている。…その弁当冷たいはずなんだがな。

実際の所あまり俺も気にしているわけでもないので、遠慮無くトマトパンの包装を破り、かじりつく。

…

味は悪くないのだが如何せん生トマトなため好みが分かれるのも当然だというのに、嘘についてまで売ろうとするのなら販売中止にすればいいのに。

あれか、売れないはずなのに残っているといえば某ファミリーストランの『梅昆布茶』と同じか。…好きな人がいたら謝る。

そんなどうでも良いことを黙考しつつ、パンを咀嚼する。

ゴクリと一口目かじったパンを完全に飲み込んだ時のタイミングだった。

「…なんか視線を感じるわ」

唐突に女口調な男の声が耳に入る。

その氣の人間が近くににいるのかと疑ったが、その行為がどれだけ無駄なことかと思い直す。

隣の奴以外誰がそんなことをするだろうか、いやしない。

しかしながらムードクラッシャー雰囲気殺しな達也がこの視線に気づけるとは意外だ。

「意外だな、この視線がわかるのか」

と、ついつい感心した調子で言ってしまうほどだ。

その言葉に達也はなんの違和感も感じず、気障に笑ってまるで真犯人を指摘して勝ち誇ったような顔をするのだから笑ってしまう。

「フ…、なんせ、この視線は『女の子』のものだからな。我の鉄のアイアンメイデン処女の範疇にあるものを察知するなど、造作もない」

「そんな所だけめざとい達也はあながちオンナノコマスターの称号は伊達ではないのかもしれない。自称だが」

「なんだよその地の文は。それよりこの視線はマジだぞ、マジ」

のり弁を手元に置いてまで熱弁する辺り、マジらしい。

だからってキヨロキヨロして探そうとするのはなんか達也に負けた気がするので、俺はあくまで気にしない体で貫く事にする。

「ままmままmままm全くう！だだだっだ誰だよおお。俺をみみ見つめる奴はああ。まま、まあ、おお俺は全然つつ、きに、き、気にならないけどな？」

そう言いながらレーダーのようにグルグル首を回転させており、さつき自分が思ったことをぶち殺したい。

相手をしてられないのでコーヒー牛乳と言う名のコーヒー風味の砂糖水を一口啜り、甘い感覚を舌で満たしていると

「す…m…ん」

唐突に女口調な女の声がかるうじて耳に入る。いやそれ女だよ。

そしてこの声の主は俺の予想の範疇を超えていた。
振り返り、その主に驚愕する。

「黒羽…？」

俺達の真後ろに立つ、黒髪を軽くなびかせる少女は、逆光のおかげもあるのか全身がやや黒く見えるその姿は天国へ迎えに来た天使のように見える。

だがその正体はクラスメイトであり、自己紹介で爆弾発言をした美少女…黒羽雪見である。

っていうか達也はこんなに近くにいたのにどうして気が付かんのだ。視線は気づけても姿は気づけない、何とも役に立たない鉄の処女のようだ。
アイアンメイデン

達也が気づけなかった黒羽は若干息を切らせながら立っており、一番最初に合ったときと姿が重なる。

「こ…ここにいたんですか…」

「黒羽？一体どうした？」

台詞から察するに彼女は俺達（？）を探してくれていたみたいだ。一番俺に近づかないであろう彼女が何故話しかけてくれたのだ？そんな疑問は直ぐに霧散したものの、別の疑問が浮かび上がった。

「……さっきの事を…謝ろうと…思って」

黒羽が自信なさげな声でそう言ったから。
謝る？何を？

「ん？いやいや、当然の事をしたまでさH A H A H A あいちぢぢぢぢぢ！」

達也が適当に文脈を解釈して適当にそんな事を言ったので、頬を抓って黙らせる。

「さっきの事って？」

頬に手を離さずにそう聞いてみる。

黒羽には悪いが思い当たる節がないし、むしろ俺が謝らなければならぬんだろうか。

そう意中を考えていると黒羽は実に重いであろう口を必死になって開きながら答えた。

「折角…話しかけてもらったのに…わたし…冷たくあしらったから…すみません…人と話すのが私…苦手で…。それに…人に話しかけられるのが…久し振りで…驚いちゃって…つい…」

俺から無意識にはずれてしまう視線を無理矢理合わせようとする黒羽の必死さがひしひしと伝わる。

やはり黒羽は人と話すのが苦手なみたいだ。

だがそんな彼女がこうして俺を探して、勇気を振り絞って来てくれたのは大変光栄なことであるし、なんて律儀なんだ。

「いや、俺のほうこそゴメン。なんか不良^{DOZ}みたいな振る舞い方をして怖がらせてしまつて」

自嘲気味にそう返事をする。彼女は困った表情になつてこう言つた。

「い、いえ…そんなことないです。私が悪いんです。本当にごめんなさい」

途端に彼女のつむじが露わになる。勿論黒羽が深々と頭を下げたから。

「そ…そんな頭を下げなくても…。ほら、頭を上げて」

思わず立ち上がり彼女の元に寄る。周りからしてみればかなり異様な光景である。

ゆつくりと俺の足元からだんだん顔を見上げる形で上目遣いをしながら顔を上げる彼女にドキリとしてしまい、顔に出ていないか心配だ。

こんなCG^{一枚絵}があつたら達也は有無を言わず即保存してしまうだろう。

「…ゆるしてくれますか？」

それこそ神に懺悔し許しを請う修道女な彼女を許さない理由などの世にあるわけがない。

それ以前に許す許さないの話ではない。

「許すも何も、俺はそう言われる筋合いも理由もないよ」

そう黒羽に伝えるとほんのり笑顔を垣間見せてくれた。

こんな場面で彼女の初笑顔を拝めるとは思ってもみなかったわけであえて言おう、可愛いと。

「でもでもさ黒羽ちゃん、人と話すのは苦手なのにさっきの自己紹介ではもつとチャンスを欲しがってたみたいけど？」

この良いムードの中、なんとも達也がグッジョブ無神経な質問をしてきやがった。おう、俺もそれ気になってたよ、実際。

「~~~~~!」

そんな疑問を投げかけると黒羽は忽ち完熟トマトでもこんなに赤くならないぐらい真っ赤になる。

それが意味するのはたしてどちらなのか。

「い…いえ…あれは…その…罰…罰ゲームです…よ」

胸前に軽く握った拳を押しつけ、前屈みで小首をフルフルと振りながら声を絞り出してそう言う。

それを唇を歪ませ何かを期待して聞いていた達也はあからさまに残念そうな溜息をついてこう言った。

「なんだ罰ゲームだったのか…羞恥プレイが好きなヤンデレ女の子っていうかなりレアなキャラかと思ったのにさ」

もはやこいつと同じ生物でいるのが恥ずかしくなってくるような事をかろつじて黒羽には聞こえていないみたいだが平然と言つてのける達也に痺れる憧れるう！…なわけねーだろ。

「く、黒羽、変なことを思い出させてしまつてすまない。ま、まだ昼飯も食べていないだろ？早めに教室に戻らないと昼食が終わつてしまつんじゃないか？」

とりあえずこれ以上達也が余計な事を言つてまた変な誤解を作るのはゴメンだ。

一刻も早く黒羽にはこいつから離れて欲しい一心でそう聞いてみる。

「そ…そうですね…。謝ることはできましたし…」

涙目になりかねない瞳を向けてそう言う。随分前向きに捉えてくれたようで嬉しい。

「そ、それじゃあわたしはこれで…。本当にすみませんでした」

「ああ、本当に気にしなくて良いから。わざわざありがとう」

まだ赤みが抜けきつていない小顔を縦に深々と振り、彼女は屋上の出入り口のほうに足を運んでいった。

二人でしばらくその姿を呆然と見つめる。

あんなに綺麗な髪だったら画家は色塗りがさぞ楽なことだろうと、改めてそう思った。

「…達也」

彼女の後ろ姿が完全に階段のほうへ吸い込まれた後、俺は言いたいことを言わせてもらった。

「ん、どうした？」

「どうした？じゃねえよ。三次元の女の子は『耳』ってもんを持っているんだ、お前のさっきの言葉が聞こえていたらドン引きじゃすまないんだぞ？そりゃ二次元の女の子は画面の向こう側にいるわけで、お前がいくらブヒブヒ言ってもシナリオ通りにしか喋らないけどよ」

このエロゲ脳に現実の女の子しかもっていないものを教えてやると、一拍置いた後、なぜか殊勝顔になりこう返事をした。

「そ…それは…。……。紅…お前は気付いて…いないのか？この…『試練』に…、だ」

「なに？」

「俺は初めから自分の株なんてきにしちゃあいない。問題はお前の評価をいかに下落させるか…」

達也は空になったコーラのペットボトルを左手に打ち付けながら語るような口調でそう。

パツと聞けばそれはそれは酷いことだが、達也の話し方を憶測するに、ただ『遊んでいる』だけだ。

「俺は道化^{エロ}を演じることによって君たちを試していたんだ。…そう、初めからいつているだろう？」

酒が無くても自分の世界に泥酔できるこの男は、とびっきりのドヤ顔でこう続けた。

「私は世界を滅ぼす絶対悪なんだ（ドヤア^{君たち}）」

「嘘こけ！！後付の言い訳じゃねえか！！」

「あへえ!？」

達也のペットボトルを奪い、全力で頭に叩きつけたのだった。

面倒な掃除が終わり、午後の授業が始まる。

俺の掃除場所は4階男子トイレというサボるには絶好のエリアなのだが、問題はメンバーであり、省略したい気持ちを堪えて言わせてもらえば、達也である。

こいつと一緒に掃除などそれは掃除紛いなことしかできず、俺は終始ツッコみっぱなしだった。

おかげでかなり疲労をため込む結果となり、この5限は睡魔との死闘で終わりそうになる…。

…かと思えば、時間割を見ればその瞬間、睡魔の圧勝で終わることが決定した。

なぜなら5限はあのEr…ロリ巨乳のまかり先生プレゼンツの現国だったのだ。

以前記したように彼女の授業は練乳も凌駕する程の激甘な先生であり、俺が居眠りしたところで先生にとってそれはただの生徒に過ぎず、叱りつける対象などではない。

という訳で俺は安心して安眠できる。…なんか頭痛が痛いみたいになっっているな。

「は、はあーい!皆さん授業をはじめちゃいますよー!」

身長の低さが本人が狙わないあざとさと呼ぶ。というのも教卓がまかり先生の大半を隠し、残るのは胸から上だけだから。

嫌でも見ざるを得ないその格好に、あざといと呼ばずなんと呼ぶ。

こうして子どもっぱいあざとい挨拶でまかり先生が授業の開始を宣告する。

ロリコンの目を殲滅させる姿に達也はとくに天に召されていたが、幸い俺はそんな性癖を持っていないので依然として眠気が襲撃し続ける。

「ふぁ…眠い…」

こんな気持ちいいポカポカ陽気を前にして昼寝をしないなど、ハンターがマタタビを持っていたてもそれを盗まない　アイルーみたいなものだ。

ここは生理的欲求に従ってしばらくの休息をいただくことにしよう。

「あふ…」

一眠りしようとして、体を傾ける。この調子なら数刻程眠ってしまうことが出来る自信がある。

……

…グサツ

「…」

何かが刺さる。

だが意識が朦朧としている俺にとってそんな事は実に些細なことだ。しかし…

メメタア！

「いつてっ！？」

眠っているとき突然体がビクつくあの現象が何者かの手によって意

図的に誘発される。

無理もないよな、メメタアとシャーペンらしきもので背中を刺されたのだから。

「くつくくつ…」

後ろから笑をこらえた声がする。俺が知らない間に席替えがあった以外なら、誰がやったのかは明白だ。

「なんじゃい栗崎」

普通に後ろを向く。

「あはっ」

肩くらいまでのびている栗色のストレートの髪で、大きい三角のピンで髪を分けている少女がケタケタと肩を揺らしながら笑っている。陸上部主将、栗崎あずきが俺の眼前にいる。

「授業中にメメタアは卑怯だろ」

「アハハッ、ごめんねっ。でも授業中寝ようとする辻村君もわるいよお」

これ以上ない正論を言われて完全に反論の活路をふさがれてしまう。
…くそっ。

「うつ…まあ、それを言われたら何も言い返せないな」

両手をあげて参ったポーズをすると栗崎はシャーペンをまわしながら

「うんうん、授業は真面目に受けないといけないよ。定期考査赤点とつちやうぞつ?」

「わかったよ、受ければいいんだろ? 受ければ。でもその前に」
「んー?」

俺は栗崎の視線を誘導するようにゆっくり達也のほうにシャーペンで軌跡を描く。

「こいつをおこしてくれよ。俺だけじゃ不公平だ」

厳密に言えばこいつは寝てなんかいないし、現にこいつは目を開いて起きている。

だが精神は完全に飛ばしているのだ。いつてしまえば植物人間状態。そのことを主張すると栗崎はもの凄い不思議なことを言われたときのような顔をする。

「何であたしがそんなことしないといけないの?」

!?

「え? おまえ、授業はちゃんと受けないとだめだって今言っただじやないか。なら、授業をちゃんと受けていないこいつも起こすべきだろ」

「あたしそんなこといったっけ?」

!?

10秒前に自分がいったことすら忘れたことを証明する爆弾発言。
え?! 言ってることがちぐはぐすぎてすっげえ戸惑うんですけど!?

「それにしても今日は暖かいね。あたし何だか眠くなってきたやつ

た」

え？

「お、おい！ちょっと待てよ！？おまえさっき言ったことと180度回転しているぞ？」

「ふえ…？今日ほど寝るのに適した日はないですよ。それじゃあ、お休み〜」

「矛盾だ！矛盾だっ！！」

つい声をあげてしまった あ…

「辻村君ー？今は漢文の時間じゃないですよー？今は現代小説（笑）『はなだね』の5ページの23行目をよんでいるところですよー？」

まかり先生が小説ですらないものを読んでいたのでそこを突っ込むと思ったが、今はやめておく。

「す、すいません…！」

適当に謝ってこの場をやり過ごす。

「りようかいですー。では続きを綾村さんおねがいしますね〜」

授業を通常状態へとシフトさせることに成功させて微弱に安堵をした俺は、改めて栗崎に顔を向ける。

「栗崎つつ」

「くくくくく…」

栗崎がまた、笑いをこらえていた。

その姿を見た俺に一筋の閃光が脳内を駆け抜ける。

罠だったのだ。俺を陥れるための……！

これは全て孔明の罠だったのだ……！

……なんだよこの×は……

4月4日／火曜日（中）（後書き）

という訳で中編終了です。

本文のなかにも書いてある通り、神納寺は元々存在しなかったキャラですので

彼女が行う行為に物語を動かす力はありません。

つまり神納寺との関わりの部分が無くても物語は正常に進むという事です。

なにこの言い訳って思う方は、是非次回もご覧下されば幸いです。

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月4日／火曜日（後）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで後編です。

すみません今回作中でも突っ込んでいますが400行を超えています。それどころか500行も超えています。

グダグダな文章ですが、本当に暇があるときに読んで頂ければと思います。

それでは、どうぞ！

4月4日／火曜日（後）

「…という訳で、これで授業をおわりますねー」

日記を書くときは最初会話文から入れるといいねと小学生の先生に言われた記憶が何故か蘇った。

そんなどうでもいい事を考えてしまうほど、俺は悔しさと錯乱しているというのか…？

俺は深呼吸と勘違いされるレベルの息を吐き出しながら、国語の教科書を机に突っ込む。

栗崎氏による孔明の罠に嵌められてすっかり眠気が雲散霧消してしまった俺は、結局普通に授業を受けきってしまった。

なのに栗崎はあの後本当に寝てしまったのだから俺はまめ鉄砲を食らったハトのような顔にならざるを得なかった。

この栗崎にしてやられたことによる敗北感が非常に齒がゆい。

しかしこの『はなだね』にでてくる友人が達也にそっくりというか酷似というか、気持ちが悪いくらい似ているので授業中ずっと嫌悪感しか頭を支配しなかった。

…まあなにがともあれ休み時間に突入したんだ。これで先生に邪魔されることなく栗崎と決着をつけるときが来たようだ。

おっと、好敵手ライバルにこれ以上背中を向けるのは失礼というものだ。

俺はトラップを仕掛けた本人に話す体勢を整える。

「栗崎てめえ…。俺をはめやがってっ…！」

栗崎孔明は丁度教科書類をしまい込み、小さな伸びをして授業に耐えた己の体をを労っていた。

そんな時に俺が悔しさを露わにしながら問いかけると、栗崎は格闘家ミルコ・クロコップの『お前は何を言っているんだ』みたいな

顔になる。

そして彼女はそんな顔通りの台詞を言ってくれた。

「え？あたしなにか辻村君にいったっけ？」

「な…？」

ひよっとしてそれはギャグでいつているのか？

ひよっとしてそれは俺を試していつているのか？

挑戦されたからにはそれに応じなければ。

「寝るなっていつておいて自分は寝てたじゃねえか」

「う、ううん？ごめん、あたしなんにも覚えてないっ」

露骨にキスしたいような唇を作り、首を斜め45度に傾け、困ったような表情で左手の人差し指を頭に当てるといつ達也がやればガンジーすらも殺意の波動に目覚めて瞬獄殺するレベルのポーズを取る。これは栗崎だからこそ可愛い。たとえどの角度で見ても…だ。

…と、そんな事を考えている場合ではない。

今は冗談なのか素なのか判別付かない彼女のその言葉がそのどちら側に属しているのかを頭の中で談義する方が優先事項である。

そう思うほど本気ではないが。

「やれやれだぜ…」

「あはっ、もしかして怒らせちゃったかな？」

至って普通の言葉なのに俺ぐらい教祖タツヤに汚染されているとどっちの意味で言っているのかわからなくなる。

『テメーは俺を、怒らせた』と言つべきか思い惑ったが、やめた。

「いや、もういいさ」

二年生の頃から彼女はこの性格は少しも歪まず、たびたび俺達を混乱させてきたが、何故か憎めない。

人はそんな俺を甘い男だと思うかもしれない。だけど

「ごめんねえ、あたし午後の授業になるとなににいいだすかわからないからっ」

これだよ。

二カつとつい花丸をあげてしまいたくなりそうな100点満点の笑顔をされたら、変なことを考えるのも馬鹿馬鹿しくなるというものだ。

この笑顔こそが、彼女を恨めない最大の理由なのかもしれない。

そんな彼女は天然キヤラっぱいが、実は成績上位者の常連であり、一部では成績四天王の一人とまで噂されている。

『ククク…奴は成績四天王の中でも最弱…。だから成績最上位者な我が力を貸しているのだ…！』
スクールブレイン

…ああ、これは成績最底辺者が勝手に噂にしたんだった。

「それじゃあたし、チヨイと購買部に行ってプリン買ってくるねっ」

そんな事を考えているうちに栗崎はいつの間にか可愛らしいがま口財布を手に持ち、そんな宣言をしていた。

はにかんだ笑顔を浮かべ、子どもっぽく立ち上がるその姿に俺は少しだけ元気をもらったような気がした。

「ああ、いつてらっしやい」

別に断る理由もないので、快諾する。

栗崎はそれに頷き、軽やかなステップで踵を返し、なにをそんなに

急いでいるのかわからないが猛ダッシュで教室から脱走していく。

「いつてきまーすっ」

挨拶に遠近感が出てしまうくらいのスピードに思わず苦笑いしてしまう。
流石100M短距離走者。スプリンター

さて、栗崎が疾風の如く教室から出て行ってしまったのでやる事が無くなってしまった。

「……」

隣を見ればまだ放心している達也は比喻でもない『心ここにあらず』
ってやつだ。なにこいつ幽体離脱でもしたのか？

はやく三途の川に流されなかなと思いつつ、肘をつきながら各々がそれぞれの休み時間を過ごしている教室を適当に眺めていると

「あ、神納寺さん、仲吉君の居場所わかる？」

俺はこの後、適当に眺められはしない事態を目の当たりにすることになる。

きっかけはうちのクラスメイト…俺の目の前の席にいる子が神納寺にそんな珍紛漢紛な申し出をしたときからだった。

お前は何を言っているんだ。

教室のと真ん中で、事件は起こる。

その申し出にどこかへ行くこうとしていた神納寺は呼び止められ、どうしたのかしらと言いたげな顔でこう続ける。

「仲吉君？ああ、このクラスの子ですわねえ…。その人にいったい何の用事がありで？」

そのアイデンティティがふんだんにある口調と声のおかげで、教室の隅のほうにあるここからでも、十二分に彼女の声は聞き取れる。ゆっくりとうちのクラスメイトに歩み寄る。彼女の相棒であるGペンをしっかり右手に持ち、余裕ある態度を持つ神納寺はやはりどこからどう見ても貴族だ。

ってかなんだ、その普通の対応は。

「うん、仲吉君から借りた本を返そうと思って」

そんな謎な会話が俺の4メートル先で行われている。

「そういうことでしたの。本名を教えて頂けなくて？」

「あ、なかよし まなる仲吉 優です」

だからなんなんだと、俺の頭上には「？」の文字が土砂降りのように降り注ぐ。

「わかりましたわ。では…」

そういうなり神納寺はなんでそんなところにあるんだと突っ込みたくなる場所であるポケットからインクを取り出す。

いや、百歩譲ってGペンを持っている神納寺がインクも持っているのは不思議じゃないでしょう。だが大事なことで2回言わせて貰う。だからなんなんだ。

その言葉と行動が全くかみ合っていない彼女に俺は最大限気持ちを集中させてその結果の果てを見届ける。

「それでは」

神納寺はGペンに手際よくインクを付ける。そして机の上に乗っか

っているざらしにペンの先をつける

…？

「仲吉 優の居場所を教えたまえ！！」

ちよつと何を言っているのかわからない彼女の頭を本気で心配する。するとざらしにしみこんでいるインクがだんだんと浮かび上がった。

…は？

「はっ！」

俺の発した言葉とは全く性質の違う『は』を一喝すると、浮かび上がったインクが飛び散る。

…は？

そして神納寺はなんの迷いもなく飛び散ったインクを目印に、丁寧になぞり始める。

目の前の光景が、ライトノベルの魔術師がよくやるような儀式のように見えてきた。

…あながちそれは例えでも何でもないかもしれない。

そんな神納寺のキチガイじみた行動なのに何故か筋が通っている神妙と呼ばずにはいられないその行動に、結末が迎えられる。

「…わかりましたわ」

額を拭った神納寺は、女子生徒になぞった紙を差し出す。

「わあ、流石神納寺さんね」

こんな奇跡を見逃しまいとちなまこになってそのできたてほやほや

の紙を凝視する。

「…？」

そこに描かれているのはなにやらなにかの見取り図みたいで、具体的になんの見取り図なのかはわからない。

「ここですわ」

神納寺は見取り図の右端に最初ペン先をつけたであろう、大きくにじんだ所を指さす。

「わっ、ありがとう！じゃあ、行ってくるね！」

クラスメイトは何がわかったのかちっぽけも理解できない俺を差し置いて、嬉しそうな表情を浮かべてさっさと教室から出て行った。

「急がないと、移動してしましましてよー？」

神納寺がもはや呪文ではないかと懷疑してしまうような台詞を彼女の後ろ側から投げかけている。

落ち着け…素数を数えて落ち着くんだ…。

2…4…6…8…っておい。

偶数を数えてしまっている俺は全く落ち着いていないみたいだ。

この気持ちをぶち殺してくれる神薬を処方してくれるのは術を唱えた本人しかない。

メデューサの魔眼による石化を解除するのはメデューサの血しかない。

俺の目の前で超常現象を起こした彼女に俺はたまらず立ち上がり、彼女に詰め寄る。

「か、かか神納寺！」

「また達也はわたくしの名前を囓んでって…辻村殿!？」

いや、今のは囓んだ訳じゃないと弁解なんてしている場合ではない。喉から手が出てしまっているこれを押さえつけて欲しい一心で、素っ頓狂な顔を見せる神納寺に少し圧迫感のある言葉をぶつけてしまった。

「どうしたもこうしたもない！今一体何をした!？」

「な、な、なにごとですの？そそんなに大声を出されて…／／／」

なんでそこで『／／／』が出てくるんだよだなんて今は達也の存在くらいどうでもいい。

「今一体なにが行われたのかと聞いているんだ」

「な、何をしたっていわれなくても…。わたくしはただ人の居場所を教えてあげただけですわよ？なにもおかしいことは…」

重い荷物を持つて歩道橋を上がるおばあさんの荷物を持って助けました…みたいなちよつとした親切心でやりました的な発言。

それどころか教室の周りにいる人間も俺に対して生暖かい視線を突き刺しており、これではまるで俺がおかしい人のようである。

「それがおかしいんだよ！なにいきなりマジシャンもびっくりなことしてかしてるんだ？」

別に俺は怒っているわけでもないのに、その余りに不可解な出来事に完全に混乱してしまっているせい、か、語気が強くなってしまう。

「あん…、つ、辻村殿…急にそんな…わたくしを…罵らないで…くださる…？」

愛撫もなにも、一切手を触れていないのになんでそんな艶めかしい声を出すんだよ、こいつはーっ！！

「つ、辻村君ー…！？」

突如背後から全力疾走して息切れをしたが、それでも息を吐き出しながら話す声が聞こえる。

それどころじゃないが、呼ばれたからには仕方がない。さつと後ろを振り返ると

「どー…どうしたの？ー…ハーツ、そんなに慌て…ちゃってっ！落ち着きなよ！」

そこには購買部からプリンを買ってきて戻ってきた栗崎が、肩で息をしながら俺の元へ寄ってくる姿だった。なにも走って帰ってくることはないだろ。

普段なら1階からこの4階までをこの短時間で往復してきた栗崎の体力を褒めたたえるところだが、今日ばかりはできそうにない。

誰も信じてくれそうもない虚言のような話を、できるだけ簡潔に栗崎へ伝える。

「栗崎聞いてくれ。神納寺こいつがおかしなことやって人の居場所を突きとめたんだよ」

親指をグッと突き立て肩上までそれを上げ、後ろで若干頬を染めている神納寺を指す。

今の俺の説明さえなにいつているかわからねーと思うが…

「え？それって…あ！夏帆ちゃん！おひさしぶりですっ！」

え？

軽く流されるか栗崎のいつものテンションで驚いてくれるかの2つの選択肢しか予想できなかった俺には、その解答は新ルートすぎた。

「あらあずきさんでしたの。ごきげんよう、しばらくでしたわね」

明らかに知り合い以上の仲である2人のその挨拶に、『混乱』のステータス異常を抱えている俺へ更に追い打ちをかけてくる。

栗崎と神納寺が…友達！？訳がわからないよ。

「うんっ。三月の終わり頃にやった『ストーカーをストーカーして傍観しよう！』を一緒にやったの、あれすっごく楽しかったねっ」

ストーカーをストーカー？ 給炭機 ストーカーをストーカー？ 給炭機 え？なに？

新手のカップリング？

「あれはなかなかスリルがあつておもしろかったですわね」

「またやらない？今度は半径5メートルを目標にしてさ」

ああ ストーカー ストーカー ストーカー 忍寄に忍寄ね。 いやいや。

「いいですわね、大いに盛り上がることまちがいな…」

「まー待て待て待てえ！話が逸れすぎだ！」

久し振りの再開で盛り上がることは大変結構だが、頼むからそれは後にして欲しい。

喉からでた手がさつきから疼いて仕方がないのだ。

話に栗崎が入れば、その話が混沌になることはわかっていたはずなのに、そんな常識すら忘却の彼方へ飛んでしまっている。ととととにかく軌道修正しなければ。

「栗崎、俺は神納寺がおかしなことをやって人の居場所を突き止めたのがおかしいといったんだ」

改めて現状を説明して、共感を求める。

だが栗崎の返答は共感などではなく、真逆の反感を買う結果となってしまう。

栗崎の頭にくつきりと見えてしまうほどの『？』が浮かんでいるのがわかる。

「え？ なにかおかしいなこと？いつものことじゃない？」

え…？

「え…？」

栗崎までそんなことを言う。

自分の頭上に過剰に上っていた血液が萎えてサーッと降りていくのがわかる。

だとしたら本当にそうかどうか？

自分の今までの観念をぶち壊し、観念の臍を固めると言うのだろうか。

…あれか、俺はいつの間にか魔法が普通に使われている世界に紛れ込んだのか。それなんてドラえもん のび太の魔界大冒険？

もしも ボックスでさっさと元の世界へ！と高らかに宣言したい気持ちで一杯だ。

「別におかしいことではないよね？夏帆ちゃん」

その同意に神納寺も当然と言った様子で栗崎の言葉に共感する。

「あずきさんの言うとおりですわ。これは辻村殿が眠いときに寝るように、普通のことでありまして」

二人の突いてくる奇異を見るような視線がこの現実が本物だと教えてくれている。

「なん…だと？」

にわかになににわからに信じることはできない。あえてもう一度言おう、訳がわからないよ。

キンコーンカーンコーン

こんな時に限って…、時というのは残酷である。

「あらら！すみませぬがお二人とも、もう授業が始まります故これにて。では、ごきげんよう」

授業の開始を告げるそれを聞いた神納寺は、慌てて自分の教室へ帰っていった。

「夏帆ちゃんっ！バイバーイ！」

栗崎のその遊んだ友達に別れを告げる子どものような姿には、真っ赤に燃える夕日がバックにあれば最高だなとどうでも良いことを考える。

それにしても…

録画された動画を再生するが如く、俺の脳裏には鮮明に神納寺の

ぶっ飛んだ光景が再生される。

Gペンにインクをつけて人物名を言いながら一喝したらその人の場所がわかった。

先程の光景を一行でまとめるとこういう事になるわけだが、やはり俺の価値観からものを言わせて貰うと、おかしいとしかでてこない。なんだかカレーにウスターソースをかけるとおいしいということを初めて聞かされたときの気分になる。

「まーまー辻村君元氣だしなよっ、今日氣付けて良かったじゃん！」

達也には劣るものの、完全に安心して神納寺が出て行った扉を注視していた俺に栗崎が慰め（？）の言葉をかけてきた。

「あ、ああ…」

しかしそんな単純にばつの悪さを一掃することなど、俺には到底無理だ。

しばらく俺は、放心状態だった…

「…っはっ！」

次俺が意識を体内に注入されたときには、黒板の上にある時計からして6限の授業が始まってまもないころだった

「ここで3をかけて…はい答えは2484だ」

初老の数学の先生が、淡々と黒板に答えを板書している。

…俺は今まで何をしていたのだろう…？

いまいち意識を覚醒できていないものの、神納寺のしでかしたこと

は記憶操作されたのかと疑いたくなるくらい輪郭がはっきりしている。

そこで俺は一つの仮説を思いつく。

…もしかしたら俺はさっきからずっと寝ていて、さっきの出来事も全て夢の話なんじゃ？

夢の話だと渴望したい程、あれは信じられない異空間での一幕だった。

俺のこの仮説を綺麗に証明してくれるものと言ったら、俺達の立会人であった栗崎の存在以外ない。

「くりさk…あ…」

質問一点張りでいこうと思って後ろの栗崎に首を向けた矢先、彼女は完全に爆睡していた。

ちくしょおおおお！授業中寝るなっていったのはおまえだろうがああああ！

腕を枕にしてうつぶせている姿を見て、これは真面目に授業を受けているという方程式を組み立てられるものなら組み立ててみる。

そんなものはフェルマーの最終定理…もとい、フェルマー・ワイルズの定理を証明したアンドリュー・ワイルズだって無理なわけだが、今すぐ答えが欲しい俺は栗崎に聞き出す以外で求めるしかない。

…そうだ、確か夢の中であろう栗崎はプリンを買っていた。だとすれば今の栗崎がプリンを持っていなければ俺の持論は通る。

逆に言えば、もし彼女がプリン持っていれば俺はボコボコに論破されて「ぐぬぬ」と狼狽することしかできない。

…確かめるしかない。

この話の終着点を栗崎のプリンが委ねており、そんなものに委ねられているのは実におかしな話である。

静かな寝息をたてて寝ている栗崎を見て可愛らしいと思ってしまう自分の情けない脳みそに辟易しながら、その周辺を見渡す。

もしなかったとしても食べてもう捨てたという可能性があるから油断でk…

…！ち…ちくしょおお！！

ダークマター暗黒物質を発見したとしても俺はこんな反応はしない。

どうして…！どうして貴様が居るんだ……プリイイイイン…！

彼女の後ろはクラスメイトがものを詰め込む鍵なし扉なしのロッカーが並べられているが、栗崎のロッカー中に悪夢ナイトメアの具現が、俺が最も見たくないモノが凄然としてあった。

夢だけど夢じゃなかった！

い…いやいや…た、たまたまだ…。偶然だ…。

けんじつ敵勢力が自陣りそうをほぼ壊滅させるが、まだ城は倒壊していな…

…！！？

そんな燃え滓のような希望をもち、この授業を乗り越えようと前を向いた瞬間、その城も決定打たいぼつにより粉々にされてしまう。

大砲の弾となったのは、俺が脳みそにこれでもかとすり込んで記憶したあの紙。

か、神納寺が魔法をかけたあの紙が俺の前方にいるクラスメイトの机の中から…は、はみ出ているじゃないか。

これほど嬉しくない『はみ出し』はないだろう。

ただのインクがついた紙なのに、俺にとっては戦場へ赴くよう命令する赤紙にしか見えなかった。

これ以上俺は言い訳を、逃げ道を作る術を失ってしまった。

…

…我々は…認めなければならぬようだ…、彼女の…その…力を…！

ここは開き直ってそういうことなんだと、言い聞かせるしかなかった。

「…」

隣を見ればそろそろ肉体に魂魄が戻らないと本当に天へ飛びだつて

しまう半死の達也が。

今ならあの姿になっても悪くないかと、そう思って盛大に溜息をついたのだった。

「はい！それではみなさんまた明日お会いしましょう！」

まかり先生の一日の疲れを吹き飛ばすような癒しボイスを聞いて現に俺は何だか肩が軽くなったような気がした。

待ちに待ちまくった放課後になる。

どっと教室が騒がしくなる。

一日学校側による束縛から完全解放された生徒達は、各々この後の予定を話し合ったり、部活に言ったり様々だ。

帰宅部で予定も話し合う相手もない俺は完全に蚊帳の外ではあるが、達也の飼育の役目があるのであんまり気にしていない。

それにしても今日はいつも以上にバイタリティーを消費した。根源は神納寺のしでかしたことについて。

『特定の人物の位置を地図に描き出す程度の能力』を持つ神納寺…、
『地の文を読み取る程度の能力』を所持する達也とはまた別の意味で恐い存在だ。

でもそれはそれで面白いし便利な能力ではあると思う。

だが仮に付き合ったとして、仮に彼女がヤンデレ属性持ちならそれはそれは面白いホラーが書けることだろう。…書きたくないし神納寺はヤンデレでもない。

肩を使ってどんよりした息を吐き捨てて俺が飼育すべき相手を横目で見る。

この後の達也のテンションについて行けるか…。

ガタッ

『感電注意』の柵で覆われていた禁忌のスイッチが勝手にONに切

り替わる。

「今日もおわりましたー！お疲れ様でしたーっ！」

ビクンビクンと、早速ついに行くことを断念したくなる調子で今まですっと死んでいた達也が跳ね起きる。

例えるなら大量のガソリンに二トロをたらして一気にエクスプロージョンさして驚異的な推進力を得た車…いや、爆発による破壊力、か。

無理もない、ここ二時間本当の意味で何もしていないわけだからこいつの元気はありに有り余っていた。

精力と精神力を貪欲にドレインされて疲労困憊に近い俺とは完全に白と黒の関係だ。

「ヒューッ！ほう か ご キターッ！」

『コロンビア』で正解してドヤ顔していたあいつのようなポーズを取り、みなぎる（迷惑な）活力を表している。

そんないらぬ元気をまき散らしている達也をおいしい具合に抜いてあげるのが俺の役目だ。一応釘を打つが、決して性的な意味ではない。

さて、飼育係としての仕事を全うすることにする。…と銘打ち弄って遊んでいるだけなのだ。

「こんばんわ。もう夜だよ」

最初は軽いジャブから入ってみる。

…のつもりがこいつには特大ストレートが決まったかのような釣れ具合な辺り、本当に今日のこいつは元気一杯みたいだ（棒）

「！？う！うそ？い、いいいい今何時？」

「八時だよ」

適当に答える。

「うそだろお？畜生！今日は本屋に行きたかったのにいい！」

達也が言っている本屋とはおそらく商店街にある比較的大きい本屋のことをいつているのだろう。

勿論商店街というのはこの学校から20分前後で優々閑々で到着できる深翁商店街のことだ。

「いや、まだ開いてるだろ」

確かあの本屋は午後10時まで開いてるはずだが…？

身体停止をこなし、いつもより勢いはましているが思考は停止しているところが実に達也らしい。

普通にジト目でそう指摘してやると達也は舌を鳴らしながら人差し指を振り、甘い甘いとの応酬が。

俺が首をほんの少し捻ってその言葉の真意の解答を求めると、達也は片目を閉じて腕を組んでこう言った。

「違うんだよ。目的は本じゃないんだよ」

「本屋なのに本に用がないってどうゆうことだよ」

本に用がないのに本屋に行く？なんだそれ美容院行って髪を弄って貰わないと同義じゃないか。

「実はだな…火曜日と木曜日の5時から7時までの間はなあ…」

チラツチラツと目だけを動かし、『なにそれ早く教えて!』という
台詞待ちを露骨にしてみやがる。

そんな籠の中にエサを入れ、つかえ棒で支えて獲物が入ってきた
途端棒を引きはがすようなちゃちいトラップに付き合いはしない。

「なんも期待してないからもったいぶるなよ…」

その返事にあからさまに面白くない顔をした達也だったが、直ぐ
に切り替えてトリックのネタばらしをする。

「なんと!可愛い子がレジ打ちしているんだよおー!!先週知った
んだ」

達也がニヤニヤしながらそういう。

…拍子抜け感が否めないというか期待はずれな話だったが、実に達
也らしい話だ。

「…よくそこまでその子が働いている細かい時間帯を知っているな」
「は?俺を誰だと思ってるの?俺は狙った獲物は逃さないハンター
だよ?H R 6だよ?」
ハンターランク

ふふんと、勝ち誇り顔で達也は鼻で笑った。

それはP基準ポータブルなのかF基準フロンティアなのかで随分その価値が変わるんだがと、
問い質したいところだが面倒な方向にベクトルが傾きそうだったので喉奥に言葉を飲み込む。

得意顔で顔でそう言っているが、要はその本屋で二時間粘着して彼
女を見ている…という気持ちが悪い結果しか残っていないわけだ。

レジ打ちの女の子をみながらハアハアしている達也の姿を想像した
が、速攻で気分が悪くなってきたからやめた。それなんてグロ画像?

「ハンター（笑）。ただのストーカーってことを自覚たほうが良いんじゃないか」

「す、ストーカーだなんて滅相もないわっつ！ たまたまその子が目にはいるだけだ！ いや！ 向こうが視線に介入してくるんだ！ きつとそうだ！」

こいつは幻聴だけでなく視線すら錯覚できることを決定づけた一言。

「可哀想に。もしお前がその子と視線を交わしてしまったら、忽ち石化してしまうわけだ。視姦乙」

「自主規制ピーがですね、わかります。全く、目だけで濡れさせてしまうとは…俺はなんて罪な男だ…」

どんな痴漢もののエロゲをやったらそんな発想がでてくるのだろうかこいつは。

「石化って言うのは暗に『牢屋』を意味していたんだがな」

「まさに視姦の罪で捕まったんですねわかりま…わからねえよ！ なんだよ！ 俺は歩く犯罪者か！？」

「よもや異論があるとは言っまい？」

「くっ…」

否定しろよ！

そこを認めてしまったらお前は本当にただの変態にしかない。

「という訳でさっさと行くんだな。今はまだ4時半位だ」

十分遊んだのでちゃっちゃとネタばらしをする。

「なん…だと？」

達也は額に汗を浮かべながらブラックボードの上にある一般的な円形時計に視線を合わせ今の時を知る。

というか外もまだまだ明るいんだからまだそんな時間じゃないって気付けよ。

「な、何だよ脅かすなよお」

フーッと、死ぬほど安慮したこいつは俺の胸周辺を肘でこのこのおと突いてくる。やめろ鬱陶しい。

「ふ…ふふふ…」

すると安堵の顔が段々醜く歪み始め犯罪者さながらの不敵な笑み漏らしている。

そんな歪み面を晒しながら顔を上げた達也が少しずつ夕方に近づく太陽をバツクに、親指を立てながら

「なあ…スケベしようや…じゃなくて、今からいつてみない？その子のいる本屋へ。どうせ暇だろ？」

前半の台詞しっげんを抱きつきながら言われたら相手は達也でもわかってしまうほどの鳥肌が湧き出すだろう。

聞いていただけの俺ですら悪寒が背筋を通り抜けたほどだ。なんて恐ろしい奴なんだ…。

まあそこはいつものことなので置いておいて、達也の提案をどう調理するか考える。

確かに帰宅部の俺は放課後やることがないし嫌でもない。

どうしようか…

1 行く

2 行かない

…と選択肢が出てきたが、達也ルートなんて存在しないため正直どっちでも良いわけだが、どうせなので…

「まあ、いいだろう」

軽く頷いて同意を示す。

こいつと付き合っていた方が、面白いことがおこる。いや、起こらないとおかしい。

「じゃさっさと行こうぜ。もうすぐ5時になっちまう」

もうこういう普通の言葉にすらどんなボケがあるか探ってしまうのは飼育係としての職業病か。

「ああ」

授業が少ないこの時期は仕方がないことだが、薄っぺらい鞆を持って教室を出た。

達也とその店員がロリなのか熟女なのかというどうでも談義をしているうちにあっという間に到着した。

オレンジ色に染まりつつある商店街は、俺に夕方であることを実感させてくれる。

地上では仕事帰りのサラリーマンや買い物にきた主婦でそこその

にぎわいをみせている。

そんな人の流れを傍観していると、達也が口を開く。

「流石に急ぎすぎたかな…」

達也が苦笑しながらそう言う。

こいつは一刻千秋の思いを唾棄したためかつい足が速まったらしい。ついて行く俺はなにも思わなかったが、相当早く着いたみたいだ。

商店街の広場にそびえ立つ時計をのぞくと、時刻は5時の15分前。その子がレジ打ちにはいるまでまだ時間がある。

「やれやれだぜ…俺は特に本屋には用がないんだがな」

「じゃあ、少しどこかで時間を潰す？」

こういう普通の言葉にすらどんなポケg（ry

「そうだな…」

1 本屋

2 文房具屋

3 ゲーセン

2は栗崎ルートのフラグ通過点だが、突入する気はないのでこれを選ぶ。

「仕方がない。適当に雑誌よんで時間を潰すか」

ここ最近俺は本屋という所に足を向けた記憶がない。最新の本事情を知るという意味で行くことに甲斐はある。

そう指針を決めると達也がお前だけにはされたくない蔑むようなげんなり顔でこう言った。

「『ざつし』って…えつちな本読んで死ぬんですか？」

「お前が慚死しろ」

「えつちいのは嫌いです（キリッ）」

どの口が言っただよ…

「いくぞ」

「待つて…心の準備が…」

看過して通りの中程にある本屋に向かう。

決して達也との歩幅を合わせているわけではないのだが、単純に疲れているためかその足取りはどうしても重く、結果的に達也と並んで歩く形になる。

だらだらと歩いていると、学校帰りの生徒が和気藹々としている姿を何度も視認する。無論うちの学校の生徒の姿も見受けられた。

「70点…んー、あの子は63点…ん、あれは80は超えてるな」

隣で聞いて欲しいのかわからないが、ブツブツ呟きながら後ろを歩く犯罪者が。

いるよな、主観だけで点数を付ける馬鹿が。…ちよつとだけあいつの基準が知りたいところだが。

そんな事を思慮しながら足を進めると、目的の本屋が露わになる。

「ふう…最終決戦の場にしては少々お遊びが過ぎていないか？…フフ…『喜劇は終わった幕を引け』…と言いたいのか？」

そのキャラまだ引きずっているのか。いや、俺も好きだけどさ。

…まあ、とりあえず中にはいることにする。

『いらつしゃいませ』の文字が真つ2つになる自動ドアを潜れば、視界一面に本が姿を見せる。

流石この商店街に唯一存在し、商店街売り上げNO.1の本屋といったところか。

なかなかの広さと物量だ。店内は本で埋め尽くされている。

客の出入りもなかなかで、店内は常に人を確認できるくらいの混み具合だ。

天井からつり下げられたプレートには各コーナーのジャンルが書いてあった。一般小説、絵本、参考書etc…

その中でも俺は入り口直ぐ目の前にある『新着図書コーナー』に目を引かれる。

今は一体どんな本があるんだろうという、純然に興味本位からの誘因だ。

うむ、どれも好奇心が震えるくらい撥ってくるものばかりだ。どれか買ってもいいのかもしれない。

「お、ワンピース97巻じゃん。いつまで続くんだろうな、これ」

活字が読めない達也は漫画にしか興味がないらしく、次々と色んな漫画の表紙を見ては変えていた。

「そんな君にはこれだ」

会話のキャッチボールをする気の欠片もない返事だが、達也には繋がっているからそこところは非常に楽だ。

「あーん？…っておい！これはノン タンじゃねーか！いくら俺が阿呆だからってこれは馬鹿にしすぎだろ！？」

「甘いな、これは大人の雑誌だ」

「!？」

どう見ても児童書なこの本がアダルティなものだと聞いた刹那達也は戦慄する。

「見る、18禁のマークがあるだろ？」

俺が指さす先には例の両手を突き出してらめえしているマークが。

「…なん…だと…？」

能力を使っていたと錯覚していたことを指摘されたときに主人公が見せたような驚駭を隠しきれない達也だが、正直に言っていると俺が一番驚いている。なんだよ18禁のノンタン って。

タイトルは『ノンタンちのあわぶくぶくぶぶう』という、どこのAVやジョークグッズのエセタイトルだよ。一瞬オリジナルと見間違えたわ。本当は『ノンタンあわぶくぶくぶぶう』な。

この本を開くのは人間をやめるときではないかと当惑したが、求知心がそれを上回ったためパンドラの箱さながらなこいつを恐る恐る開く。

表紙はオリジナルと多分同じだ。

達也も気になったのか漫画を置いて俺の本に視一視する。…

な…！

適当に開かれたそのページにはノンタンが「たつやくん、こつぱみじんになってどうしたの？」と血文字で書かれた台詞と、マインスロアーを肩においた血のりだらけのノンタンがたつやくんの肉片を蹴り飛ばす姿が。

「台詞と行動が伴ってねえよっつ!!!」

達也が出目金を凌駕する程目を突き出して全力のツツコミをする。

「最もの極致を極めたツツコミだが、そのツツコミは少しずれていくだろ!？」

地の文と台詞を同時に満たしたところで冷静にこいつを分析する。

こゝこれは酷い。表紙の精巧な再現の因子により、間違つて買ってしまった親は少なからずいるはずだ。子どもにトラウマを植え付けるにはうってつけすぎて怖い。

そもそもノンタ ンって動物や虫ばかりなのにたつやくんって…、偶然とは思えないこの名前に悪意しか感じられない。

「もしかしたら俺が無為自然にこれ描いて出版したかもしれんな」

あながち冗談でもない事をせせら笑いながら漏らすとなかなか鋭いツツコミが返ってきた。

「無意識で俺を木っ端微塵にするお前はどんだけ俺に怨念持ってたよ!」

ごもつともで。

訴えられても仕方がない(俺が)ノ ンタンを元の場所に戻す。

「ちょっと時間巻こうか。もう400行超えてこれ以上続けるとggdになっちゃう」

迫真顔でとんでもないメタ発言をする達也。確かに今までは400行以内に収めてはいた。

ページ数を気にするお前はブ ラックジャックか、とちよつとわか

りにくい比喻でどづこつと考えたがやめる。

そもそも最初からgdgdしているこれに今更何を言っているんだ
というのが俺の見解だが。

「そうだな、ちょっと急ごうか」

前中後の区切りはもうちょっと考えてやれよと思惟しながら、定位
置に着くぞ、となにやらそんなところがあるらしいので黙って達也
について行く。

「ここだよ、ここ」

不意に達也が立ち止まる。無論ここは本屋の中である。

場所的には本屋の中核に位置するギャンブルに関する本が雑然と並
べられているところだ。

時間が時間なのか他の客がいないのでその辺りは助かった。

「ここはギャンブル関係の本があるが…ここがなぜ positioning なのか説
明を求める」

「百聞は一見に如かず…だ。本棚の上からのぞいてみる」

達也の言われたとおりにする

「ん…」

本棚の上から覗くと、向こうにはレジをこなす定員が正面から見え
る。言われてみればここなら視線が悟られにくい。

今いる大学生くらいの女の店員は達也の視姦の対象外らしい。彼女
は次のシフトへ仕事を託すためか忙しくあれこれ動いている。

「な？」

ドヤ顔の申し子であるこいつはニユー^{ていぞう}トラルフェイスでグツと親指を立てる。

二次元だけでなく三次元まで「ド」のつく変態のレッテルを貼れるこいつはある意味グローバルな存在なのかもしれない。

「お、おい、店員が戻っていくぞ…ふっ！ふっ！」

達也が興奮した面持ちでいる。

それに釣られて棚上から向こうを見ると、レジ打ちを担当していた店員が待機室へ戻っていく。
どうやら交代するようだ。

「そろそろくるぞ。覚悟しておけよ？彼女の可愛さをみたら鼻血でるぜ？」

どこの少年漫画だよ。

まあそこまでその子に興味はないので、適当に目の前にあるギャンブル関係の雑誌に手をつける。

ほう…今週新台が入荷したのか。

「…！！」

食い入るようにレジを見ている隣の達也の表情が変わった。どうやらおでましたようだな。

達也にあわせて奥を見る。

「…！」

そこには、確かに他の女の子とは別のオーラがにじみ出す女の子がいた。

青紫髪のショートカット、鋭い瞳、その瞳の下に光る楕円形の眼鏡をもちあわせる傷一つ無い顔。

いつてしまえばつり目の長門 である。…これでかなり楽に想像できるんじゃないだろうか。

そんな可憐と言うよりは美麗というほうが正しい少女が目強く映る…って

あれはルートの調合性がとれないから隠しヒロインに追いやら…EXルート栗生野さんじゃないか。通常ルートにそんな姿で出張とは。

俺が彼女のその働きっぷりに感心していると

「フヒ…フヒヒ…」

達也が場違いな環境音^{はないき}をだす簡単なお仕事モードに移行する。つまりそれは達也が無抵抗で無意識で無自覚になることを意味する。

昨日明日香と対面したときと何も違いない状態で、一向に目を反らす気配がない。

その視線だけで触手プレイが可能なねちゃねちゃした視線をずっと彼女に浴びせていたら気付かれるのは実に容易だ。

「ふごふっ!？」

一発裏拳を達也の胸に浴びせる。
かいしんの いちげき!

裏拳でよろめいたところで達也の耳をひっぱり、自分の口に寄せる

「そんなにじろじろみていたら気づかれるだろアホ。少し自重しろ」
「わ、わかったのだ…」

達也も真下にある雑誌を取り、パラパラとページをめくる。

…
幸いなのかわからないが粟生野は全く気付いた様子はなく、置物のようにピクリとも動かず立っている。流石訓練されていることだけはあ。

…いや、訓練されていたらこの色がある視線もばれているんじゃないだろうか？

「ふう、筋肉のおかげで助かったぜ」

そう危惧している俺とは裏腹に筋肉を褒める馬鹿がいた。…勝手にするが良い。

こうして達也のチキンレースが始まったのだった。

………
…

…あれから10分は経ったが、状況はなにも変わっていない。

達也が彼女を見ては雑誌を見て、彼女を見ては雑誌を見るの無限ループを繰り返しているだけだ。

やきもきに耐えられなくなった俺は、ついに我慢していた口を開く。

「さっき視姦と冗談で言っただけだが、これじゃ本当に視姦だな。これ以上お前が見るとあの子を孕ませることになる」

「ふっ、それができれば本望…さ」

「というかお前ただ見ているだけなのか？」

本当に見ているだけなのかこの台詞で煽ってみると、いつもの憎たらしい顔が凍結する。

「う…」

どうやら狙っているらしい…のか？

ここは友人（仮）として、一肌脱いでやろうか。

「これだから童貞は。狙ってんだったらもっと積極的にいかないんだめだろ」

「どどどど童貞ちゃうつちゅうに！俺は種馬な草食男子なんだよ」
「矛盾しているだろそれ…。いや、つまり、一人ホールで種付けしているっていいたいのか」

「うつせえバーカ！その通りだよいわせんな恥ずかしい」

なかなかのこの下ネタを不快に思われた方へこの場を借りてお詫びする。

何がともあれこいつは手が出せないみたいだ。なかなか可愛いところがある。

よし、慈愛の神がこの童貞野郎に自分のことは棚に上げて介抱の手続きを取ってやる。

「馬鹿か。あの子は今何をしている？レジ打ちだぞ？お前がなんか本を持っていけば会話のチャンスなんて簡単に作れるだろ」

「おお！その発想はなかったわ」

パツと表情を輝かせ達也が右の掌にポンツと左手を乗せる。どう考えても最初にこの結論が出るだろ…

「ほら、この本を持っていけ。こいつを会話の種にするんだな」

達也に顔を覆えるくらいの正方形に近い一冊の本を渡す。

「ありがとう紅…ってさっきのノントンじゃねーかあああああ
あー！」

言わずもがな『ノントンちのあわぶくぶくぶぶう』である。

「さっきお前が放心している間にとっておいたんだよ。そんな男らしい本を買いにいけば相手はお前に好印象をもつぞ」

「絵本をかう高校生か18禁の誰得なグロ本をかう高校生かに印象が限定されるこれじゃ俺のイメージはガタ落ちしかねえよー！」

それくらいの常識を持っていることに驚きだ。

「じゃあこれだ」

ノントンを受け取り、代わりに左手に持っている本を渡す。

「今度はエロ本じゃねえか！しかも俺好みのロリ本！！欲しいわ！
！じゃねえっ！ストレートすぎんだろー！」

ノリツツコミまでこなす達也の姿をみて、飼育係としてここまで成長したかと感動すら覚える。

「…わかったよ。この小説なら文句はないだろ」

初代ゲームボーイと重なる大きさの、ハードカバーの小説を渡す。

「なんだこれ？タイトルは…『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの愛する『シャブ』を使ったら？』？」

これまた企画もののAVにありそうなエセタイトル。ドラッカーの意味が180度違う。

「適当に持ってきた。特に深い意味はない」

「そうかい。まあ、さっきの二冊よりは遙かにましだな」

周りの料理の値段が高くて、それより少し安い料理が他の店なら高いのに安く見えてしまうアレと同じ現象が発生している。とはいえ、売れている本ではあるので大丈夫ではあるが。

「…で、これを出してどうするの？選択肢でないからどうすればいいかわからないんだけど」

惚けた顔で聞いてきやがった。エロゲ脳の元型アーキタイプを所持しているだけはある、現実リアルに選択肢を求めるとは。割と真面目なアドバイスをしてみることにする。

「とにかく冷静に、落ち着いて話せ。まずは、そうだな。身近なことから話せ」

「いい天気だね。とか、最近どう？とかかい？」

「そうそう…まあ今日は一回目だ、今回はそれくらいで良いと思うぞ。踏み込んだ話はあと2、3回彼女と会話した後だ」

なんで俺本屋のど真ん中で女の子との会話の仕方（初歩）をレクチャーしているんだろう…ああ、宿命か。

そんな自問自答をしていると意外にもちゃんと傾聴していた達也が一つなにかを納得したらしく、頷いた後戸惑いが混じる声でこう言った。

「つまり…『働くオンナノコは美しい』の岬光みさきひかり宙ちゃんルートの序

盤と同じって事なのか…！」

…前言撤回。エロゲのルートで重なっているキャラを探していたとは…これには溜息をつかざるを得ない。

その通りわざとらしく肩をすくめ体内の空気を抜くように長い息を吐く。

「ああもうそれでいいよ」

「お、じゃあ行ってくるぜ！」

前例を発見した途端元気になりやがったこいつに侮蔑した視線を突き立てるが、まあ何がともあれやる気があるのは良いことだ。

「おう、ミッションスタートだ！」

俺も適当なノリでそう言ってこいつが作戦失敗するのを見守らせてもらう。これほど頼りない兵士がどうか、いやいらない。

粟生野という城をたった一人で攻城する達也…。悪いが犬死にの末路しか思い浮かばない。

駄目だとわかっていても部下を特攻させる判断をしないとイケない指揮官というの、つらいものがある。…ええ嘘です。

「すすいません」

「はい」

そんなお涙頂戴展開を妄想しているうちに達也はレジにつき、攻城を開始していた。

対する城は無表情だが、透き通るような声で敵の出方を伺う…たつやといふのはこちら側の一方的な解釈だが。

それにしても彼女の声はまさにクリスタルボイスそのものだ。ここ

から聞いてもはつきり聞こえる。
達也が先制攻撃を仕掛ける。

「今日はいいい天気…ですね？」

「そうですね」

…が簡易にさらっと受け流し、本を手に取り読み取りリーダーでバーコードを認識させる。

「630円です」

「このバイト…大変そうだね」

達也にはよく頑張っている。強大な城に対して抗っているものの、彼女は何枚も上手にいた。

「大変です。630円です」

Sランク級のスルースキルを遺憾なく発揮し華麗に流す。『客』と話す気などこれっぽっちもないのか、『達也』と話したくないのか。前者だろうが後者だろうが状況が悪いのは見ての通りだ。

「あは、はい！」

この劣勢の雰囲気完全に飲まれた達也はまごまごしながら財布をあさり始め、小銭を出す。

これはひどい…

「これはひどい…」

つい本音が口に出すが、これはどちらに対しても、だ。

しかし今の今まで時が止まったように身体をぴくりとも動かさず無表情な店員のほうに意味合いは傾いている。これは達也が云々の前に態度が悪いな…せめて営業スマイルくらいしろよ。

いくら隠しキアラだから達也とフラグを立ててはいけないからってこんなあんなまりだ…と半分達也に同情していると図らずも達也が身体を正面に向けながら振り返りてきた。

「…」

それはわかりやすすぎるほどの半泣きで、ヘルプサイン以外の何者でもなかった。

だが無慈悲な司令官はGJを意するグーサインの親指を首に近づけ、平行にスライドさせる。意味的には氏ねってことだ。

うぐうとお前がやつても可愛いも糞もない顔つきになった後、正面をむき直した達也は一矢報いようと思ったのか、こんな言葉を放った。

「そ、それにしてもきき君可愛いね」

元々開け閉めできないんじゃないかと錯覚するくらい硬い感情の城門へ捨て身タツクル。

そんな事をしてしまうくらい敵に囲まれて絶体絶命な達也に真の無慈悲な王妃はトドメを刺す。

「630円丁度お預かりします。こちらがレシートです。有り難うございました」

スルウウウウウウウウツツツ！

きつと達也も意中でゴールを決めたときハイテンションで叫ぶサッカー実況者のようにそう思っただろう。

彼女は完璧に、忠実にプログラムの命令通りに従ったようになんの感情も込めずにただただ、透き通った声で受け答えの定型文をいった。

「……あ、ああ」

差し出される紙袋を受け取った達也は、文字通りこれ以上言葉は出なかった。

oh…

俺の所に戻ってくることもなく店から出て行く達也。

後続く。

ありがとうございましたー…とこれは粟生野以外の店員が言った台詞だ。

自動ドアを潜り抜け外気を吸いつつ達也を探すと

右手にある楽器屋のショーインドウのなかにあるトランペットをなめるように見ていた。

「…ふ…フフフ…」

「残念だったな」

そう話しかけると達也は珍しくも苦笑いでこちらを向いてきた。

俺の記憶を漁りに漁る限り、こう冷徹にされるとこいつは「ぞくぞくするよお！」と言いながらマゾヒスト全開の恍惚とした表情を浮かべているかと思ったのだが。

「ふふ…流石にドMな俺でもこれには堪えたわ…」

「今の気分を例えるならさっきのノ…ンタンのシーンと同じか？」

フる。

そしてこういうときだけは察しが良い達也は期待通りの解答をする。

「あ？…ああ…栗生野ンタンが俺の心を木っ端微塵にしたんですね。…ってただのシャレじゃねえかあああああああああ！！！！」

またこんなオチかよ…

しかし日常パートで達也オチは便利なので今回もそこにあやからせてもらう。

深翁商店街は今日も平和だった。

4月4日／火曜日（後）（後書き）

という訳で後編終了です。

神納寺のあの能力は口調からでもわかるとおり、キャラ付けに必死になった結果の産物です。他意はないです。本当です。

さて次回から不穏な影が現れてきます。後ずっとジメジメした展開が続くので神納寺、達也、栗崎でなんとかフォローしようと色々画策中ですが…難航しております。

ヒロインがヒロインらしくなるまで、しばらくお待ち下さい。

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月5日／水曜日（前）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで前編です。

当然のように500行超えるグダグダな文章になっていますので、お気を付け下さい。

ようやく物語に動きがあります。

それでは、どうぞ！

4月5日／水曜日（前）

「ただいまーっ！」

「おかえりー！」

「今日もいっぱい遊んできたね」

「うん！僕、今日もホームラン打ったよ！」

「あらっ、本当なの紅ちゃん！すごいわね」

「じゃあ、今日の夕飯には、辻ちゃんの好きな唐揚げを入れないとね！」

「うわあい！ありがとう！お母さん！！」

「じゃあ、先にお風呂に入ってくるねっ」

「紅はお外から帰ってきたらすぐお風呂に入ってくれるから助かるわ」

「うんっ！」

「さっぱりしたーっ！」

「おーっ。さっぱりしたなーっ！」

「おとーさん！」

ガバッ

「おおー！今日は大胆な登場だな！」

「だってお父さんが帰ってくるの、久しぶりなんだもの！」

「はははっ。久しぶりっていつでも、三日ぶりだぞ？」

「長いもん！僕、大好きなお父さんを毎日みたいもん」

「ははは。まいったなあ。よし、今週の日曜日は休みを取って、家族で遊園地でも行くか！？」

「え？本当！？うわーい！！」

「ちょっとお父さん、明日香はどうするの？」

「大丈夫だ。明日香の外出許可を、俺がとっておこう」

「うわぁい！楽しみだなーっ！」

「そっだな、思いっきり楽しもうな！」

原文のままで掲載させて頂いた。

シリリリッシリリリリリリリリリリ！

意識覚醒装置めざましがその役目通り俺の睡眠を妨害しこつちの世界に引きずってくる。

五月蠅いので止めてもう一眠りで行こうか。…こうやって俺は寝坊することをいい加減学習するべきだが三大欲求の一つ、睡眠欲に打ち勝てるほどの強い意志などない。

…一応時間だけでも確認しておこう。

ハンマーでベルを乱打する年期が入った目覚まし時計のスイッチを平手で叩きつけ、この部屋に無音を呼び込み、ゆっくりと刻まれている時間を確認する。

「ん…もう5時50分か。寝過ぎたなあ。今日は学校いけなかったな」

なぜかボソツとそんな言葉が出てしまったが、生憎朝の5時50分だ。所謂早朝であり、決して夕方のではない。

じゃあもうひと眠り……

…時間を確認ができるほど眠気が覚めてくると、先程まで上映されていた夢のことを思い出してしまった。

またこの夢か

もう何度見たか数えるのを諦めるほど、頭の中のフィルムが擦り切れるほど見てきた夢。

あの頃の父と、まだ健在だった母、もう入院はしていたものの外出許可をとることができる位元気だった妹。この4人でそれはそれは幸せそうに暮らしていた頃の夢。

俺の今の願望をそのまま見せてくれているように思えるが、夢の内容は紛れもない現実だった。

あくまでそれは過去形であり、過去の出来事だ。

今なんだ？この家には俺一人しかないじゃないか。

一体どうして、こんなにもバラバラになってしまったのだろうか。一体どうして、俺はこんなにも寂寥感を味わなければならないのか。この残酷なまでの現実を突きつけられ、ぶつけようのない怒りすら湧いてくる。

だがぶつけようのないのだ。ぶつけようのないから更に苛立ちがこみ上げてくる。

…ハア

唯一の逃げ道である深い深い溜息を一つついたら、同時に眠気も奈落の底に突き落とされていた。

決して睡眠不足からこない気怠さを抱えたまま、のそのそとベットから出る。

こんな気持ちのまま寝てしまったら、それこそ泥のように眠ってしまっただろう。

身支度をすませ、学校へむかうことにしよう。

「行つてきます」

そうやって今日も永久に話しかけてくることのない分厚い鉄板…もといドアにそう述べて鍵を閉める。

時刻は6時半を回るか回らないか。学校が始まるまでまだ1時間半ある。

そんなに早く行ってもやることはないが、言わせてもらえば家でもやることはない。

父が自分が小学校に上がる辺りに建てた立派な二階建ての家は、4人ですら少し広いのに1人で過ごすだなんて孤独感を募らせるだけだ。

それに早くでて周りの景色を堪能しながら歩いて学校に向かうのが、

最近の楽しみでもある。

同時に夜中に入れ替えられた空気が、俺の頭を囲むこのでつぷりと肥えた暗雲のような沈んだ気持ち洗い流してもくれる。

その他早く学校に着くと普段見られない光景が見られるのも、早く出てくる理由に挙げられる。

野球部の朝練、教師同士が談笑しながら学校へ向かう姿、静まりかえった学校、まかり先生の寝ぼけた愛らしい顔… e t c …違った一面が見られる。…最後は余計だったな。

とにかく俺は足を止めることなく学校へ向かう。

あつという間に桜の社員が等間隔で俺を出迎えてくれる。この社員がまた全員綺麗だからある種のキャバクラに似た気分だ。社長である俺は、そんな並べられた美麗な嬢たちのど真ん中を一人顔を確認しながらゆったりと歩くことにする。

この時間帯にこの道を通る生徒はいなく、完全貸し切りでこの空間を独占できる覇権を得たことによる優越感もまた格別だ。

まだまだ現役の満開の桜たちを見ながら、ゆっくりと学校へ続く道を歩く。

「っはー…はー…」

…とはいえ、そんな気分を感じることができるのは学校の入り口までで、学校に入った瞬間俺は一人の生徒にクラスダウンし、当然のように階段を使って我が教室を目指す羽目になる。

折り返し地点である2階に到着し、3階に足を踏み入れるときには、引きずる倦怠感が足に重りを付ける。

階段以外で上る手段と言えはエレベーターがないこともないが一般生徒が使って良い代物ではなく、否応なしに段差を上ることを強いられる。

まあこんな朝早くだったらバレないだろうという悪魔のささやきが聞こえてくるが、少しでも体力維持の糧にしようと思い、結局は階段を使う。

そんな事を思っているうちに、ようやく4階に辿り着く。

静寂に支配された廊下に俺の足音だけが響き渡り、それが止むことは教室に着いたことを意味する。流石にこの時間帯に誰も来ていないだろう。

だが、淡い期待を打ち砕くヤツがいた。

ガラッ

「ういーっす」

そんなやや恥ずかしい事を言いながら教室の中に入る。勿論これは人影はないと想定したか……

！？

俺の視界には多少は歪みながらも規律を保って並べられた学習机のみと想定していたのに、その中に生物が一人紛れ込んでいるじゃないか。

誰もいないと思われた教室の一角に、一人の少女が机に突っ伏して心地よさそうに眠っている。

「スー」

なんとそこには元気っ子兼馬鹿っ子兼俺の席の背後にいる兼神納寺の友達兼元ヒロ……な女の子……栗崎！

「栗崎…！」

彼女の名前を口に出さないで一体いつ出せばいいんだ。

どうして栗崎がこんなに早いんだ！？

例えば仮に誰かいたとしても、栗崎と達也だけはこんな早朝にいるはずがないと思っていたのにその幻想はぶち殺されたみたいだ。

まさか彼女が一番早く来ているとは…

初めて『うさぎ とかめ』を読んだとき、絶対うさぎが勝つと踏んだら、まさかのかめが勝ったときのあの驚き桃の木山椒さかんじょうの木に似ている。

驚きを隠せない俺とはコインの裏表のように、栗崎は相変わらず気持ちよさそうに眠っている。

起こして訳を聞こうと思っただが、死んだネロのように安らかに眠ってる姿を見ればそんな気持ちも萎えるというものだ。

「やれやれだぜ…」

起こさないようゆっくり栗崎の前にある自分の席に座り使用して三年目のぼろぼろのカバンから教科書類を取り出して机の中に詰め込む。

よし…準備は完了。黒板の上に掛けてある時計をみれば、まだ40分近く時間がある。

「スー」

しかしこんなに無防備に寝ているとは…少しは自分が可愛いと自覚した方が良さそう。将来こんな姿を帰りの電車ですべてみる…きつと『へへへ…誘ってんだろ？』…と自意識過剰な変態たつやが群がること請け合いだ。

つまり俺が言いたいかって？勿論可愛いはs（ry
…と、栗崎の寝顔をみながらそんな事を思ってしまう。

「…」

…
…なんだこの寂寞は。ここはスピーカーの周波数特性を観測する無響室か。

とにかく暇だ。誰かと話しをしようも現在この教室には栗崎以外誰もいない。

こういうときだけ達也は重宝する。あいつと共になにかをしていれば少なくとも退屈という文字をかき消すことができる。

自分でできること、例えば勉強なんかがあるが当然する気なんてさらさない。この世界にテストなどない。

そんな状況の中、俺がやることと言えは…

1 栗崎に習って寝る

2 栗崎を起こして話し相手にする

2はなんて自分勝手な選択肢だろうと我ながら思うが、今回はこっちを選ぶことにする。

…やはりこんなに早く来た理由が気になる

栗崎みたいなキャラは朝遅刻しそうになってパンをくわえてながら通学路を爆走するようなやつなのに。

俺のように景色を楽しみながらくるようなやつでもないと思う…それは流石に先入観にとらわれすぎが。

とりあえず聞いてみるほかにこの疑問を取り除く治療法はない。
しかしこんなに安眠している彼女を起こして良いのか？俺の欲望を
満たすためだけに彼女の眠りを妨害して良いのか？

ってかさつき起こす気持ちも萎えるって思ったばかりじゃないか。
しかし選択肢には逆らえない。それがプレイヤーの意志だというの
なら、俺は例えナイル川に泳ぎにだって行かなくてはいけない駒だ。
栗崎には悪いが話し相手になってもらうことにする。問題は起こし
方ではあるが。

さて、栗崎を不快に思わせずに起こす方法といえば…

- 1 肩を揺すって起こす
- 2 大きな音を立てて起こす
- 3 ハリセンを作って、突っ込みながら起こす

どうして当時こんな謎の選択肢を作ったのだらうとつくづく疑問だ
が、今回は強制的に1を選び、簡略化する。

ここは一般的な起こし方で起こすことにする。
彼女の肩に手をあて、揺する。

「おい栗崎起きてくれないか」
「スー」

栗崎 には こうかない ようだ …
どうやら栗崎の眠りの装甲は相当厚いと見た。これじゃハリセンだ

ろぅが達也の奇声だろぅがお構いなしに眠りこけることだろぅ。
しかしここまで俺の予想通りだ。俺にはまだ奥の手が存在する。
そう、物理的駄目なら精神的にアタックしてみる…といったものだ。
彼女がこの世で愛するもの…それは『プリン』である。
彼女 プリンでもなんら不思議ではない。…ニアイコールでとどま
っている辺りが俺の自信のなさを表しているが。
とにかくこの単語を彼女に発すれば忽ち彼女は昏睡状態から通常状
態へステータス回復するだろぅというのが俺の算段だ。
俺は彼女の耳元まで顔を近づけその魔法の言葉を囁きかけようとす
ると、彼女が纏っている甘い香りで逆に俺が魔法をかけられそうに
なる。

「ぐ…」

ぐ…だが、この程度でやられる俺じゃない。べ、別にオンナノコに
慣れていないからこんなに魔法が効いているというわけでは決して
ない。絶対にだ。

彼女の固有結界による精神攻撃で朝っぱらからたじたじだが、なん
とか言うことができた。

「プリン」

詠唱を完了させる。 たった3文字のこの言葉だが…

「ううん…ぷ…プリン…？」

彼女を現実には召喚するには十二分すぎた。

ごそごそと体を左右に揺すりながら栗崎の頭が枕を作っていた両手
から引きはがされ、半目でこちらを見てきた。

彼女のデコには腕枕をしていたことを証明する赤い紋章…もとい赤

い跡がついている。

ポーっとしながらも俺の存在を認識したらしい栗崎は、若干の掠れ声でこう言った。

「んにゃ…あ…辻村君…おはようっ」

畜生寝起きでも可愛いだなんて一体どうなってんだよ。

「おはよう」

んんーと目を擦りながら完全に体を起こし、口元をむにゃにゃとさせる。これは5分10分の眠りから来る動作ではない、益々彼女がいつ来たのか興味が湧いた。

「んー…、とりあえず顔洗ってくるね」

そう言うなり彼女はS字を描きながら立ち上がり、昨日プリンを買いに行ったときの俊敏さは皆無な動きで水道へ向かっていったのだ。

「…それで、どうしてあたしを起こしたのかな？」

席につきつつ四月のやや冷たい水で睡気を打破した栗崎がまだちょっと残る眠さを付け合わせながらそう聞いて来た。

「いや、他に話す相手もいなかったし、ちょっと聞きたいことがあったな」

正直起こしてしまったことを後悔している。反省はしていないが。

「えー？なにになに？辻村君があたしに聞きたいことって…もしかして好きな冷蔵庫？」

は？

そんなことをはにかみながら聞いてきた。そこに興味はない。

好きな『人』ではなく『冷蔵庫』がこの18歳の思春期少女からよもや発せられるとは誰も思うまい。

「え？いやそんなn…」

「そうだなあ、あたしはKA93W-225Z型が好きかな？あれ瞬間冷凍機能がついていていいよ」

スタンド名『我世界』くりさき・ザ・ワールド。相手は死ぬ。

まずい、こいつを発動したらこのままでは完全にペースを栗崎に握られてしまう。

なんとか掌握仕返さなければ俺は死ぬ。

「栗崎」

「そのほかにも10分で氷が…ん？どうしたの？」

「俺が聞きたいのはそれじゃないんだ」

真面目な顔を作って彼女の暴走を食い止める。

「ええ？そうなの？」

ここで相づちをうつてはいけない、また話が明後日の方向に飛んでいってしまう。

「どうしてこんなに早く学校に来たんだ？」

話が飛んでいく前に早めに核心に迫ることにしなければ栗崎の猛々しい驚^{わたい}に話の腰を驚づかみされてぶっ飛ばされてしまう。…いっておくがギャグで言っただつもりはない。

「それはたまたま早く起きたからだよーっ。二度寝するなら家より学校の方が安心じゃん？」

なにかもの凄い重大な理由があると思ったが、そうでもなかった。…考えてみれば来て寝ている時点で何かをしに来たわけではないとわかるようなものののに、無理に起こしてしまう結果を残してしまった。

これは彼女に悪いことをしてしまった。俺はいきなり起こされても一切文句を言わない彼女に対して申し訳ない気持ち^{きもち}を声に出した。

「そりゃそうだよな。ごめん、起こして悪かった」

素直に謝る。

「いやいや大丈夫だよっ？さっきからずっと寝ていたからもう眠気もないよ？」

小首をかしげてそう言う彼女は、まるでどうして俺が謝ったのかわからない体^{てい}だ。

その心の寛容さに俺は涙するしかない。

「そう言ってもらえると助かるが…。とりあえず謝っておくよ」
「大丈夫だってば！のーぷろぶれむだよっ」

ガッツポーズをして白い歯をくつきり見せる破顔一笑は、どんな絶望に打ち拉がれていても立ち直らせる事ができる国宝級の笑顔だ。俺も釣られて顔をほころばしてしまう。

「うんうん、結構結構。別に夢を見ていた訳でもないしっ」

夢…か

俺がその単語を聞いた途端彼女の顔にはとてもじゃないが似合わない不安の色が混ざり込んでこう声をかけてきた。

「っ、辻村君？どうして突然そんな顔をするの？あたし何か辻村君に悪いことをいっちゃったかなっ？」

栗崎のそんな心配そうに尋ねてきたのを聞いて初めて自分の顔が渋面になっていたことを認識する。

俺は夢と聞いただけで無意識に顔を渋めてしまうほど敏感になってしまっていることに意中で落胆する。

渋めた理由を挙げると言われたら、今朝見たこと以外答えようがない。つい思い出してしまったのだ。

…その程度で顔色を変える信号を送りやがる自分の脳はなんて愚かで滑稽なんだ。…

………

…今はとにかく誤解を解くことが先決か。

栗崎には未来永劫そんな顔をして欲しくない一途な心で、唇を窄めてやや上目遣いで心配してくれる栗崎にこう告げた。

「い、いや、すまん。今朝食ったゴーヤの味を思い出してしまったな」

そら笑う。

笑顔100点常連者の栗崎がこの俺の作り笑いえがと自分の笑顔を比較して採点したら、失笑しながら0点をつけるだろう。

「そんなことよりさ、普段はどんな夢を見ているんだ？」

話の軌道を俺から逸れるような形に整える。

そして彼女はうまくそのレールに乗ってくれ、パツと顔を明るする。

「ゴーヤなら仕方ないねっ。え？あたしが普段見る夢？んーとねー」

彼女の無垢な笑面と無邪気な態度に俺は救われたような気分になる。栗崎の女神すらも嫉妬するほほえみは万人の精神を穏やかに、そして落ち着けてくれると確信する。

「どうなんだ？」

雲を掴むより難しい栗崎の頭の中で繰り広げられる夢は、少なくとも達也より興味が湧く。

『すみませんね！見る夢まで夢がないやつで！』

そんな将来ニートしか職業選択ができない達也の声が、脳内でフルボイスで再生された。

…こうやって馬鹿な事を考えて頭から遠ざけるしかない。

「んっ…やっぱり聞きたいの？女の子が見る夢を。辻村君も男の子だねーっ！」

いやみのない晴れやかな笑顔でそういう。

その男の子だねーってなんだよ。

「まあそう言う事だ。教えてくれよ」

「しょうがないなあ、んじゃあ2日前みた夢をおしえちゃうとお」

大人の家庭教師が小学生を誘惑するような口調でそう言った後、コホンと咳払いをして準備を整え…
ガラッ

突如俺達2人の行為以外で何かが行われる音がした。音的には扉を開閉するものであり、それは誰かが来訪してきたことを意味する。

「…！」

俺と栗崎は互いに顔を見合わせ、その姿を視認しようと音の出所である黒板側の扉に揃って注目する。

「…おはようございます」

…というその控えめな声を聞く前に俺は誰なのか理解することができた。

右手にGペンを持っていれば十中八九神納寺とわかるように、あんな黒曜石と見間違えてしまう黒髪を見れば誰なのかわかるものだ。

「おはよう、黒羽」

「おっはよーっ！」

その髪の所有者に挨拶を返す。

黒羽はこちらを一瞥して誰なのか確認しどう判断したのかわからないが、軽い会釈を自分の机に向かいながらやってくれた。

しかし何度見ても反則級のかわいさだなあ…

…ん

そんな姿に半分見とれていると、彼女からふとなにか違和感を感じた。

ワンピース スやBAKUM ANなんかがある今のジャンプの連載陣の中に『北斗の拳』が混じっているような、そんな時代錯誤を感じる違和感が。

下履きで歩くことにより奏でる音色のみが支配するこの教室の唯一の演奏者である黒羽に視線をロックオンしてその正体を確かめる。

『なめるように』と言っては語弊があるので換言する。黒羽の頭からつま先まで『隅々まで』視線を巡らせる。

そこでようやく俺はそのアナクロニズムじだいさくに気付く。

この違和感の正体は人形だ。それも熊の。

黒羽の制服ポケットからひよいと顔を出している可愛らしい熊の人形が相当年季の入っているのか、随分色褪せていて、こういつては失礼かもしれないがボロボロだ。

…彼女から来るこのしっくりこない感じはどうやらあれからきているようだ。しかし存在感は申し分なく、可愛い黒羽が身につけているのなら尚更だ。

するとどうして彼女はあの人形を持っているのだろうという疑問と、なぜあんなに大切に扱っているのかという疑問が同時に脳を埋め尽くす。

この疑問を解決する一番手っ取り早い方法は当然聞きに行くことだが、その思考に別の思考がぶつかってきてその早計な判断に釘が刺される。

その第2の思考が言うには『昨日が昨日だ、まだ彼女の警戒心が完全に解けたとは言い難い』…という早漏な第1の思考とは真逆な意見だ。

最もな意見であり、実際その通りである。新学期が始まって2日、焦る必要もないだろう。

…という脳内円卓会議をいざこざなく無事終わらせると、さっきか

らなにやらそわそわしている栗崎が俺に物欲しそうな目をギラギラさせているので脳を通常モードに切り替え、栗崎に応答する。

「…なにかに言いたげだな」

目を細めながらそう聞くと待つてましたと言わんばかりに笑顔を送き誇らせ、突然栗崎の顔が大きくなる。いや、それは遠近感の問題であり、実際はただ顔を近づけてきただけだ。

先程感じた甘い香りに意識を略奪されそうになるが、いかにもな平静を装い彼女の耳打ちに耳を傾けると俺は苦笑いする他無かった。

「ねえねえ辻村君、あの子黒羽…ちゃんだっけ？お互いよく知らないからもう一回自己紹介してきたほうがいいかな？」

…という栗崎らしい質問が耳に入り込んできたから。

これは120円の350ml缶を買うか、30円足して500mlのペットボトルを買うか悩むとは比べものにならないくらい重大な決断を迫られており、生半可な返事をしてはいけない。

しかし、『コミュニケーションx』の達也とは違い『コミュニケーション』と『笑顔』のスキルを所持する栗崎なら、黒羽とうまく会話できるかもしれない。

それに同姓というアドバンテージもある、なんだ、何も心配しなくても勝利は必然なので俺は自信を持ってこう告げた。

「そつだな、やってこいよ」

「うんっ、いつてくるでありますっ」

椅子を後ろに引きずりながら立ち上がった栗崎は俺に敬礼をしてきた後、体を翻して黒羽の元へ。

これほど勝利が確定した戦いを見に行く事はないだろうと俺は幾分

余裕ある態度で経過を見つめることにする。

ツカツカと目標へ向かう。

5秒ほどで戦場に到着した栗崎は黒羽の真横について、この筆記音すら聞こえてくる静まり返った教室に息を吹きかえす一言を放つ。

「黒羽ちゃん？」

「！?...は、はい？」

突然自分の名前を呼ばれたことに驚いたのだろう、肩を挙げて体をビクつかせどぎまぎしながら声の元へ振り向く。

そこには初対面の人間にこれ以上ないほどの好印象を持たせる無邪気な笑顔を満開にさせる栗崎が。俺とは大違いである。

若干この状況を理解し切れていない黒羽に、栗崎がとびっきりの笑顔をセツトに理由を提供する。

「おはよう！昨日の自己紹介じゃあんまり黒羽ちゃんの事わからなかったから、こうして来たよっ」

「あ...え...？」

若干con(ry

「あたしの名前は栗崎あずき。あずきってよんでねっ！」

右手を胸上に当てて元気よく紹介する。

対して黒羽は謎テンションについてこれていない感が否めないが、なんとかこう返した。

「は、はい、よろしくお願いします」

満足げに頷いた栗崎は追加攻撃を加える。

「黒羽ちゃんの名前は？」

「はい、ゆきみです」

まるでこの図は部活の先輩が入り立ての1年生に質問攻めするようなそんな感じた。栗崎に後輩ができたら、こんな光景が見られるのかもしれない。

そのくらい、この光景はシユールだった。なんともほほえましい。

「ゆきみっていうんだ！可愛い名前だねっ」

「い、いえ…そんな…」

栗崎と黒羽がかみ合いそうで噛み合わないその微妙な距離を傍観して楽しんでいると…

「そんなことない…って、おっはよー！」

栗崎が突如言葉を切って教室の後ろのほうへ軽く手を挙げながら気持ちの良い挨拶をする。どうやら誰かが来たらしい。

「うつす、おまえらはやいね」

すると先ほど脳内で再生された声よりクリアな声が俺の耳から聞こえてきた。

振り向いて誰かを確認するまでもないが、まあ挨拶がてらに向くとする。

「よう」

軽く挨拶する。

相手はなんだかんだで朝早めに来る、地球上に存在してはいけく、見るモノ全てが性癖に関わってくる正真正銘のHENTAI、倉金達也がご入場してくる。

チラリと黒羽と栗崎を見て再び視線を俺に戻し、自分の席である俺の隣に腰を下ろす。

達也がチラ見した栗崎と黒羽は相変わらずの構図だが、話をしているので一安心だ。

達也は少々荒く鞆を机上に放り投げたかと思えばいきなり全身を俺のほうへ捻り、顔を近づけてくる。

栗崎の時とは違いまるで嬉しくない。やめる気持ち悪い。

どうやら耳打ちしたいらしい達也はその顔を俺の右耳まで近づけ、俺を破壊衝動へ導く呪文を唱える。

「え？あれ百合？」

ドムッ

「んほつつ？！や、やめろよ！朝食ったフルコースのフランス料理が飛び出るだろお！？」

どうしようもないくらい酷い思考をお持ちの達也の腹に一発入れておく。

「まったく…春巻きが飛び出してくるところだったぜ…」

フランス風春巻きですね、わかりません。大方冷凍食品の春巻きでも食ってきたのだろう。分類は中華だがな。

腹をさすりながらそう安堵している達也に、こちらもどうしようもないくらいの蔑視をし、こう言い放つ。

「お前あれが百合だというのなら、クラスの大半の人間は百合とゲイで溢れかえることになるわけだし、俺達も例外じゃあないだろ」
「は？…うええ…俺とお前の濃厚な絡み…？なんなの？馬鹿なの？死ぬの？」

引いている達也に春巻きだけじゃなくて胃液も吐き出させてやろうかと本気で迷ったが、食事中の方がいるかもしれないので主人公として自重しておく。

「やれやれ…」

「くつくつく、ぬしは面白いのう」

うるせえホ　口かお前は。エビフライぶっけんぞ。

「そんなことより」

さらっと話題を転換する。

そのくらい頭の切り替えが早ければお前はもうちょっと成績が良かったのかもしれない。

「今日俺が見た夢、聞いてくれよお」

両手を合わせ懇願するような態度を見せる。

他人が見た夢など、これほどどうでもいいことはない。だが脳内でねじ曲がりながら構築されるその奇っ怪さに誰かに話さずにはいられないのはわからないでもない。

…まあ暇は暇なので、変態の渠魁を務める達也さんの脳内と思うがままに料理された淫猥溢れ出るデッシュを、味見させてもらう。

「なんだよ」

そう聞くと自分の持っている能力をペラペラとドヤ顔でしゃべり出す敵キャラと姿が重なる達也がこういった。

「部屋に閉じこもっている俺が床ドンしながら『ババア飯はまだか！』っていう夢」

あたかも全国制覇した事を自慢げに語るような口調でそういいやがった。

「やれやれ…ついに夢でも世界は俺に嫉妬し始めたようで…」

「なんだ正夢か。お前が将来なる日常の断片を覗いてしまったみたいだな。夢くらい夢見ろよ」

「すいませんね！見る夢まで夢がないやつで！…ってちげえよつつ！…二ートになんかならねえよつつ！」

確かにこじつけた節はあるが、台詞回収したので、俺は満足だ。

視線を達也から外せば、少しうち解けたであろう黒羽と栗崎が互いに微笑みながら会話を交わしている。

それだけでも、大きな収穫だ。

そう、順調にいつているはずだった。

ガララァッガンッ！！

扉をカーテンと勘違いしているのではないかと疑うレベルの勢いでそれは開け放たれ、扉を開けられる範囲の許容を軽く逸脱して見事に反対側で激突する。

授業中だというのに随分場違いなそれは紛いなく奇怪なものであり、

クラス中の視線がそこに釘付けにされる。

奇怪なものが浮いてしまうのは世の常であるが、大胆に扉を開し威風堂々としてきた奴もまたその常に全くぶれることなく付き従っていた。

「こらあ！静かに入らんかあ！」

というのは教師生活30年はあるであろう、顔に刻まれたシワがそのベテランさを体現している化学教師から。

時刻は11時を少し回ったくらいで、所謂3時間目の途中だ。

どう見ても遅刻してきた彼女らにその台詞は正論過ぎて何も言えない。…が、そんな言葉は彼女らにとって寝言以下の価値しかないらしい。

「あ？うつせーよ」

反省の『は』も見せない彼女達。

3人組のど真ん中にいる常に眉間にしわを寄せているような顔つきの女が、そう科学教師に喧嘩を売る一言を放った。

教室の空気が凍り付いたように動かなくなる。

教師と彼女の4人だけがこの教室で動いて良い暗黙のルールが作られたかと錯覚してしまう程、4人以外のクラスの間人はただただ、黙り込んで動かなくなる。

俺もその1人であり、この情勢を見守ることしかできない。

「教師に向かってなんだその態度は！！」

衰えを見せながらもまだまだ現役である喉から怒声を教室に響かせた。

対して舌打ちして憎悪を一切抑えず全開にしている真ん中の女は残

り二人になにやら目配せする。

それを受け取ったかと思つたら、全員体を180度回転させて俺達に完全に背を向け、やがて姿すら消した。遠のく足音からも気怠さが伝わってくる。

「　　ったく、あいつら…」

溜息混じりにそう漏らす教師。

これでまた一つ彼の皮膚にシワが刻み込まれたであろう。ざわ…と教師の溜息を皮切りに今までの一部始終に対してこんこんと積もらせた思いをクラスメイト達が一斉に吐き出し始める。

「今の凄かったねーっ」

「俺の全盛期の頃はあれの1万倍すごかったぜ？どや？」

誰がどの台詞を言っているのかは割愛する。

「ほらお前達！授業を再開するぞ！」

手を叩きながら授業の環境を再構築している。

授業を再開して1分もすれば、そこは先程のことなど無かつたかのようないつもの風景に戻る。

だがそれは徹頭徹尾無かつたかの『ような』だ。風景は平穏さを取り戻してもその心内は大きく荒れている。

それにしても…と俺は授業をすっぱかして頭を巡らせる。今どきここまで不良らしい不良はいない、どうしてもこれが最初に出る。

まるでそうキャラ付けされた不良が現実世界に紛れ込んできたかのようなのだ。

そのくらい、テンプレっていた。なぜか、なぜか違和感を感じてし

まうほどに。

この2日間過ごしてきて出る素直な感想だ。

そんな『不良』で人格形成された彼女たちを説明するのも億劫だが、一応しておく。うちのクラスメイトだ。

：よくよく考えれば昨日黒羽に野次を飛ばしていたヤツらだったんだと説明しながら気付く。

その集団のど真ん中にいた、いかにもリーダーの風格を醸し出していた女は中原藍。なかはらあい2年の後半から急にあんな風になったと聞く。

以前から教師達から問題視されているものの、手が付けられないというのが実情だ。

というのもいくら注意しても馬の念仏だというのは既に前提であり、それ以外の方法である彼女達の保護者へ連絡も、一切つかないため呼び出しようも注意しようもないからだ。

：しかしこれはあくまで噂の域を出ないのだが、現実問題彼女らの親が全く姿を晒さない辺りこの説かなり有力だ。

そんな重い問題を抱え込んだ彼女たち3人をまとめてこのクラスに詰め込み、新米教師であるまかり先生に丸投げするこの学校は意外にブラックなのかもしれない。

キンコンカンコンコン

：と、中原達の行動とまかり先生の今後を杞憂しつつ授業を適当に受けていたら、あつと言う間に授業の終了を知らせるチャイムが鳴る。

俺にとっては実に好都合だ。先生が自分の教科書を名残惜しげに閉じる。

「はい、んじゃあ今日はここまでだ」

どうやら3時間目の休み時間に突入したらしい。

授業の鎖が解き放たれた今、生徒達が気儘に行動を始める。

「んん…はうう…っ…やああつと休み時間がきたですう」

とはいえ3時間目の休み時間はなんとも中途半端な休みなので、適当にすごすことが多い。

昼休み食堂へ戦争しに行く奴等はその契約書ちやくしよをゲットしに販券機へこれまた内戦する時間ではあるが、俺には無縁の話である。無縁と言えば先程の台詞も、だ。

「先程の台詞も、だ。じゃねーよっつ！ほら！話繋いでやつたんだから昼飯くらい奢れや！」

生きていることすら勘違いしている達也が突然こちらを振り向き両手を開いてその間に顔を挟む形になり、そんな事をぬかしおる。

「お前の台詞が無くても話は繋がってたわボケ」

実に道理にかなった正しい意見を述べると達也が目を斜めに伏せ、どこか悔しそうな顔になってこう言った。

「ば…馬鹿、こうして俺が喋らないとお前に…触れて貰えなくなるだろ……気付きなさいよ……」

さて、この休み時間をどのようにすごそう？

「って無視すんなやゴルアアアアアアア！」

- 1 達也と暇を潰す
- 2 栗崎と話す
- 3 購買部で飲み物を買ってくる

2は2で良いのだが、ここルートの分岐点なので絶対に3を選ばなければならぬ

ちよいと喉の渴きを潤すために購買部に行つてこようか。

： 帰りのことを考えると潤した喉もまた渴いてしまふんじゃないかと思つたが、飲みながら帰れば何とかなるんじゃないかと思ひ直す。それに頭をつかつたんだし、糖分補給もしなければな。

休み時間は短い、そうと決めたならさつさと行動に移そう。

ガバガバの鞆から愛用して2年は過ぎる財布を取り出し立ち上がる。右手を見れば俺に無視されてふてくされたのか知らないが、なにやら文字を書いている。

： しょうがないので出番を増やしてやるか…。

「達也、一緒に購買部に行かないか？」

忙しく右手を動かし左手は添えるだけの達也に希望とも言える提案を試してみたが、達也は自ら断ち切つた。

プリントのほうに視線を固めたまま真面目ぶつた声で

「遠慮しておく。次の時間の英語のテストのためにカンニングペーパーを作らないといけないんだ」

…と見つければ単位すらお預けされる行為をさも当然のようにしている達也。こいつの辞書に『真面目』という言葉は登録されてないのかもしれない。

まあ俺もしたことがないと言えば嘘になるのであまり強く言えないが。

「せいぜい見つかって単位を落とすんだな」

捨てセリフを残して達也から離れて歩き出す。

「うぐう、俺と時間を潰せばカンニングネタがあつたのにい」

背後からそんなメタ発言が聞こえた。

悪いな達也、これもルートの為だ。

…というワケで特になにもなく購買部に到着する。

流石にこの時間はエサに群がるハトのような人だかりはなく、逆にスツキリすぎていて怖いとすら思えるレベルだ。

購買おばちゃん2人が、購買部の奥に三畳ほどある控え室でまつたりと談笑している姿が伺える。

昼休みの開戦に向けての小休止と言ったところだろうか。

「あ、はいはいいらっしやい？」

だが俺の姿を見るとその顔はすっかり通常営業顔に切り替わり対応してきた辺りは年の功だろうか。

そんな休憩の邪魔をしてしまった事に罪悪感を覚えたくらいだが、まあ致し方がない。

俺は70円を支払って紙パックのコーヒー牛乳を買い、ありがとうとおばちゃんに軽い会釈をして購買部から背を向ける。

さて、また階段を上るという無駄な労働を勤しむことにしようと、ストローをぶつ刺して口につけた時だった。

「ん…」

スツと、かなり先のほうから見覚えがある姿が出現する。

しかもその姿には勢いというものが存在しており、言ってしまうば小走りでこちらに向かってきている。

ゆさゆさと揺れるそれは胸ではなく、黒いツインテール。

何を隠そう、最近やたら出くわす俺達のクラスメイトの1人である黒羽雪見であった。

いつもの彼女からは到底予想することができないその俊敏な動きに驚きながらも、高校生の女の子が廊下を走っているその異常事態に疑問を浮かばさずにはいられない。

急いでいるところ申し訳ないが、一応あいさつだけでもしよう。

静寂がいとも簡単に彼女の息づかいを捉え、駆ける足音をリズムよく響かせるこの廊下で俺は軽く手を挙げて彼女に話しかける。

「よう、廊下を走ると危ないから気をつけろよー」

「え？あ、はい？」

彼女の勢いあるベクトルが俺の冗談による真逆のベクトルで相殺したらしく、その足が止まり俺を認識する。

自惚れかもしれないが、俺だとわかった瞬間その堅い表情が少しだけ緩んだような気がした。

「あ、辻村さん」

黒羽は手を伸ばせば届く距離まで近づき会話ができる程度の息切れをしながら、その頭が下がる。

「す、すみません…急いでいるので…」

そう言うが否や頭を上げた彼女は再び加速し俺の横を躊躇いなく通り過ぎる。

「急いでいるところ呼び止めてごめんねー」

背中越しにそう謝罪する。

…

…何をそんなに急いでいるのだろうか。

今の急ぎようといい、この2日間ですら彼女の行動に不可解を感じる点はかなりある。

見た目で判断するのは正直間違っているが、それでも彼女のすることには後ろから糸を引いているヤツがいるような気がしてならないのだ。

その操り主は、俺に一つの可能性を示唆させるには要素がありすぎる。
マスター

…いや待て。

ここで俺の今し方やった行為を何故か冷静になり、第三者視点で見つめ返す。

どうして俺はこんなに彼女の事ばかり気にしているのだろうか。

今更になってそれに気付く。

その理由を考えるのは実に容易いものがあり、すぐにその解が思考回路に流される。

それは最初の出会い方にインパクトがあったという事と、よく見か

けるという事。

…いや、そんな単純な理由なんかじゃない。

それらを遙かに超えうる何かを俺は感じている。今の今までの彼女が行った行動に対する考察が正にそれだ。

そこまで意中で呟いたところでまた一つの可能性が浮かび上がる。

…俺は…3年当初靄が掛かって姿を見せなかった『目標』を見つけてしまったのではないだろうか。

具体的になにがどう目標なのかわからない、その達成方法もわからないが、そう脳が思わせるのだから仕方がない。

この気持ちを言葉にすることができない…一体どうなっているっていうんだ。

そんな私利私欲に近い感情で彼女の行為に兎や角沈思黙考して、手を出して良いものだろうか。

現に俺は今から彼女の様子を見ようとまで思っている。

俺は…

1 様子を見る

2 帰る

フッ、と俺はこの選択肢を鼻で笑うしかなかった。

4月5日／水曜日（前）（後書き）

という訳で前半終了です。

辻村君の中になにかが芽生え始めているようです。

この後辻村君が取った行動は…？

それは次回で！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月5日／水曜日（中）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで中編です。

ここから具体的にいじめのシーンが入ってきます。暴言が飛び交っていますので、苦手な方、不快に思う方は『戻る』ボタンを押してもらえると幸いです。

物語は一体何処へ向かうのか…？

それではどうぞ！

4月5日／水曜日（中）

黒羽の行動の端々に喉奥に魚の小骨が刺さったのときようなあの居座り続けるもやもやを俺はずっと感じてきていた。

それを取り除く方法の中で『様子を見る』か『帰る』のうちどちらか選べだなんて、それは鼻で笑わずにはいられないというものだ。

様子を見るしかないだろう。

別に彼女に直接手を加えるわけでもないし、たとえその結果が勘違いだったとしても双方にダメージも糞もない。

俺が今置かれている状況は気になっている店に入るかはいらんのかの決断を迷っているのと何ら変わらない程度の支障だ。

何もしないで後悔するよりする後悔のほうが何倍も価値を持っているというのは今までの人生で生きていた中でよくわかつている。

どんな意味を持つとも、俺は彼女が気になっていることは間違いないんだ、ならやるしかない。

…なんだかこういう発想が超飛躍してストーカーが誕生するんじゃないかと一瞬心を惑わせたが、そんなことを思えるならまだ俺は大丈夫だろう。

そう自分に言い聞かせ、何故か引きずる罪悪感を頭の片隅に寄せて黒羽の方へ顔を向ける。

俺が黙考している間に彼女は購買部より少し奥の方にある自動販売機コーナーで足を止めている。

さて様子を見ると入ったものの、流石に廊下の真ん中に突っ立ってじろじろ見ていたらストーカー以下の変態たつやということになるわけだいや、そんなものは五十歩百歩だろ、もつと堂々としろよ。…と過激派の脳内議員が申し立ててきたが、姿を見られるよりは見られない方が良さだろうという慎重派が意見を押し切る。

俺は購買部の反対側より少し左に位置する男子トイレの入り口は少し凹んでいるので、そこに身を隠すことにした。

隠れ場所を見つけた俺は顔半分出して様子を見る。『家政婦は見た』
さながらの形を取る。

対象はせつせとお金を入れてなんかの飲み物を買っている。

その行為は1回で済むことはないらしく、取り出し口からペットボトルを取り出した黒羽はすぐさま2本目の購入準備に取りかかっている。

それにしてもあの人形は凄いな…

なぜかしみじみとそう思ってしまった。

ここから黒羽の位置までせいぜい20Mといったところだが、こんな離れていても熊の人形は圧倒的な存在感を示していた。

一度気にし始めたらもうそれしか見えなくなると言うのはだまし絵なんかでよく陥る現象だが、まさかあれでそれが再現されるとは…

…いやいや、俺は黒羽の『行動』とか『人形』を観察しに来たんじやねえ。黒羽のその行動の『行く末』を見に来たんだ。そこはきちんと区別しておかなくてはいけない！

このままでは誰かに見られれば疑いようなない犯罪者になってしまうが様子は気になるというこのジレンマに一人勝手にわたわたりしていると…

黒羽のツインテールがその動きに従って揺れる。つまりそれはこちらを振り向いたという意味であり、（俺が）危険であることも意味する。

やばい…！

俺慌てて背後の半開きになっている扉の中に身を滑り込ませる。

ここは女子禁制の聖域であり、黒羽が実は男で双子の妹の代わりに女装して学校に忍び込んでいる系エロゲでもない限り、彼女がここに来ることはない。

妙な安心感を覚えた俺は彼女が通り過ぎるのを待つ。

タッタッタ…

徐々にその足音は遠のいていく。

隠れる直前に見た限りでは彼女が抱えていた飲み物は全部で3つ。

それらをあのか細い腕に抱いてこれまた小走りしてどこかに向かっている。

… 3人分、あるいは自分用と2人分、それをどこかに急いで運んでいる…

残念なことに後者である可能性は低い。後者であるならばどうしても彼女はあんなに必死な形相で飲み物を買って走って戻らないといけないのかを説明しないといけない。

合理的に、最高にポジティブな思考で前者も否定し、1人で飲むと仮定する。

黒羽が大の飲み物好きな女の子で、急いで教室に戻って飲まないと時間がないの！…という設定上かなり無理のある女の子でもない限り、成り立たない。

消去法で考えると、どうしても3人分という結果にしか結びつかない。

… いや… まさか… な…

しかし生憎俺は思い当たる3人がいるわけで…

1番考えなくなかった事態が他のありうる事態を蹴散らし、優先順位1位の座に上り詰めその地位を不動のものにしていく。

1番最悪な事態の片鱗を、見てしまったというのだろうか。いや、ありえ…

そう無理矢理にでも納得させようとするがそれは公式野球のボールを飲み込めないように、素直にそう思うことができない。

神納寺が他人の位置がわかることを知ったときは全く質の違う衝撃が全身を駆けめぐり、寒気すら覚える。

… とにかく、追うしかないみたいだ。

以前彼女の行動を罰ゲームと思ったことがあるが、今回もきつとその類なんだ。そういうのが流行っているんだ。俺の早とちりだったと言ってくれよ。

俺は手の体温で少しぬるくなってしまったコーヒーを一気に飲み干し、兆しにも満たない希望を持って彼女を追いかけることにした。

彼女のストー：追跡は全く苦になることはなかった。

元々飲み物を持っていてることにより機動力が落ちていて、なお且つ階段という狭い空間を上る彼女を見失う方が難しい。

俺が階段を2段とばしで上っていくと、直ぐさま上り行く足音に追いつく事ができた。

缶とPETボトルが混じり合い、中の液体が踊る音も足音に合わせて聞こえてくるので、この足音が彼女であることは紛いない。

2階：3階：と、黒羽は30段くらい先にいる俺に弾む吐息を聞こえさせながら着々と駆け上がる。

そしてついに4階に辿り着いてもおかしくない所まで着たのに彼女は足を止めることなく階段を上り詰めていた。

つまり屋上に行くことがこの時点で確定する。

さつきコーヒー牛乳を飲みきったばかりだというのに、今日一回も水分補給していないような口の渴きを覚える。

怪しさが更に加速する。

短い休み時間にわざわざ屋上まで行って過ごす思考を持った生徒は少ない。いや、ほばいない。

それを逆手に取ると、昼休みや放課後以外で屋上に来る人間は希であり、そこで何が行われていようと誰にも気付かれることはないという事だ。

：これだけ論拠が存在すれば見た目は子ども、頭脳は大人の彼なら速攻で麻酔銃をおっさんにぶち込んで事件を解決へと導くだろう。だが俺個人としては全て論破して白紙に戻したい。こんなの、認めたくない。

そう思った矢先、黒羽は屋上入り口まで到着して両手が使えないため肘を使って扉を開けていた。

その中に一度入れば、彼女は彼女らの手によっておもちゃにされ、
気が済むまで遊ばれるというのに。

「おせえぞ!!!」

ほら。

「ジュース買ってくんのに何分かってんだ? あ?」

妙に聞き覚えがある…いや、デジャヴ…いや、さっき聞いた声が、
僅かに閉め忘れている扉の隙間からはい出てきた。

俺はまだ入り口までそこそこ距離があるというのに、100¹⁰⁰⁰マイル
ストリート級の勢いある罵声が鼓膜を突き刺し、俺すらも不快にさ
せる。

至急駆け上がり、耳だけじゃなく己の目でもこの光景をしつかりと
焼き付けなければならぬ。

ほんの少し開いているその隙間に目を当て、そして絶望する。

…ああ…もうこれは認めざるを得ない。

言い逃れも言い訳も一切することができない決定的光景の全容が俺
の眼に明らかになった。

これでもかと眉にしわ寄せて怒り狂う中原、そしてオプシオン2人
がさっぱりと晴れオゾン層が仕事をして作り上げた青空の下で、余
りに醜く汚い行為を平然とやっていた。

敢えてこの行為を具体的な名称で言うのなら、『いじめ』以外該
当するものなど知らない。

「す…ん」

地獄耳でも聞き取ることが困難なもはや言っているのか言っていないのか判別付かない程黒羽の声は小さく、弱々しい。

この場面で彼女たちに挨拶をするはずもないので、謝罪を述べていると考えるのが妥当…

次の寸陰、俺は目を何度疑って眼科に行こうかと苦悩するはめになる。

「は？謝まってんじゃねえよ！！これで何度目だと思っ
て
る
んだよ！！！」

ドムツ ガラガラッ！！
は？

「きゃはっっ！？」

う…
嘘だろ…？

俺はボクシングの試合を警備員の目をかいくぐって扉から覗き見しに
来た好奇心旺盛な貧乏小学生じゃない。なのはどうしてこんな光
景が目の前に広がっているんだ。

俺の視力が正常であるならば、間違いなく中原の容赦ない右拳が黒
羽の鳩尾に吸い込まれるように向かっていき、それ相応のダメージ
を黒羽は受けていた。

トウガラシを丸かじりし、襲い来る辛辣なショックを脳天にぶち込
まれる感覚と酷似するものを感じ、目眩すら覚えてしまう。

これが現実だというのだから現実というものはこの世で最も恐ろし
い、やり直し^{コンテニュー}が聞かないゲームなのだと胸に刻まれる。

「がっ…はっっ…」

そんな豪打を受ければ本能がそこを抑えるのは尋常一様で、黒羽は手に抱えていた飲み物すべて落として部位の痛み分けをしている。左目を見開き右目を半目にして両手で溝を抑え、必死に体勢を崩さないという人間として当たり前の反応をする黒羽に対して3人はそんな黒羽に冷笑を浴びせるという人間として最低な反応をしている。

「んツククク…」

「ねえ黒羽ちゃん、私達が飲むものが落ちて汚れているんだけど？これじゃ飲めないんだけど？」

「早く拾って？汚れを拭いて？ねえ？」

矢継ぎ早に中原のオプション達が自分の言いたいことを述べる。

「…」

中原の正拳から来る激痛と、このシチュエーションと、3人からの罵詈雑言と、ダブルパンチでは済まない屈辱の嵐が黒羽の涙腺を決壊させ、もう顔はグシャグシャだ。

だが、そんな陵辱を受けても尚彼女は無抵抗に、実に従順に彼女たちの命令に従い、缶ペットボトルを拾って自分のハンカチで汚れを拭き始める。

中腰になって丁寧に殆ど汚れなんか付いていない缶を自分のハンカチを汚してまで綺麗にし、それを中原に手渡す。

次の展開は様式美と言っても過言ではないので、安易に、容易に、簡易に連想でき、そして現実になる。

ガン！！

「拭き足りねえぞ！！こんな汚いものを渡すんじゃないよ！！」

缶の仕様用途が最初から投げものであるかのように、なんの遠慮も

なく黒羽の足元に投げつけ、その怒りに歪んだ顔も黒羽に叩きつける。

「…ん…い…」

両腕を眼前に寄せて防衛体制を取るがそれは後の祭りだ。

しかし投射角が完全に彼女の死角から飛び込んできたのだから反射的にそうするのは人間の摂理だ。

…なぜ中原と黒羽は対面しているはずなのに死角から飛んできたのかだなんて、解説するだけで胸が痛くなる。

それは、もはや黒羽は顔を上げて中原を見ることは万死に値する事であるためその黒髪で視界を遮断しているように見えてしまうほど俯いているからだ。

美しい髪のカートンの下にはそれを持つに値する顔立ちがあるというのに、中原達はそれを拒絶かのようにカートンに手をかけて開かせない。

…いや

馬鹿か、俺は。

どうしてこんなに冷静になって彼女の行動を実況しているんだ。

この作品は三人称視点じゃない。俺の目の前で行われていること、思ったことが文章化される。

なら、この光景に胸が痛むのなら、おかしいと思うのなら、変えてやれば良いんじゃないか。

俺の行動には何の制限もない、例えばここで帰ろうが勝手だ。

逆に言わなくても俺が止めに行くのも勝手だ。

未来を変えるのは俺。未来を変えていくのも俺。

あんな魔王でも指示して押しつけさせない不条理を束になって押圧おしへす奴等を止めない方がおかしい。

止めてやる。

そう決意を固めた俺は扉に手をかける。

彼女を助けなければ。

だが、いつだつてこの学校の時間と規律を統括するチャイムというのは残酷なまでに現在を正確にはじき出す。

キンコンコーン

！？

かけた手の反射弓へ素早い電流が流れていき、ビクツと生理的行動を遂行する。

気持ちが悪いくらいタイミングが悪くチャイムが鳴り響く。

「ちつ……。休：間が…終…か…。黒…、昼…み……」

視線を再び戻せば、見下す視線を一切変えないで中原がなにかを言っている。

しかしこの屋上に設置されている拡声器は校庭にいる人間にも聞こえるように音量設定がなされているため、そんなものが目と鼻の先にある屋上では人間の声など無力に等しい。

クソ…ここで俺が出て行っただとところでなんでここにいるのと言われるのがオチだ。

カーンコーン…

残響が拡声器の中で激しく行われている中、何かを言い終えた中原達はそれまで彼女に刺しっぱなしだった視軸をようやくはずす。

かと思えば3人が一斉に俺…いや、扉のほうへ向けられる。

意外といったら失礼だが、彼女たちは授業のために戻るつもりらしい。

このコースは間違いなく屋上から降りるコースだ。まずい。

ここで存在がばれたらすべてが終わってしまうため、作業を強制終了して俺は2段飛ばし階段を駆け下りる。

決着は昼休みに付けた方が良いのかもしれない。

とりあえず自分も教室に戻る。

ガララッ

授業の開始を告げるチャイムから1分もしないうちに俺は教室の後ろの扉から何食わぬ顔をして入る。

幸い、教科担任はまだ来ていないようだ。

いたときの言い訳を考えていたのだが、それも無駄になったので『ごみ箱』にぶち込んで無駄な容量を削減しておく。

自分の席に近づく休み時間中カンニングペーパーを作成していた達也がどうやらその作業を終えたらしく、なんと汚い清々しい顔でふんぞり返っていた。

「ん」

俺が帰ってきたことを視認した達也は何気なくこう聞いてきた。

「お前今までどこいつてkって怖っっ！」

「お前人の顔をみるなり『怖っっ』とか失礼極まりないな」

目を開いて驚きを露骨に露呈してきやがったこいつにそう言つと、それは俺にも言えることだと屈辱的だがこいつに教えてもらった。

「いや、顔が怖いぞ？どうした？ジュース買う金がなくてその顔で下級生力ツアゲでもしたのか？」

「な……」

これまた無意識のうちに表情が強張っていたらしい。俺は気分が顔

に出るタイプなのかと今更気付かされる。それでは社会でやっていけない。

とにかくこの顔をどうにかするため、息詰まる環境から脱却したかと思えば走ってここまで来た己の身体に空気を新調する意味も含めて俺は大きく深呼吸を1つ。

「ふう…ねーよ」

適当に体裁を整えて席に着くと

ガラッ

再び扉が擦られそう悲鳴が聞こえた。

担任が来たのかと思ったが、どうやら入ってきた人間は特定の人物を担任している奴等だった。

…中原先生とその補佐達のご登場だ。

他の生徒達からの視線も俺同様担任を期待したそれだったが、中原達だと確認した瞬間、誰しもがその視線を歪曲させた。

ガンを飛ばしたんじゃないかと勘違いされるのを未然に防ぐための利己的な判断からだろうが、それはなにも間違っていない。

ざわ…

うまい具合に調査された絵の具に中原達と言う黒が入ってきてすべてそれに飲み込まれるように、教室の雰囲気が劇的に変化する。

対して彼女たちは先程の出来事がすべて嘘だったような態度…具体的に記すなら笑いながら入ってきた。

恐ろしい…

あんな顔をした彼女達を見て、誰があいつらに嫌疑することができようか、いやそんなことは心を読める魔術師でもない限り無理だ。

そんな中原達が各々の席に着いた頃だった。

「…」

ヒョコつと奴等が開け放って閉めもしなかった半開きのドアから黒羽が滑り込んできた。

周りから見ればいつもの半俯き気味の無表情だが、今の出来事を聞いていた俺には周りの連中の輪に入ることはできない。

悲しみ、恐怖、怒り…すべてをかみ殺したかのような表情にしか見ることができない。

あれから彼女は涙を枯らしてその顔を作って来たというのか。いや…作られたのか。

教室では無表情でいないとどうなるかわかっているのか…という呪いよりタチが悪い悪魔の悪口雑言によって。

しかし…

そそくさと自分の席に戻っていく黒羽を見ながら思う。

あんなことが本当に、身近に行われていた事実は俺に見るものすべてが真実ではないということ嫌でも思い知らしてくれた。

一体どうして？なぜ？なにがどうなって？こんなことに？

訳がわからない。

しかしここでどうして黒羽が虐められているのか考えたところで机上の空論になるだけなので、これ以上無闇に追求することはやめた。
…ただ、わかっていることはただ1つある。

『ちっ…。休…間が…っ…か…。黒…、昼…み…』

断片的ではあるが、中原は確かにこんな事を言っていた。推量に過ぎないが、言葉を当てはめてみると…

『ちっ…。休（み時）間が（終わ）っ（た）か…。黒（羽）、昼（休）み…』

という、完全に呼び出しを意味する文章が出来上がる。

…俺はそれを止めに行くのか、行かないといけないのか、行かないのか…そこが問題だ。

別言するなら私情で止めに行くのか、業務的に機械的に学校の規律を保つため証拠を捉えに行くのか、見て見ぬふりをするのかと言うことだ。

残念ながら俺に後者2つの選択肢は存在しない。

如何せん弁護士をしている父の血を受け継いでしまった所があり、それが偽善かはわからないが『正義感』が初期スキルにあるからだ。いや、さつき中原が黒羽を殴った時点で飛び出さない辺り、俺は偽善者なのだと軽く鼻で自嘲する。

とは言え俺にはこの件についてはなんの関係ない。出逢って2日しか経ってない人間に助ける義理もまた、ない。

だが、それでも俺は何とかしたいと今思っている。

もしかしたら情けや同情に動かされてできた偽善なのかもしれない。「可愛そうだから、助けてやるよ」なんて上から目線からの行動なのかもしれない。

しかし、偽善だろうが何だろうが彼女を助けるという結果さえ果たせればそれでいいんだとネガティブ一点張りの単細胞な思考に一喝する。

それに、俺はなぜだか全くわからないのだが彼女の事が気に掛かって仕方がないのだ。なら尚更だというものだろう。

よし…やろう、やってやる。

そんな決意を胸に焦点を中原達3人に集め、世界を滅ぼす絶対悪を今一度確認する。

…相変わらず笑いながら話し合っており、そんな光景に俺は眉にしわを寄せずにはいられない。

あんな事をして黒羽を傷付けるのは彼女達にとっては日常茶飯事であり、罪悪感とか後悔なんてものは最初から欠片としてなかったのだろう。

3人で雑談をしてあんなに楽しそうに屈託無く笑っている奴等を見て、そのあっけからん態度に殺意すら芽生えてくる。

そんな彼女達に黒羽は汚辱を受け、苦しめられているというのだろうか。

狂った王の我が儘と機嫌を国の金で満足させ、その代償に貧困の極致まで追いやられている平民の構図が今の惨状を的確に表している。

抗うためにはそれ相応の覚悟が必要であり、革命を起こそうというのなら王に屈しない鋼の心が必要だ。

だが、いつだってそんな心を持ち、革命を起こす人間は少数派だった。

大多数の中に所属する黒羽は、ただただ王の我が儘に死ぬまで付き合うことしかないだろう。

平民である黒羽の後ろ姿を見れば、顔を見なくても覇気は死に絶えた命令に従うロボットになってしまっている事を背中が語ってくれる。

そこに俺が抵抗者^{レジスタンス}の一人になればいいのだが……
ガララッ

「すまんすまん。授業を始めるぞー」

絶妙なタイミングで英語教師が授業の開始を合図する。

少々小太りの、30半ば過ぎの中堅教師といったところだろうか。二重顎を作ってしまう笑顔を浮かべ、こう言った。

「じゃあ、今日は昨日アナウンスした通り小テストするぞー」

適度なブーイングがなされる中、先生はニコニコしながら小テスト用のプリントを配る。

「フフっ、今こそ勉強の成果を見せてやるぞ！進研ゼミであんなに勉強したんだもん！」

隣で殊更にそう言う達也の机の下にはカンペをもった左手が隠れており、ゼミの漫画でこのシーンが再現されたらさぞ哀しいものになるだろう。っていうか詐欺だろ。

普段ならカンペを取って遊んでやるところだが、今は普段ではな

いのでやめておく。
全ては昼休みの決戦に向けて…だ。

「…それじゃあ、今日はここまで。ちゃんと24ページの予習をしておくんぞー」

そう言つて授業は終了し、学校は昼休みと呼ばれる時間帯に移行する。

三々五々生徒が自分の行くべき場所に向けて散っていく。
ちなみというか、ここで言つのも正直無駄なのだが、達也は小テスト0点だった。

理由はカンニングペーパーを作ったページとテストのページが1ページずれていたから。

テスト用紙を配られたとき、達也のあの絶望の淵に音速で叩き落とされた時の顔は今でも忘れない。

本人はショックのあまりテスト終了後からずっと机に伏してピクリとも動かない。

大凡最初こそはショックで顔を上げられなかったのだろうが、授業が進む内に純粹に眠ってしまったのだろう。

『地の文を読む程度の能力』を持つ達也がここでツッコミを入れてこない辺り、俺の推測は真実であろう。

…さて

クラスメイト達は屋上なり購買なり学食なりでバラバラになり、この教室には通常の4分の1程度しかない。

そして、4人の女子生徒も例外なく立ち上がり、並ぶ。完成された縦一列で移動を開始する。

だが、決してそこは食物を購入したり食べたりするところではない。

強いて言うのなら食物をいたぶるところ…と言ったところか。

メンバーは前から中原、黒羽、そして2人の女子生徒。

それぞれの顔は十人十色であり、先頭の中原はいつもの無愛想を前面に出した表情で、二人の女子生徒は互いににやり合っている。

彼女達に挟まれる形の黒羽は無実の罪を着せられての公開処刑執行2分前の、絶望に満ち溢れた不憫な修道女にみてとれる。

…それは形容でも何でもなく、真実らしさが存分にある。

そんな異様な4人を見送った後、席を立つ。

何をするのかだなんて質問は愚の骨頂であり、弁当を買いに行くのだなんて愚答は口を縫いつけてでも言わない。

お前達の好きにはさせない…

尾行していると気付かれない程度の距離を見極め、そして開始…ズキーンン！！

「ぐぼっ！！？」

「キヤッ」

教室の後ろ側から出ようとした刹那、反対側からやってきた何者かの猛烈なタックルがパーフェクト無警戒な俺に直撃する。

暗殺者も顔負けで涙を流して逃走する位完璧な闇討ち（？）に、為す術もなく衝撃の反動に従い尻餅について倒れ込む。

反動こそその勢いに準じたものであったが、衝撃はやけになにか柔らかいもので吸収されてたような気がしないでもない。

そこはあえて指摘しないのが紳士のたしなみってヤツだ、ああ。

「うおお…いつつ…だ、大丈夫？」

まず第一に女性らしい方にぶつかってしまったことによる傷害の安否を確認する。

「あいててて…」

こんな一昔のラブコメみたいなイベントに遭遇するときのキャラの特徴と言ったら…

「って！辻村君だったの！」

『こんなやつ』で説明は何一つ抜けることなく済むわけだ。パンを加えて走って欲しい女の子ランキング一位の栗崎さん登場だ。

「すまん、怪我はない？」

俺と同じく尻餅をつき、尻をさすりながら痛みを堪えているドSな^{たつや}ら発狂ものの姿にそう聞くと

「あ、あうっ…大丈夫だよ。それよりあたしが謝らないといけな
いよっ」

顔は少々痛みに耐えているのか、歪んでしまっているがその顔から笑顔が離れることはなかった。

「忘れ物をして焦ってここまで走って戻ってきたあたしがわるいんだよっ。ごめんっ」

「いやいや前方不注意だった俺が悪いよ。ごめんな」

お互い圧迫をかけてしまった箇所を抑えながら立ち上がり互いに謝り合い、俺がそう言うとお金を払ってでも見たくなる笑顔を覗かせてこういった。

「そう言ってくれるのなら、そう言うことにしておこっかな？」

尻餅の痛みを帳消しにしてくれて、尚且つおつりが来る子供のような笑顔が見れただけでもぶつかった甲斐があったのかもしれない。思わず微笑み返してしまう。

いやいや、今はこんな和やかな雰囲気浸っている場合ではない。重大なミッションがまだ俺には残されている。

「すまん栗崎、ちょっと先を急いでいるんだ。先に行っておくよ」
「うんっ、本当にごめんねっ」

そう断りを入れると俺に興味がないのかそれとも聞かないでおいでくれたのか定かではないが心地よく頷いて快諾してくれた。

栗崎から視線をはずし、廊下へと向ける。

廊下に出た後、すぐさま彼女らの集団が近くにいないか左右を確認する。

弁当を持って他のクラスに行こうとする者、歯を磨きに水道へ向かう者、購買へ向かう者などそれぞれ目的を持って行動している生徒をチラホラと見かけるが、俺が熱望する集団の姿が見えない。

クソ…完全に見失ってしまったようだ…！

…とはいえ当てがないわけではなく、大体行くところは想像できる。そもそも昼休みなので彼女達が彼女を食べる場所は限定されるわけだ。

しかし確信があるわけではないので、もし違ったときのロスタイムは相当痛いが…

俺は…

以下リアルタイムイベント

黒羽の元にたどり着くまでの間に要した時間（選択肢）によって、イベントがABCの三つに分かれる

- 1 屋上に行く
- 2 神納寺に聞きに行く
- 3 闇雲に探す

±0からスタートし、選択肢を間違える毎に+1する。

+1〜2で見つける A +3〜4で見つける B +5以上で見つける C

A Absolute! / 絶対的な、完璧な

B Bravo! / よくやった、うまいぞ!

C Cool! / かつこいい、冷静な

…という、なにげに凝った選択肢を用意していたのだが、これをプログラミングするのは相当面倒な事になるだろうと思う。
しかしながら今回は一番最速のルートである2で行かせてもらう。

…神納寺に聞けばいいじゃないか。

つい昨日俺は神と同等の力をこの目でまざまざと見せつけられたばかりじゃないか。

Gペンを紙の上に置き、神納寺の気合いのこもった一言で飛び散るインク。

それをなぞるだけで人の場所がわかるというまさに神業をまざまざと見せつけられた昨日。

今でも鮮明に記憶している。なにせインパクトが強すぎた。

そう言うわけで人探しのプロ、いや、神に聞いた方が手っ取り早いわけだ。

早速神納寺のいる3年4組へ向かうことにしようか。

しかし、向かうもなにも隣のクラスであるので、少し身体を右に傾けて4、5歩あるけばそこは目的地だ。

「神納寺！」

そう呼びかけながら扉を開けてお目当てである神納寺を探…

！？

放課後忘れ物をしていたことに気付いて教室に戻るとそこには誰もいないはずなのに楽しそうに誰かとお話している女の子を見てしまった時の、あの無許可で恥部をみてしまつて申し訳ない感じが溢れ出てきた。

なんだ…ここは…教室は一体いつから女性専用車両になつてしまつたのだろうか。

ざつと数えても50はいるであろう、教室を埋め尽くすほどの女、女、女。

言い換えるなら花壇に無数に生えているクロユリの花畑をみている気分だ。

各人が持ち寄つた弁当を囲み、実に楽しそうに談笑しているではないか。

おかげで俺の声は彼女らの会話の防火壁ファイアウォールによつて容易く弾かれてしまつたようだ。

声を使えなくて、こんなに人数がいれば目的の人を探すのは己の目だけになるわけで、見つけるのに一苦労しそうだがあくまでそれは一般論であつて、現実リアルの話である。

そんな一般という型に到底当てはまるわけがない神納寺にとって常識などデコレーションにすら満たない。今回だつてそうだ。

教室を人間だけで占拠している所であつても、彼女の圧倒的存在感
は健在するどころか更に際だつていた。

無数のクロユリの中にたつた一つだけ黄金に輝く一輪の花は、まさ

に教室の中心にあった。

黒の中に一つだけ金が混じっていて、だれがそれを見落とすだろうか。

この教室で金髪であるのは彼女だけだ。全く、校則はなにをやっているんだか。

まあそこは置いておき、そこに照準を合わせ手でメガホンを作ってシャウトする。

全体魔法より単体魔法のほうが威力が高いというのはゲーム的思考だが、ターゲットに向かって叫んだ方が無差別にやるよりかは伝わりやすいだろ。

「神納寺！！」

「?!?!」

「!?!」

単体魔法のつもりだったが、コマンドミスで全体魔法になってしまったらしく、その叫びと同時に中の人間の視線が全て俺に注がれる。死んだように静まりかえる教室。これではまるで俺が空気読めていないみたいじゃないか…

「つ、辻村殿!?!」

漸く目当ての人物が俺の存在に気付いてくれたらしく、慌てて立ち上がってくれた。

「食事中すまん！ちょっと頼まれてくれないか？」

「わかりましたわ、今すぐそちらに向かいますわね」

そう言って神納寺は教室を縫うようにしてこちらに向かってきた。

「…」

前方180度から差し向けられる視線がもの凄く冷たいものに感じてしまうのは、気のせいではないだろう。

「んっ」

なんとかぎゅうぎゅう詰めになっている教室から抜け出した神納寺は、一つ咳き込んで話を聞く体勢を整える。

「…それで、辻村殿がこのわたくしに頼み事とは？」

期待半分、うれしさ半分混合しているこの表情なら、快く俺の頼み事を引き受けてくれるだろう。

「単刀直入に言うと、人を探して欲しいんだ」

それを聞いた神納寺は「なんだそんなことか」と、腕を組みつつ眉を一度だけ上げ下げさせてこう答えた。

「辻村殿がわたくしに頼って人探しとは珍しいですわね」

「俺もそんな時があるさ」

栗崎とはまた違った微笑を浮かべている彼女は、その顔のまま肩をすくめてあっさりな口調でこう言った。

「まあ…深くは問いませんわ。人捜しということでしたらおやすい御用ですわ。大船に乗ったつもりでいて欲しいですわね」

これほど頼りになる発言はない。喜んで乗船させてもらおうか。

俺が頼む、と短く返事をする。それをオウム返しした神納寺は右ポケットに手をつ込み、当たり前のようにGペンと黒いインクを出す。

食事中は流石にそれは直しているのね…とどうでもいいことを考えていると言葉が頭に流れ込んできた。

「では貴方が探している人の全体像を頭に思い浮かべて下さる？」

「ああ」

なんだか精神力ウンセリングを受けている気分になる。

つてか頭に思い浮かべないといけないのは同姓同名の人物を当てないためなんだろうが、まんまその設定がデスノートすぎて、当時の俺がなにに影響されていたかが丸見えで実に滑稽である。

…ご託はこれくらいにして、真面目に俺が探している人物…黒羽雪見を思い浮かべる。

…

…頭の中でも、彼女は笑っていなかった

頭は折れ下がってうつむき、暗い顔で地面を見つめている。

この姿しか想像できない自分に怒りが湧いてくる。

どうして…彼女が笑っている姿を想像できないんだ…！

すると神納寺が思案顔でこちらに焦点を合わせてきた。俺の想像力が足りなかったのだろうかと問い合わせようと口を開きかけたとき、彼女の言葉によって封印される。

「…申し訳ないですね。今日はMPが足りませんわ」

えむぴー？…MP？…マジックポイント？マジックポイントが足りない！？

「ままマジックポイントが足りない?!」

なんだよ！面接で特技イオナズン　って書いておいて実際はできないから、やれっっていわれたときの言い訳で用意していた言葉みたいじゃないか！

RPGのパーティ内でこんな会話を交わされているのだろうかと少しだけ想像してしまっただが、それはそれでシュールな光景だな。

「ええ、この儀式はMPを20消費しますの、わたくしの最大MPは…」

「わ、わかった。とにかく今日はできないのか？」

駄目なら駄目でも構わない。ぶっちゃけこのイベント丸々カットされてもなんの問題もないんだ。

「いえ、わたくしが直接その名前を思い浮かべればMP0で使用できますわ」

神納寺は若干の困窮が混じった口を結んだ後にそう言い、俺のセリフと地の文の両方を否定する。

「ですが…」

フツと、いつも自信たっぷりでこちらの目をガツチリマークする神納寺が珍しく明後日の方向へ視線を向け、なにやら齒切れが悪いセリフを吐く。

「ですが？」

背中を押す。

押された彼女は再び視線を交差させてこう言った。

「プライバシーに関わる問題です故、申し訳なくて…」

い…「いやいや、昨日やっていたときも名前聞いていたじゃないか。それと同じであって、別に気にすることはないだろう」

もつと深刻な問題かと思いきやそこまで大した障害ではいことの驚きにより、頭より先に言葉がでてしまった。

「で、ですが…辻村殿がたくしの力を使ってもお会いしたい人物の名前を聞くというのは…いささか気兼ねしてしまいますわ」

お前は俺をどういう風に見ているんだ。

「そんな気にする必要はないさ。お願いするよ」

神納寺を安心させるつもりで言った台詞は思惑通りの効能を果たし、ほんのり微笑んでくれた。

「わかりましたわ。では、お伺いしましょうか」

そう言うなりその目に力が入り、儀式が始まる事を無条件に意識させる。

つられて何故か身構えてしまう。

「辻村殿が探しているその人物の名前とは？」

選択肢

名字と名前を選択肢、一定の条件を満たせば次に進める

(名字) 1「黒羽」2「佐藤」3「内藤」4「神納寺」
(名前) 1「ホライゾン」2「雪見」3「夏帆」4「裕也」

中々誰得な面子がいる。そしてこの選択肢も相当…いや、本気で面倒なプログラミングになりそうだと、こういつてはアレだがこの段階に来るまでに打ち切られなくて良かったと思う。

これプログラミングした後に打ち切りするだなんて考えるだけでも恐ろしい。

…と制作側の愚痴は置いておいて、本題に入るが、これも正規ルールを突き進ませてもらう。

「黒羽」「雪見」だ。

そう告げると先程とはかなり質の違う、どちらかと言えば眉をひそめるという表現が正しい眉根の寄せ方をした神納寺だが、すぐにいつもの調子でこう言った。

「くろは…ゆきみで、間違いないですわね？」

「ああ、頼む」

頷くと神納寺は左のポケットから先程の英語で使用した小テストのプリントを取り出して床に置く。

おいおい、紙すらそんな適当でいいのかよ…。

意中でそう呟く俺など気にするはずもなく、着々と準備を進める神納寺。

といってもGペンにインクを付けるだけなのだが。

「それでは…」

準備完了した彼女はインクを染みこませたペンを床においたざら紙の中心に置いて一呼吸入れる。

これが習字の光景だった。霧囲気であるのになあとそのまんまな光景に思わずそう考えてしまう。

っていうか通り行く生徒のその自然っぷりには焦る。まるで神納寺のすることはもはや当たり前みたいなのその反応。いろいろおかしいだ…」

「くろはゆきみの居場所を教えたまえ!!」

俺の地の文を遮り、そう喝を入れると黒い水玉がペン先からあふれ出て来たかと思えば散弾銃のごとく拡散する。

この原理を追求できた人間はノーベル賞の枠を超える名誉と名声を手に入れることができるだろう。

手慣れた手つきで飛び散った粒をなぞっていく。

線と線が映し出した図はどこかで見たことがある。

…やっぱりな。

随分とまたベタなところである。

完全な予定調和を果たした今、ここにとどまる理由はない。

「ありがとう、神納寺、じゃあ俺は行くな」

軽く手を挙げてお礼を言う。

「お役に立てて光栄ですわ。それではいつてらっしゃい」

Gペンを華麗に回しながら見送ってくれた。

急げ…!

神納寺に見送りを受けながら俺は一直線にその場所へ向かったのだ。
った。

4月5日／水曜日（中）（後書き）

という訳で半分終了です。

神納寺をださせてもらいました。この辺りは完全に私の趣味です。すいません。

さて、辻村君は間に合うことはできるのか、そして今後の展開は…？それは次回で！

今回は少し長文になってしまう恐れがありますのでご了承下さい。

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月5日／水曜日（後）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで後編です。

かなり不快に思える文章が含まれていますので、観覧の際は十分に
気をつけて下さい。

辻村が向かった先とは…？

それではどうぞ！

4月5日／水曜日（後）

前回までのあらすじ：神納寺の力のおかげで黒羽達の居場所がわかった辻村は急いでその場所へ向かった！

これでは前回ではなく直前のあらすじではないかという無粋なツツコミはこの際無視することにする。

というワケで俺は神納寺の神技：『特定の人物の位置を地図に描き出す程度の能力』によって奴等の殺人現場を特定することに成功した。

だから俺はこうしてここまで来ている。具体的に場所を記すならそう、体育館裏だ。

学校に隣接する体育館は10年程前に作られたばかりの比較的新しいものであり、その大きさはなかなかのものである。

縦は概ね50Mあるくらいで横は30M程。高さはお隣の学校の3階相当だ。

自分の出身学校の体育館の大きさを参考にしたというのはみんなには内緒だぞっ

普段は放課後にもなるとバレーボール部とバスケットボール部とバトミントン部が熾烈な場所の奪い合いをしているわけだが、昼休みとなれば話は別だ。

体育の時間と放課後以外はほぼ出番のない体育館は、葉っぱの擦れ合う音が聞こえるくらい静まりかえっており、絶好のいじめスポットとなっている。

その体育館の裏とでもなれば尚更で、様々な意味でやりたい放題になるわけだ。

余談だが、昔は昼休みもココは使えていた。しかしある日誰かがボ

ールでガラスを割り、その犯人が出てこなかった為の使用禁止にされたという、学校でありがちな『連帯責任』を食らったのである。そんな近づく意味すら問う場所に俺は昼食を捨ててでも赴いている。理由は今更ココに記載する必要もあるまい。

あとはこの角を曲がれば所謂『体育館裏』に到着だ。

太陽の昇りの関係で日陰になってしまっている事により、裏は陰鬱具合がより立体的になっている。

もう一度神納寺が描き出した地図を確認する。

何度見てもココで間違いないし、その確証に更に肉付けしてくれる出来事は既に始まっていた。

「それじゃあ黒羽ちゃん？お 仕 置 き 始めよつかあ？」

中原のわざとらしい声が聞こえたと同時に戦慄を覚える。

風によって運ばれてきたのは木々のざわめきなどという優しいものでは断じて無く、万人を不快にさせる下卑た笑いだった。

少しだけ顔を出して向こうの様子を確認すると、圧迫面接でもこんな陣形は取らないという構図が出来上がっていた。

完全に座り込んだ黒羽を中心に3人が囲むようにして立ち、黒羽を見下す形を取っている。

「おい、なんか言えよ？お礼くらい言えよ？」

ガッ

中原が無防備に蹲る黒羽に遠慮のない蹴りを入れながら意味不明な事をぬかす。

「あたし達がわざわざお昼休みを使ってまで相手をしてあげているんだからさあ？ねえ？」

とても女とは思えない、もはや鬼の形相で黒羽に蹴りを入れ続ける
中原。

「……」

八つ当たりにはしか見えない蹴りに対し彼女は一言も発せず、身も心も完全に中原のサンドバックと化している。

というのは俺から見聞きしての話であって、彼女はもしかしたら謝意を言っているのかもしれないが、それは蚊の鳴く声と大差はないだろう。

惨い…酷すぎるだろ…

…だが、俺はほぼ間に合ったみたいだ。まだ始まって寸刻しか経っていないと見える。

今だからこそこの程度で済んでいるが、今後これ以上の惨事が起こらない保証は何一つ無く、寧ろ起こらない方が不自然という不自然が発生する。

そんな角の先で行われている拷問に近い残虐は禍々しい雰囲気を感じており、近づくことすら躊躇ってしまうオーラがあった。

これ以上先に行つてはいけない、そんな覇気が。

「キモっ。ガタガタ震えてんじゃねえよ」

そんなバナナにかければ一瞬で釘が打てるほどに凍てついてしまう、絶対零度を持った言葉を中原はなんの躊躇もモラルもなく吐き捨てる。

「……」

黒羽は完全に下を向き、ひたすらにその拷問に耐えている様子だ。
…これ以上これを放っておくわけには行けない…早く助けに行かな

くては…

しかし、形が具現化しかねない恒河沙な狂気が、一步踏みだそうとする俺の勇気を喰い殺して地に足を固める。

…いや、違う。

雰囲気

そんなアトモスフィア的なものじゃない、俺の主観が作為的に勝手にそう解釈しているだけであって、実際はそんなもの存在しない。認めたくない事実だが…人は俺のこの現象を言葉にするならこういうしかない。

…ビビッている。

フラッシュバック

俺は奴等の閃光弾並の威光に屈し、好意的にそう解釈しているだけで、本当はただ行きたくないだけだ。

こんな目の前まで来て臆病^{チキン}になっている俺の肝の小ささに、心の底から失望

ガシヤアアン！！

学校の敷地を保全する柵が、強烈な物理衝撃によって鉄と鉄がこすれ合う音が不快音となって響いた。

慌てて確認すると、青筋が浮かび上がった中原が柵を蹴り飛ばしており、こんな罵声を黒羽に浴びせた。

「あのなあ？その子犬みてーな態度が気に入らねえっていつてんだよ！…！」

「…」

「あああああ！死ね！！」

ドゴッ！

今度は鉄ではなく、身体に向かって蹴りをかます。

「…！！」

力なく倒れ込む黒羽。

「あつはははははは！」

他の二人はそんな卑劣な行為に対し、嘲笑^{わらっ}ているだけ。
黒羽の目からは止めどなく涙が溢れており、何もしていない俺の心を深く抉る。

「ほらあ！さつさとお礼を言えよ！！言えつてよ！」

「……」

「言え！！！」

ズガッ！

「……」

「聞こえねえよ！」

ドゴッ！

「……さ……」

「あ！？」

バキッ！

……！！

駄目だ……こ、これ以上は……！

これ以上傷ついていく彼女を、こんな地獄絵図を俺はずっと見ていられるほど強い精神力は持ち合わせていない。

行け！紅……！

……行くしかない。こんな人間同士がすることじゃない……！

弱気の虫を踏みつぶし、チキンハートを焼いて勇気を奮い立たせる。

虐殺行為を行っている化け物共に、強制終了の合図を告げる。

や…「やめろ!!」

「!!!??」

もう、後戻りはできない。

俺は殺意を纏った角を振り払い、中原達に姿を晒す。

「は？」

その突然の乱入に、流石の中原達も目を丸くして俺の登場に驚駭する。

「…」

黒羽の痛みと苦痛から無抵抗に流れ出る涙で濡れた顔が、一瞬だけ素面に戻ったような気がした。

その反応を視認することができて初めて俺がこの場に参上することの意味を見いだすことができ、この行為が無駄でないことに少しだけ安堵する。

出てきたことにより発生した役割を、俺は全うすることにする。

「何やってんだお前ら！今すぐやめろ！」

こんな言葉でやめるはずもないと分かっており、威嚇射撃の意味を込めて打ち放ったのだが、それを安易にかわした中原は初めから当てるつもりの弾丸を速射した。

「あ？誰だてめえ」

心の底からの嫌悪の目つきでこちらを睨み付けてくる。

それは並大抵の回数じゃ到達できない実に良く訓練された殺傷力のある鋭刃な睨視であり、こんなものを向けられたら恐怖で顔が引きつってしまふのも無理はない。

だが俺にはそれは許可されていない。奴の視線で虚勢^{ナイフ}を切り裂かれ、内に秘めた畏怖を垣間見せてしまつたら彼女の手駒と成り下がる。

それは黒羽の二の舞を意味し、この戦いの完全敗北の烙印を押してしまうことになる。それだけは、してはいけない。

なんとかその斬撃を紙一重で回避した俺は再び言葉を紡ぐ。

「黒羽から、離れろ」

少しずつ足を踏み出しながら彼女達に警告する。

距離的に言えば、10Mあるかないか。

「は？ ちらは黒羽と遊んでただけなんだけど」

「いつから友達を蹴る行為が『遊び』という言葉で括られるようになったんだ？」

チツ…と、1?も隠す気のない舌打ちをかますと、それまで俺にぶつ刺す気満々の刃物^{しせん}が徐に黒羽に向けられ

「てめえのせいでバレちまつただろうが!!」

とぼつちりという言葉では収めきれない理不尽な蹴りを黒羽に入れる。

「キャツ…!!」

「おい!!」

「あんたがトロトロしてるらこんなやつに目を付けられたのよ!!」

「馬鹿！クズ！死ね！！」

オマケの2人も調子に乗って黒羽を蹴り始める。

「やめろってんだろ！？自分たちが何をやっているのかわかったんのか！？」

その言葉に中原は酷く濁った瞳を開眼させこゝろ怒号を発した。

「うぜえ！！！！さつさと失せろ！」

さつきの鋭さでは満足できず、砥石で更に丹念に研いだような邪視が俺の今すぐにでも砕け散ってしまいそんな武勇心に襲いかかる。
く…、だが、ここで退いては…いけない。

「なら黒羽から離れろ！」

燃料切れが心配される闘志の石炭を取りあえず後先考えずに燃やし、反撃を試みる。

「んだよ！？てめえはこいつの彼氏か？…彼氏？」

ボゴツ！！

！！？

間髪入れず痛恨の一撃が黒羽の腹にめり込む。

「があゝはあ！！？」

ここ一番の大打撃にそれまで声上げることなく暴力に対処していた

黒羽も呻きをあげずにはいられなかったようだ。

「黒羽あ！！てめえなに男つくってんだよ！」

全く持つて意味不明な言い掛かりに、徐々に俺も怒りが湧いてくる。

「やめろ！俺は黒羽の彼氏でもなんでもない！ただのクラスメイトだよ！」

「クラスメイト……？」

眉間に寄せたしわを解くことないが、どこか思量を浮かべた中原は何かに納得する。

「……ああ、あんたは確か辻村っていったか」

「ああ」

その言葉には先程の怒りなどなかったかのような冷静なコメントで、俺はつい普通に返答してしまった。

水は沸騰させると冷ますのに時間がかかるが、こいつの怒りの水はやけに熱しやすく冷めやすい性のようだ。

見下したような目を変えることなく、腕を組み直した中原はどこかシニカルな笑みを浮かべてこう言った。

「こいつの彼氏でもないやつが、こうしてあたし達の前に出てきて口出ししているっていいのか？」

「……ああ」

「ハッ」

嘲笑^{わら}った。

「とんだ物好きもいたものだなあ……でもよお」

黒羽が嗚咽を漏らしながら必死に立ち上がるうとする傍らで中原はあくまで余裕を持って、蔑みを保ちつつ言葉を続ける。

「どうしてココが分かって止めに来た？」

この質問の真意が分からない。

ただ単に興味があつて聞いてきたのか、はたまた別の意味があつて聞いてきたのか。

じっくり考を労して言葉を選びたいところだが、生憎ギヤルゲーではないので相手は待つてくれないため、早急に答えを用意しなければならぬ。

俺にはこう返事する以外の方法は思いつかなかった。

「答える必要なんてないだろ。目の前に虐められている人間がいて、どうして止めないんだ」

もしかしたらこの答えは間違選択肢いだつたのかもしれない。

「くっ……ハハハハッハハ！！」

笑った。

3人が一斉に笑い出すもんだから、非常に腹が立つ。

「おいおいマジかよ！今時そんな良い子ちゃんがいるだなんてなあ！」

「ぶっっちゃけ有り得ない」

「くっくっハハハッハハッ」

好き勝手言い散らかして一通り笑った後、中原がなんとか膝立ちすることができた黒羽に顔を向ける。

「良かったなあ！お前にもこんな風に助けて貰える奴がいてな

あ　！！」

「はっ！？」

俺は素でそんな声を上げてしまった。

次の瞬間には黒羽の背中が地面に叩きつけられているのだから。

何が起こったのか一瞬判断が歪んでしまうほど、その行為は俺の価値観の中には存在しなかった。

中原が、はい上がる黒羽を地獄じめんに蹴り落とした。

「てめえには誰も助ける人間なんて必要ねえんだよ！とつとと死ね

！」

「…ひっ…ぐっ…」

悲痛な声と共に黒羽は為す術もなく涙を流す。

「おい！誰が泣いて良いっていったよおい！！」

黒羽の横腹に向かって再び蹴りがねじ込まれる。

…！！！！

プチっ

俺の頭の中にある『なにか』がはじけ飛んだような擬音が聞こえたような気がした。

今までオーバーヒートしてしまうほど我慢が続けていた理性のリミッターがついに破綻しショートを起こす。

もうどうにでもなれ。

『中原を殴る』という命令だけが、『中原をぶん殴る』という破壊衝動だけが俺の体を瞬時に乗っ取る。

「ふざけんじゃねえぞ!!」

ドッ!!

轟駆けの如く中原に向けて驀進する。

今の俺には校則だとか女の子を殴ることの倫理観など紙クズ以下の価値しか持たない。

「なかはらああああ!!!!」

「くっ!!」

拳を固めて中原の右頬に狙いを定め、怒りが支配する右腕が伸びる。耳で分らないなら身体でわからせてやる。

このくそy!!

「やめで下さい!!!!」

!!?

それは俺の中に未だ潜在していた道徳心からの声でも、殴られたくないが故に発した中原からの声でも、取り巻きからの声でもなかった。

…は？

その一声で、俺の理性が一気に引き戻される。勢いある拳が突如電池切れを起こしたかのようにぴったりと止まり、目と鼻の先には中原の頬が無傷であるだけだ。俺でも中原でも他二人でもない人物からの肉声…

「やめてください！」

己が言ったのだともう一度教えてくれるかのように再び涙声のその理解不可能な言葉が空を裂く。

やめて…ください…？

ヤメテ…クダサイ…？

この場面であまりに不適切なその解読不能な言葉に何度も他意を確認するが、そんなものは存在せず、戸惑いしかでてこない。

紛れもなく、この言葉は、黒羽。

どうして被害者が加害者を守るのだろうか、いや守らない。

「な…なぜだ黒羽！！」

横倒れた無惨な姿を晒す黒羽に困惑の視線を落とし、その疑問を霧散する答えを要求する。

彼女の顔は、必死だった。

「すべて…全て私が悪いんです！！」

顔を涙でグシャグシャにしながら。

「中原さんに不快なおばいをさせた私が悪いんです！！」

振り絞るようにして主張を続ける黒羽。

どうしてそんな大声を出して、よりによって中原達を擁護するとき
に聞かせてくれない大声を聞かせてくれるんだ。

「だから…だから…!!」

涙で隠れている紅玉の瞳に、意志が宿る。

「もう…私のことで争うのはやめてください!!」

被害者からそんな事を言われたらそれは絶対服従の力を持ち、他人
に過ぎない俺は振りかざした剣を鞘に収めなければならない。
戦う意志のない王のために剣をふりまわしてもそれはただのお遊び
だ。

「く…黒羽…?」

代わりにこんな言葉が漏れてしまった。

訳が分からない…

この矛盾しきつた関係に、疑問符を何個打てばそれを表現すること
ができるだろうか。

訪れる沈黙。

だが、その均衡をあっさり破ったのはやはりこいつだった。

「フッ」

嘲笑った。

こいつ…中原は今にも笑い出しそうな歪の口と、皮肉をがたつぷり
塗った毎りの目を黒羽に突きつけて、やがて口が開く。

「私のことで争うのはやめてください?…ハッ…馬鹿じゃないの?」

クツクツと肩を僅かに揺らしながら嘲弄したかと思っ た刹那その顔は冷徹なものに豹変し、足が飛ぶ。

「良い子ぶってんじゃねえよ偽善者が!!」

聞くだけで痛々しい重撃が静かな昼下がりの体育館裏に響く。

「あぁっ!!」

「この…!!」

再び暴力衝動が全身を駆けめぐる…

やめてください!

…が、その超絶な精神安定剤やめてくださいが俺を眠くしてしまうほど落ち着かせる。

振り上げ強固になっている拳は開かれ、代わりに中原の肩を押す。予想外のプッシュだったのか、簡単に彼女を押しつける事に成功する。

「さわんじゃねえ!」

台詞だけ聞けばそれは俺の行為に対しての発言に思えるが、少なくとも俺の目には黒羽に向けて言っている。

そこまでして脅威を演出させたいのだろうか?

…そこは今は置いておいて、この状況を打破する為の行動に出させてもらおう。

俺は蹲る黒羽の前に立ち、低く、重い声で彼女達にこう警告した。

「やめる。これ以上やるといふのなら俺が引き受ける」

…
俺の言葉に対して彼女達は何も言わず、代わりに木々のせせらぎが答えてくれた。

そんな空白があった後、やっと間が埋まったかと思つたらそれは舌打ちだった。

「チツ…」

うんざり顔で大袈裟な溜息と肩をすくめていやみつたらしく独裁者^{なかはら}は吐き捨てるようにこつ言つ。

「運が良かったなあ、黒羽…。邪魔者が入ったことだし、今日はこの辺にしておいてやるよ」

意外に潔く3人は俺達から背を向き、歩き始める。

「大丈夫か？」

…と俺が黒羽の無事を確認するため、視線を黒羽に切り替えたときだった。

「…だが」

風に乗ってそんな逆説が飛んできて、何かと思つて顔を上げればそこには体を捻って尖鋭な眼差しをひけらかした中原だった。

「今度はこついくと思つなよ…？」

捨てセリフらしい捨て台詞を残して彼女達は去っていった。
完全に奴等が消え失せるのを確認したら、そこはいつもの昼休みの
体育館裏だった。

「…ふう…」

今まで張りに張った緊張の糸が一気にほつれたため、仰向けに寝転
がりたい欲が湧いてきたが今は黒羽の安泰の方が先決だ。

「黒羽」

もう一度彼女を見て、その惨状を確認する。

ものの見事に表へ出るところには手は加えられておらず、洋服で傷
を隠せるところだけに奴等の蹴りは集中していた。

随分手慣れしたいじめに、ただならぬ恐怖感を覚える。

…ん？

足跡がふんだんに散りばめられている制服姿の彼女を見て、なぜが
俺は違和感を感じた。

それは普段あるはずのない跡が付いているのと言つのもあるが、そ
れ以上に引つかかるものを感じた…が

「大丈夫か？」

何度でも言うが、今は彼女の安否を確かめることが最優先事項だ。

俺はよろよと立ち上がる彼女に手を差しのばす。

「…」

その手に手が繋がれることはなく、生まれたての子鹿のように黒羽
は震えながらゆっくりと立ち上がる。

「黒羽…」

彼女は能面のような顔を浮かべながら黙って服に付いたデコレージ
ヨンを剥がしていく。

たまに小声で嗚咽を漏らす、それは無理矢理押し殺しているよう
にしか聞こえない。

だがこれ以上のアクションを起こせなくて、俺はコントローラーを
放り投げられて何もできない主人公のように棒立ちする。

その汚れを目立たない程度に払い落とすその様もまた手慣れた手つ
きであり、この一連の行為が長引いていることを裏付けていた。

嫌な沈黙の空気が流れる…というのは俺の主観だけなのかもしれな
い。

軽くはたかれる音がするだけでこの空間は完成しており、もはやそ
こに手を入れること自体が禁忌のように思えてしまう。

山ほど聞きたいことはあるし、彼女にも赤裸々に話してもらいたい
のだが、俺はその言葉を変換して声に出すことができなくなってい
た。

そして俺が声に出せない間中原達に付着された数多の足跡を大体消
した彼女は、歩き出していた。

当然のように俺の横を通り過ぎようとしている。

何か声を…

「黒…」

…！！

言葉が続けようとしたところに不可視の力が丸々続きを略奪したの
かと錯覚するくらいの途切れ方をしてしまう。

その位、絶句してしまった。

なんだよその目は…！？

目が虚ろだなんて表現はそれを表すにはあまりに安すぎる。

なんだよ…！

また俺の目はおかしくなってしまったのかと現実逃避をしてしまうほど、それは受け入れがたい事実だった。

彼女の瞳は完全に死んでいた。

目が見えないとかそんな現象的な意味でなく、物質的に死んでいるじゃないか…！

眼睛のハイライトが死に絶え紅色はどす黒く鈍いものとなってしまうっているそれはヤンデレ目よりタチが数倍悪い。

「…」

俺が壮絶な驚愕により口が聞かなくなっている間にも彼女は黙々と足を進める。

まるで初めから俺の存在など無かったかのように。

いつものように虐められて、いつものように事後を過ごしているかのように。

そう結論をフライングゲットしてしまったら、見事にそれは偽物だった。

「…わたしに…」

呆然とする俺に黒羽は私の存在を今思い出したのか、独り言のように独り言じゃない、ただこの静けさだからこそ聞くことができるこんな言葉を言い放ったのだ。

「私にかかわるといいことなんてない…もうやめたほうがいい…」

その悟りは決して虐められている少女から出てはいけない、確固不拔してはいけない哀しい一言。

募る思いを俺はこの形で集約させ、一気に吐き出す。

「おせつかい…だったかもしれない。だけどこれだけは分かって欲しい。俺は今の行動に後悔はしていないし黒羽と関わって嫌だとは思ってない」

聞こえたのかすらわからないが、とにかく胸に納めていた気持ちを彼女にぶつける。

黒羽はこちらを振り返ることも、立ち止まることも、返事をすることもなくただ哀しい背中を見せながら表の世界に帰って行った。

彼女を引き留めて話を聞く術を俺は持ち合わせてないし、今聞いたところで彼女がまともに答えてくれるはずがない。

今はそつとしておいて、落ち着いて話せるときが来るまで待つのが最善だろう。

そう結論づけて俺は今一度今の出来事を整理する。

…「悪夢のような一時だった」

頭の中の円卓会議で開口一番に出てきたのは誰一人違うことを言わず、まるで示し合わせていたかのような満場一致でのこの言葉だった。

そんなアメリカンチックな感想がでしまう位俺は心内では錯乱しているのかもしれない。

しかし『生』の現場をまざまざと見せつけられてこの態度でいられるのは初見者としては上出来ではなからうか。

よく人の死体を見たら吐き気を催す人間だっている中、それに限りなく近い…いや下手したらそれ以上のものを見てこのレベルなのだから。

だがそんな残忍な行為を殆ど毎日のように繰り返されている黒羽の気持ちに立ったとき、俺はまともな精神を保っていられる自信は正

直ない。

『やめで下さい!!!』

脳に焼き付けられたあの台詞の残響がまだ脳内で訝している。

俺が中原に正当防衛を加えようとしたところを、正当防衛の恩師を受ける側の人間がそれを拒絶して止めて来るだなんて全く前代未聞の話である。

その不可解さがどうしても気になる。まるで彼女達のいじめを受け入れ、庇ったような節さえある。

達也を遙かに凌駕するマゾヒストじゃあるまいし、何よりあの涙は嬉しくて流したものではないくらい俺でも分かる。

哀痛と痛痒と激痛が折り重なって生成された屈辱の落涙であり、決して望まれて生み出したものではないと。

ではなぜ彼女は庇った？止めた？

また中原にいじめられる恐怖感からなのか、俺の想像の領域に存在しないまた別の何かがあるのか…？

どんなに遠回りしても、曲解しても結局はこの疑問で打ち止めになるこの謎の鍵を握るのは黒羽ただ一人であり、解錠者にかけてもらわない限り俺は無意味な揣摩憶測を永遠と繰り返すことしかできない。とにかく、今は待つしかないみたいだ。

そう考えを打ち止めた俺は教室に戻ることにした。

春風の心地よさが、今は途轍もなく態とらしくて不快でしかなかった。

ハア…

「はあ…」

思ったことをそのまま口にする。

別にトレーニングしているわけでもないのに足に鉛が付いているような感覚がつきまとい、足取りが重くなって自分の家が果てしなく遠く感じてしまう。

俺が教室から戻ってからというものの、そこは恐ろしいほどにいつもの日常だった。

いつものようにウザ絡みしてくる達也、なにかを必死になって作っている栗崎、何事もなく日常を過ごすクラスメイト。

中原達も昼休みのことなど初めから無かったかのような態度で過ごしていた。

それは当たり前前の光景のはずなのに、アンダーグラウンドの片鱗を見てしまった俺にとってこの光景すら作り物のように思えてしまう。ただその平時に一つだけ穴があったとしたら、それは黒羽が存在していなかったことか。

俺が教室に戻ったときには既に彼女の姿はなく、机には雑然と教科書が散りばめられているだけだった。

彼女のその行動にも、俺は2等身キャラで構成された漫画に6頭身キャラがいるような違和感を覚える。

あの手練れたいじめと後処理から見て、彼女達の関係は一朝一夕で出来上がったものだとは考えにくい。

春休みからあなっていたとはどんなに曲折的に考えても有り得ない。なら必然的に2年から始まっていたことは明白だ。

だが俺は彼女が休みがちだったという噂は聞いたことはない…噂が立たないほどの存在だったなら話は別であるが…。

とにかく、彼女の早退は異常だ。

それはつまり異常をきたしてしまうほどのなにかがあったのだ。しかし俺の存在が原因の根幹だとは思えない…そう思うのはあまりに樂觀しすぎか。

…ご託はともかく、彼女達のいじめを見てしまっただけで介入してしまつた以上、俺にこの件は無関係だとは言えない。

ぶち壊してやる。

彼女が拒否しない限り。

そう意を決したときには、俺は自宅まで帰還していた。

「ふう……」

決して賢者モードではなく、むしろくしゃ気分を洗い流したい意味からシャワーを浴びた後でた一言だ。

全身から湯気が吹き出る。

俺一人には広すぎる居間を頑張って圧迫するソファに体を預け、言葉通りリラックスする。

精神的にも肉体的にも疲労を感じた俺にとってソファは極上の安らぎを与えてくれ、目を閉じれば数分もしないうちに寝息をたててしまうことだろう。

そうしたい気持ちは山々だが、俺はそれを一時保存して長方形のガラステーブルに放り投げ込まれているリモコンを拾い上げ、TVをつける。

習慣化した生活の一部であり、父親と話せない面会が出来る唯一の手段だ。

『銀堂ハーフスー!』

TVがはじめに映したのは、よく見かける銀堂ハウスのCMだった。かなり有力なスポンサーであるらしく、この時間帯はやたらこのコマーシャルが流れる。

おかげでCM中の歌詞を覚えてしまう程だ。

そんな事を思っているとお目当ての番組が再開される。

『お送りしています、では、辻村さんこの場合どのような刑法が適用されるのでしょうか?』

20代後半の女性キヤスターが、俺がよく知っている人物に向かって質問をぶつける。

質問されたダークスーツを身につけ、厳格な雰囲気を惜しむことなく纏わせる中年男…辻村煉が重低を効かせながらこう答えた。

『非常に悪質な手段で犯罪を繰り返したこのケースは…』

家族を捨て、こうして仕事に明け暮れる父はある意味サラリーマンの鏡なのかもしれない。

だがそれは過去の父としてあるべき姿ではない。もっと、もっと俺達につくしてくれた。

こんな画面越しに誰に言っているのか分からない言葉なんかじゃなく、暖かくて、俺達をたのしませてくれる言葉をかけてくれたはずだ。

『以上のことを踏まえて…』

ギロリと、別に俺を見ているわけでもないのにカメラ目線になると思わず顔を背けてしまう。

…それでも俺はこの番組を見続けている。もう5年にはなるだろうか。

父は毎日この時間帯に流れる番組のレギュラーであり、主役だ。

内容はやはり法律に関すること。番組に寄せられる視聴者からの相談をズバズバとそれは冷静に一刀両断するものだから、未だに人気の熱は冷めることはない。

そんな番組を半ば情性で見ている部分は否定しないが、会う方法がこれくらいしかないのだから仕方がない。

一体いつになったらまともに対面することができるようだろうか…。完全に暗記しているのであろう刑法を一言一句間違わずに説明している父を見ながら、だらだらと夜を過ごしたのだった。

4月5日／水曜日（後）（後書き）

という訳で後半終了です。

地の文がしつこく感じた方がいましたら、この場を借りてお詫びします。

さて、次回は更に酷い方向に物語が展開します。

辻村が感じた違和感の正体は…それは次回！

それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

4月6日／木曜日（前）（前書き）

どうも、りゅうらんぜっかです。

初めての方は初めまして

前回の続きで読んで下さっている方は、ありがとうございます。

というわけで前編です。

美少女攻略ゲームでメインヒロインの人気が出にくい理由の一つに、ルート上ヒロインの醜い部分が現れやすいから、あまり深く掘り下げられないサブヒロインに比べて人気が出ないと言われますが、黒羽は正にこれに当てはまるのではないのでしょうか？

…いや、それ以前の問題ですね。ヒロインを可愛く描けない自分の力量不足ですね。

戯れ言はこの辺に、それでは本編をどうぞ！

4月6日／木曜日（前）

ジリイイイイイイイリリリリ！
ガンッ

ベルとベルを一生懸命打ち鳴らすやかましい目覚ましは、今日も昨日セットしたとおりの時間ジャストに仕事を果たしてくれるが、こいつ程感謝されない不遇な仕事はないだろう。

如何せん気持ちよく寝ているところを無理矢理起こされるのを嫌う人間は多く、そんな嫌われ役を買って出るようなものだからだ。

「ん…」

体が酷くだるい。

昨日は疲れと苦悩の二重苦がある出来事をトリガーにツインアタックしてきて、その受けたダメージを睡眠では解消されなかったようだ。

ギルやゼニー、コインを払って休めば死体すら全快する世界に住んでいないことが実に惜まれる。

しかし、俺はあくまでその事象の目撃者であって当事者ではない。そんな人間ですらこの疲労を感じているのだというのだから、当事者はその何倍上に行くのだろうかと目算するだけでも恐ろしい。

靄が漂う頭から真っ先に、その張本人である黒羽の顔が浮かび上がる。

その顔は容姿端麗、それ相応の美しく流れるようなストレートの黒髪と美人であることは下手な広告より信憑性がある。が、そんな彼女の目は光りを拒絶しその未来さえも閉ざしかねないどす黒い魔眼に近いものを携えてしまっている。

元々そんな瞳ではなく、本来の彼女の瞳はセレブな奥様が目を輝かせて金の糸目を付けないで欲しがるほどの深紅の宝石のような目を

持っていた。

そんな時価うん億したであろう瞳を外形だけじゃなく芯まで汚し、投げ石にまで価値を暴落させたある意味錬金術師のような連中が、いた。

諸悪の根源は中原とその取り巻き2人で構成された三位一体の化け物だ。

やはり黒羽は奴等にいじめられていた。それも現在進行形で。

長い間こいつらの虐めを受け続けて、心も体も既にボロボロのはずな彼女だったが、今まで屈せず持ちこたえていたと思う。

だがそれは過去形であり、昨日の様子は今までと一変していた。それこそ彼女達に屈してしまったと思わせるような。

今日もちゃんと学校に来てくれればいいのだが、下手したら希望的観測と表現されてしまう位のものになってしまふ可能性は否めない。それくらい昨日の黒羽は人が変わったかのような変容だった。

…そもそも俺は加害も被害もあつたこともしたこともないから双方の気持ちは憶測することはできても理解することはできない。

それでも。

それでも一つだけわかることがある。

それは間違いなく黒羽は『被害者』だと言うことだ。

確かに黒羽側にもなにかしら原因があるかもしれない。

お互いのすれ違いからいじめに発展するというのはよく聞く話だ。が、今までの彼女らの発言を聞く限りその原因は見えてこない。

むしろ一方的に彼女を嫌い、支離滅裂な暴言や理不尽な暴力を繰り返す彼女らが理由はどうであれ圧倒的に悪い。

彼女らの目に入ってしまったい、自分達の欲望を解消するためだけに被害に遭う不幸な人間。それが今の彼女なのだろう。

それはあまりに酷だ。

傍若無人な王の気まぐれによって殺される貧民の図柄がゾッとするほど綺麗に型にはまり、現にそれに近い行為が繰り返されているじゃないか。

しかし、いつの時代でもそんなわがままは決して長く続かない。
続かせない。

…精々独り善がりにならないよう、最善の注意を払いながらやっていこう。

そう決意し、鉛を抱えたように重い体に鞭を入れ、ベットから起きあがる。

「う…」

思わずうめき声を上げてしまう。

特記することなかったので、そのまま学校へ着き、教室に到着した俺だがこの光景は事細かに綴らなければいけない使命感のようなものを感じた。

今日も一番ですか…お早いですね、栗崎さんよ。

「スー」

昨日同様、俺の後ろの席に位置する栗崎は達也発狂ものの無防備で僅かに寝息を立てながら机に突っ伏して寝ている。

熟睡している辺り、俺が来る相当前に来たという予想がつく。

どうしてこんなに彼女は早いのだろうと、自分の事は棚に上げて考えるが、彼女の思考は米俵の中から一発でBB弾を掴む以上に難しいので当然答えは暗雲の中だ。

きっぱり諦め、彼女の真ん前にある我が机に座る。

…栗崎の朝が云々言っているのは、栗崎ルートの名残であるという事はみんなに秘密だ。

適当にメタ発言してお茶を濁した俺は栗崎の快眠を妨害しない程度

の音を立てて今日の授業の準備をする。

と言っても教科書を机に詰め込むだけの簡単なお仕事であり、20秒もしない内に俺は『暇』状態にシフトする。

目の保養になる栗崎の方へ首を向けると彼女は子供のように大胆に寝て髪が放り投げ出されている姿をしていた。

栗崎らしいといえば栗崎らしい。

昨日みたく栗崎を無理矢理起こして話し相手にするのは自己中心的過ぎたと学習済みなので今日はできるだけ彼女に心地よい眠りを提供したい。

彼女に微笑むと再び正面を向き、黒板の上についているアナログ時計は長針が12と1の狭間で、短針は7をきっぱり指していることを確認する。

それは授業開始まで1時間近くあることを意味し、同時に1時間近くやることがない事を意味する。

以前記したようにテストなんて存在しないので端から勉強する気もないし、達也もないのでひたすらにやることがない。

軽いため息をつき、机に顔をふせる。

やることがないなら寝るしかない。

・

・

・

伏せてどれくらいの時間が過ぎただろうか。

「……ん……」

闇が完全に視界を支配した世界の遠くから、一筋の光りとも呼べる何か聞こえる。

「……っ……らく……」

それは段々近づき…

「辻村君！！」

！？

睡眠世界あっちに向かって歩いていたら、後ろから現実世界こっちに何者かの手によってひっぱりだされる。

それは嫌われ役を自ら買って出た無機質な目覚ましではなく、活発明快な声色で、どう聞いても女の子のものだ。

俺は腕を括って作り出した暗闇の池から教室本来の明るさがある地表に少しずつ顔を出す。

少し感じる眩しさと謎の人物からの睡眠妨害による不快感を覚えつつ、俺は呼ばれる方向へ顔を向ける。

どうせ達也だろ。

その目に達也のどや顔が映った時にはどんな命乞いを俺に唱えてきても容赦なくアップパーをぶちかまして…

「やっと起きたーっ。もーっ、何回呼んだと思ってるのっ？」

そこには俺が想定していた人物とはそもそも性別から違い、両手を腰に当てて不満げに唇を尖らせるこれまた美少女が立っていた。

「く…栗崎？」

肉まんだと思って食べた奴があんまん、それは決して不味くないのに酷く不味いと感じてしまうアレのような意外さを突発的に感じる。

未だに船をこいでいる脳うめいせをたたき起こし、状況を把握する。ん？なんで栗崎が俺を起こしたんだ…？

「ちよつとっ！」

「のわっ！！？」

机の下から上にヌツと俺の目の前に栗崎の顔が出現するもんだから驚きで脳内に津波が発生し船長が舵をひっくり返し、俺は何かを押されたように顔を引っ込める。

「よかつたあゝ、死んだかと思つたよゝ」

字面だけ見れば心配しているそれだが、実際目の前にいる彼女は悪戯を大成功させて満足する小悪魔のようなしてやったり顔だ。

「びつくりさせるなよ」

「てへっ、昨日のお返し…かな？」

そんな攻撃呪文を唱えられたら俺は全コマンドを封鎖させられてしまい、『肩をすくめる』ことしかできない。

おまけに殺意ではなく好意を持つてしまう舌を出して片目ウィンク、それに手を頭の後ろに回すという伝説の『てへぺろ』コンボが炸裂してしまったもんだからもはや言葉も出ない。

あざとい、実にあざとい。

パツと彼女の後方にちらりとある時計を見ると、俺が最後に見た時より長針は僅かしか垂れ下がっていなく、せいぜい10分経った位だろうか。

そんなことより何で彼女が俺を起こしたのだろうという起源であり頂点の疑問を解決するため、早速回答者に催促する。

「なんで栗崎が俺を起こす必要があるんだ？どうかしたのか？」
「んー？」

表情を変えず徐に栗崎がピツと腕をのばして、何かを指す。

言葉による答えを得られないので、俺は行動により示された答えである栗崎の腕を目で追う。

彼女の手の先にあったのは…

「…黒羽？」

今朝もはやいんだ…！！？

俺はここ最近疑いつぱなしの目をまたまた疑う。

そだけ時が止まったように、背景の一部にとけ込んでいると見間違えるほど動かない黒羽

黒羽自身もそうだが、見ている人間をも鬱にする背中とむせかえるほどのどす黒い負の雲が黒羽の頭上を彷徨っている。

学校に来てくれたところには素直に喜べるが、そんな姿では素直に喜ぶことはとてもじゃないができない。

「…彼女になにか用があるのか？」

光と闇という表現がこれまでしつくり来ることのない非対称的な2人の女の子を交互に見ながら『光』を担っている栗崎に静かにそう言う。

黒羽に用があるのにどうして俺を起こすという因果関係が生まれるんだ。

「これなんだけどっ」

突如戦えるモンスターがいなくて人の目の前で逃避という名の目の前が真っ暗になる現象に近いものが起きる。

生憎俺の手持ちのモンスターボールは2個あるのでまだまだ戦える。

慌てて顔をのけぞらせると、正方形の紙が俺の眼球にくつきり写る。

「これは…？」

見出しの部分を見て全体像の輪郭を確認する。

「……陸上部？」

昨日からなにやらコソコソやっていたあの紙らしく、どうやら完成したらしい。

「ちよつと見てみてっ」

栗崎から正規に紙を受け取り、見出しだけでなく全体にしっかりと目を通す。

「ふむ…」

…内容をたつた一言のシンプルな言葉で言えば『勧誘紙』だ。宇宙人や未来人を勧誘しているのではなく陸上部員を勧誘しているもので、丁寧に仕上がっているため見ていて気持ちが良い。

「なかなかいいじゃないか。これを一人で作っちゃうなんてな」

率直な感想を述べると栗崎は可愛さを一段上乘せしたてへぺろポーズを取ってこう言った。

「エヘッ、辻村君はほめてくれると思ったよっ」

「こいつをどうして黒羽に？」

3年生なつて部活に入る奴だなんて異例の部類に入るだろうし、なにより勧誘して黒羽が陸上してくれるだなんて長靴で鯛が釣れるくらい期待度だ。

これまた何気なく聞いてみると栗崎は『何訳の分からないことを言っているんだ』と言いたげな無表情に近い微妙な顔つきになる。

「だって今、あたしと辻村君と黒羽ちゃんしかいないじゃない？」

教室はしーんと聞こえそうな位閑散とし誰がどう見ても三人しかないこの状況に対して『確かに』としか言いようのないありのままの正論を言ってきた。

「いや、確かにそうだが…、だから、なぜ俺を起こす必要があつて、その紙を黒羽に見せる必要があるんだ？」

この妙に会話が繋がらないところが3次元の女の子と話しているんだと実感する。…そう思う俺はもう駄目かもしれない。

「え？そりゃあ黒羽ちゃんと辻村君をくつつけるためーっ」

正論を正論で返すと二カッといつも通りの元気果汁100%の特製笑顔を浮かべてようやく話が見えない流れに解答を得ることができた。

成る程、栗崎のこの紙を会話ツールにして、俺と黒羽に話す機会を与えようと言う魂胆な訳だ。

その言葉にどこまで本気が含まれているのか分からないが、紙を落とした音でさえ教室全体に筒抜けになるこの状況下ではそれは間違いない黒羽の耳に不本意でも入り込み、変な誤解を生み出す癌細胞になりかねないので、こんな抗癌剤で早期治療を試みる。

「な、何いつてるんだよ！それより黒羽ともっと仲良くなる良い機会じゃないか」

うまいこと軌道修正できたと思うが、そもそも俺達の会話など黒羽にとつてゴミ以下としか感じていなく、聞いていない可能性が極めて高い。

だからこそ俺はこう言った。

栗崎の体中から溢れる元気を黒羽に与えたらあの黒雲をはらしてくれるかもしれないと期待したから。

当の本人は全然okな様子なので背中を押す台詞を加える。

「な？行つてこいよ」

「まあそれもそうだねっ。うん！行つてくるよ！」

そう言つて置き土産ならぬ置き笑顔を残した栗崎は自作した勧誘紙を持って黒羽の元へ足を運ぶ。

今から告白でもするかのような、緊張をにじませた顔で黒羽のもとへ近づき、そして立ち止まる。

「これを受け取つて下さいっ！」

腰を45度折り、正しい謝り方と同じ角度で栗崎が両手で紙を差し出す。

もしこの場面に遭遇した人がいたら十中八九黒羽に告白したと思うだろう。百合好きが歓喜の瞬間である。

だが、次の展開は百合好き発狂の流れだった。

「……」

「……？」

黒羽は栗崎の行動にうんともすんとも言わないどころか、栗崎の行為などなかったかのように、先程となにも変わらない態度でいる。それを『無視』と表現するのは間違いであり、『感知できていない』という方が正しいと個人的見解を言わせてもらったが、現にその通りだと思う。

あれは完全に自分の世界に入り込んでいる。

「ね？黒羽ちゃん？これを受け取って欲しいな？」
「……」

栗崎が人形に語りかけている変わった子と間違われても仕方のない光景が繰り広げられる。

魂が抜けた人の形をした屍と存外が殆ど無い黒羽に、栗崎は健気に諦めずに話しかける。

「あ、あれー？あたしのこと忘れちゃったかな？ならもう一度じ、自己紹介しておくねっ。あたし栗崎あずきっていうの、よろしくっ！」

ふっかつのじゅもん が違うのか、入力すら受け付けないのかは定かではないが、無反応だというのは共通解だ。

栗崎の全くもって空回りな自己紹介が静かな教室を揺らし、昇華する。

「……」
「……」
「How about you？」
「……」
「……は、は……」
「……っ……ごめんっ！」

一礼した後、やや回転気味に黒羽の後ろを向いた栗崎は、全力疾走で俺のところまで戻ってくる。

「…だめだった…なにかあたし嫌われるようなことしたのかな…？」
肩を落とし、相当残念そうま渋い顔をうかがわせる。

「ど…どんまい…」

周りを明るい元氣いっぱい青空へと変える栗崎でさえも黒羽によつてその青空は灰色に塗りたくられてしまっているこの状況。これは…悪化というレベルではない。末期だ。

変わりすぎだろ。昨日はあんなに栗崎と楽しそうに会話していたのに。

一体全体どうして、ここまで変わり果ててしまったのか。
やや荒っぽく椅子がひかれる。

というのはオレが立ち上がったからであり、黒羽の所へ行くためだ。

「え？辻村君がいつてくれるの？」

そのやや驚きを見せる顔の裏に『大丈夫？』という心配が見て取れただけでも十分だ。

「…ああ、その紙を貸してくれ」

栗崎が、その描写こそ少なかったものの、頑張ってかいていた努力の結晶を受け取る。

「…頑張って」

黒羽にも丸聞こえな声でそう激励を受けた俺は、ゆっくりと彼女の元へ。

「…黒羽」

十歩も歩かないうちにある黒羽の席へ。

「昨日のこと、まだ引きずっているのか？」

「…」

いきなりそんな核心に迫る質問はいささかまずかったかなと思ったが、これくらいパンチの効いた質問じゃないと動かないと判断する。梵鐘を手で叩いても音は響かない。

「…」

…俺は彼女の心の鐘を撞木で打ったつもりだったのだが、外してしまったのか、いや、そもそも打たれていない見込みが高い。

その鈍い輝きすら放たない黒紅な瞳がうつす先は、俺ではなくいつになく綺麗な机だった。

具体的に言えば教科書類がない、という意味だ。それにしても机がやけに汚いのは仕様ではない。

…！？

…机はいつからノートになったのだろうか。

栗崎の髪の色をしているはずの茶色い机は、7色を超える色で埋め尽くされていた。

内容は書き連なる悪態や下種な言葉のオンパレードであり、『落書き』なんて言葉じゃ収まるレベルじゃない、これは幼稚園生レベルの『塗り絵』だ。

適当に行った幼稚園の園児が持っている自由帳を開けば実にこれと酷似する、とにかく手にしたペンで殴り書きされている塗り絵のノートそっくりだ。

だが人の人権、人格を全否定している暴言のみで構成されているところが、幼稚園生の塗り絵とは決定的に違う。

「こ、これはいつたい…！」

今まで教科書やノートで隠されていた机の荒れ果て、見放されて風化した都市のような素顔。

その顔は結婚20年目の妻が夫にすっぴんを見せるように、なんの抵抗も無く晒されている。

これが意味することは…ただ一つ。

…屈した。

いじめにあっている事を隠す。

それは理性を保った人間がする行為であり、大抵の人間はそれに準じていることだと思う。

しかしそのいじめをなんとも思わなくなり晒しても構わないと思っ
てしまったそのとき、それは奴らに完全に敗北したことを意味する。
簡単に言えば調教されたのだ。

彼女らの道具として。

「…」

「と、とにかく消さない」と

とにかく俺はぞうきんを求めて廊下に駆け出そうと黒羽に背を向けた。

…が、彼女はそれを取らせに行かせてくれなかった。

「……や……め……て……」

！

黒羽の言葉が石化の呪文で、それを受けたかのようにピタリと足が硬直し、止まる。

その意志は絶対的な説得力を持ち、抗うこと、意見することの隙穴は何処にも開いていない。

…どうして…

全く理解できない。

振り返って彼女の顔を確認すれば眼中に俺の姿はなく、ただただ俯いて中原達の芸術に浸っていた。

思えばこのとき、無理矢理にでも拭いて、彼女の意志をねじ曲げておくべきだった。

ガラッ

「はあい！じゅぎょうをはじめますよー！」

もういつそのこと小学校に転勤しろと言いたくなるほど、まかり先生は元気よく登場する。

いや、その元気が先生の売りであり、あざとさであるから俺はいっこうに構わないわけだが。

この時間は国語の授業であり、4時間目の授業であるが、俺にとってそんなことはどうでもいい。

ここまで本当に淡々と、俺の中の時間軸では進んできた。

時折黒羽を見てその様子を確認するが、いつ見ても彼女は身動き一つ取らない。

俺は上の空で授業中先生の声は完全にBGMと化しており、そんな

つてしまうほど一体何を考えていたのかとは、もはや語る必要はない。

「グオーツ」

そう、こいつのいびきも聞こえない程。

…俺の思想に大量の水をさすこの男も、ある意味不動で席に着いている。というか、立ってすらない。

一体何時間寝ているんだこいつは。

それとほぼ同じような態度を取っているk…

！？

忽然、という2文字が即座に頭の中で構築され、それを行動で示してくれた人物が1人いた。

いるはずの黒羽の姿が、ない。

俺の席の北北西にこじんまりと座っているはずの彼女が既にもぬけの殻と化していた。

普段だったら誰であろうとそこまで気に止めることはないだろう。

だが、今回ばかりはその思考は許されない。

その開いた席を見た刹那俺に電流というか、悪寒に近いものが音速で駆けめぐる。

…まさか…

…いや、先走り過ぎた考えかもしれない、でも、最悪の事態を防ぐためだったら多少過保護な心意気を持つていても悪くはないだろう。彼女はここまでびっくりするくらいテンプレートに物事を進めてきたんだ、今更奇をてらうことは有り得ないと考えて良い。

そんな筋書き通りシナリオに彼女が物語を演じているというならば、この次のステージは…

そしてそこで行われる演技は…

…

授業中何度も何度も彼女の台本を読み直し、続きの執筆を待ってい

た俺だが、今回ばかりは俺が筆を執って白紙の脚本に物語を綴らないといけないようだ。

その台本が破れ、永久に続きが書かれなくなる前に。

「あれ？あれ？」

そんな事を思っているとあざとい声が聞こえてきた。

「あれれー？黒羽さんはどこに行っ たんですかー？」

教壇に立って席図表を見ながらまかり先生はその表情通りの、困ったような声を上げる。

いいタイミングだ。

ガラッ

「ほえっ？」

「俺、探してきます！」

素っ頓狂な実にあざと可愛い先生の声を聞けただけで大満足な俺は立ち上がり、彼女の返事が来る前に教室の後ろの方の扉へダッシュする。

「ああ！ちよちよとっ！辻村君！？」

「行つてきます！」

ざわめく教室を背に、俺は生徒皆教室に収納されたが為にすかすかになっている廊下のだ真ん中を全力で走り抜ける。

後ろからなにか言っているような気がしたが、そんなことを気にしている場合じゃない。

俺の足が『全力』から変わることはなく、とにかくあの場所へ急い

だ。

このとき初めて、俺の教室が4階で良かったと実感する事になる。

ガラガラ！

扉は全開まで開かれ、同時に生暖かい空気がドツと流れ込んでくる。
！！！！

「……」

そこには、春風に黒髪をなびかせる少女の姿がある。

その姿は男の感情を燦る魅惑の姿であり、こんな特殊な場面じゃなかったら俺は今頃妄言を垂れ流していただろう。

特殊と言うからにはそれなりの理由がある訳で、寧ろこれが正常だというのなら年間自殺者数は30万人は超えても不思議ではない。

そこまで日本は腐っちゃいないし、そうであってはいけない……日常ではない非日常がそこにはあることは確かだ。

確かに彼女は生き物のようにその綺麗な流線を動かす黒髪を持って立っている。

だが身は安全柵を越え、一步踏み出す先に『地』はない……いや、正確には彼女の足が動いたそのとき、身はずっと下にある『地』に転落する。

ここまで言えば俺が今どこにいてどういう状況なのかは火を見るより明らかである。

そう、俺と黒羽は屋上にいて、そこに靴と遺書があれば万人が首を縦に振って納得する飛び降り自殺の一步手前に携わっている状況。
か細い叩けば崩れてしまいそうな儚い右手が柵を掴み、彼女の最期の最後の命綱になっている。

……ここまで冷静に解説してきたが、内心心臓バクバクで、正直何を

していいかわかない。

教室を出る前はドヤ顔で黒羽のこの姿を想定していたのに、現にこの場面に出くわしたらこのザマだ。

パニックというのはこういう時のために使われる言葉なんだと思考を持って教えてくれる。

じめっばい、不快指数が鰻登りするまわりつくような脂汗が、不可抗力でいたるところで湧き上がる。

それと反比例するように口の中はパッサパサなものをつつこまれたように水分が抜け落ちる。

と、とにかく、と止めるしかないだろ。

死ぬことに興味を持っている彼女に、こちらへ興味を移行してもらう特効薬はもはやこれしかない。

「黒羽！！」

その名を叫ぶ。これ以上上限がないシンプル且つ効果抜群…のはずだ。

：

ゆっくりと。

ゆっくりと彼女が振り向き、俺と視線を交わす。

その顔を見て、俺は人違いしていないと再確認をすると同時にこの絶望的な状況も再確認する。

「……」

先程となんら変わらない光の宿っていない死に絶えた目に、焦りがありありと見て取れる俺が写る。

輝きを失い、地面に落ちている石のようなダイヤを身につけたってその人間の魅力は引き立たないのは当然の道理だ。

もう一度呼びかける。

「くろは！」

自殺に走ってしまうほど情緒不安定な彼女を下手に刺激してはいけない……！あくまで慎重に動向を見守らねば。

「……ら……」

口パクをしている辺り何か喋っているのだろうが、彼女の声量ではこの春風を到底突き破ることはできない。

俺はなんとかその声を耳に入れようと彼女の元へ歩み寄る。

……これは映画でも漫画でもなんでもない、現実の世界でこんな場面に逢うことがあるうとは誰が予想できただろうか。

射程距離に入った俺に、顔を横殴りする強風にもろともしない黒羽の口がほんの少し開いてこう告げた。

「……どうして……ここがわかったの……」

感情が抜け落ちたある意味真っ白な声をあえて換言するならば、ただの棒読みであり、そもそも俺に言っているのかすら分からない。

そんな彼女に俺はなんて返答すれば良いのだろうか。

声もそうだが、表情からもなにも読み取れない彼女に俺はありのままの真実をぶつけてみる。

「……なんとなく、だ。黒羽がここにいるような気がして」

その曖昧と言うよりもはやストーカーしていたことを隠蔽するための言い訳に近いその答えに普通の人間なら鼻で笑うのが関の山だが、今の彼女にはどう解釈されたのか。

俺の台詞の前後で顔に特に変化はなく、常に変わっているのは風に

揺られる髪の毛位か。

俺達の下では何ら変わらない日常が平坦に進んでいるというのにこ
こでは金網の先に女の子が立って死のうとしているという、居眠り
なんてしたくてもできない緊張感に包まれている。

この緊張の均衡を打ち破る一言は、やはり彼女が先だった。

「……もう……」

俺は片時も目を離さず彼女の行動を監視する。絶対に死なせないた
めに。

「……もう……いいんです……私に関わらないで」

ボソリと呟く。

「私は……もう……疲れました……なんにも……なんにも考えずに……生きてい
くほうが……ずっとらくです……」

……本気だ……！

彼女の言葉の重みは偽物でも冗談でもない……本物だ……！
フェイク ジョーク リアル

ここに来て雀の涙ほどではあるが感情を乗せた言葉はつまり、本心
以外の何者でもなく、説得するため骨を折らなければならない本数
を増やさなければならぬことを意味する。

本当に、この調子でいけば五分もかからないうちに彼女の血の海が
1階で出来上がる羽目になる。

全力で延命処置を施す。

「……落ち着け黒羽、なんにも死ぬことはない。……第一死んだ方がつら
い未来がまっているかもしれない」

俺はとにかく落ち着いた声で彼女を諭す。

しかし根拠のない中身スカス力でどこか空回りしている俺の言葉が彼女の琴線にかすれるどころか明後日の方向へ向かっている。

着々と死に近づく彼女を、悪魔がニタニタしながら喜んで歓迎していることだろう。

「…生きているほうが…つらい…です…今の…状況がかわるなら…わたしは…これ以上つらくても…いい…」

彼女でしか感じる事ができないその心境を頭ごなしに否定してもそれこそお門違いもいいところだ。だからこそ俺は言葉に詰まっている。

彼女が死へ向かう一方的試合を達成しようとしており、更に最終全速力^{ラストスパート}をかける。

「中原…さんが…いない…世界なら…わたしはどこに…いつでも…いい…だから…」

無を押し通してきた顔に、あまりに哀しい綻びを垣間見せ

「…つじむら…くん…」

顔を背ける

「く…」

「がんばって…ね…」

半歩踏み出す。

踏み出した先に足場なんてない。

…黒羽が死ん「やめろ!!!」

反射的に叫喚したそれはもはや本能に近い叫び。
死んで欲しくない一点張りの。

流石にその大声に踏み出すことのできない足がびくつき、もう一度
俺の方へ顔を向けてくれた。
能面の奥の奥には不満が漏れているのかもしれない。

「…」

…俺の心臓は全力疾走したため酸素に飢えて、それを欲するかの如く、通常時の5倍はあろうスピードでビートを刻む。
これは、ゲームだ。

俺の言葉次第で黒羽は生か死の二択、どちらにも転がり込むことができる…というのは自惚れじゃない、俺の言葉ですら揺れ動いてしまふほどの精神状態って事だ。

一人の命を握っている状況だと思うだけで冷や汗が首筋をつたう。
だが生死の天秤は圧倒的に『死』に傾いており、この調子ならフラグ通りデットエンドで終幕を飾ってしまう。

乾ききった唇を濡らし、勘に障る位気持ちのいい青空を振り切って
そのフラグをへし折る第一歩を踏み出す。

「黒羽…違う、そんなんじゃない…命はそんなに軽いものじゃない……」

その言葉は幸か不幸か、黒羽のスイッチを切り替えてしまったようだ。

「…じゃあ…」

「…?」

「…命を軽く…思っている人が…多い世の中でどう生きていくんですか…」

ネガティブな言葉専用発生器だったはずの口から、怨念のような、妬ましさ練り込まれた言葉が精製される。

口は綺麗な顔に全くマッチしない拉げ方をし、眉の幅が段々と狭くなる。

金網の悲鳴が聞こえたのは、それから間もなくであり、すぐにそれは彼女の右手に力が込められたことによる立証だと認識する。

「中原さんや、あの二人はどう…なっているのですか？私を玩具のように…もてあそんで…」

俺に一度も見せたことのない喜怒哀楽の内の『怒』が、様々な形で表れ始め、意気消沈が意気衝天にリアルタイムで変化する光景を目の当たりにする。

「私…嫌…なの…に…」

黒羽の瞳から涙がたまり始める。
そして

「私…嫌なのに！」

ついに長い長い感情の導火線が心臓部まで到達し、大爆発する。

「うつ…うつ…」

ポタ…ポタ…

どんな時でもどこか感情の牙を隠していた黒羽だが、その面影は消

滅しそれがハッキリ見えるほど剥き出している。

大粒の涙が風に乗せられ美しい光りを放ちながら落ちていく。まるでそれは彼女の淑やかさが抜け落ち、全貌が丸見えの怒りだけが残る様を具現化したかのように。

「もう嫌なの！生きてるのが！生きてるのがづらいの、苦しいの、耐えられないの！あなたはなにも…わがつでいない！わたしが…今日までどれだけがまんじできたか！…したくないことをさせられ、されたくないことをされる私は…もうこれ以上いぎる意味がないの！生きていたって楽しくない、嬉しくない！…苦痛じゃない日々になんの意味があるの！？そんな日々を過ごさずより死んだ方がいいの！…ぞうぎめだの！だから…もうかがわらないで…！」

大勢でたたみかけると言うより、突撃兵がそれこそマシンガンを振り回して突撃しているような怒涛の感情の殴り書き。

止むことをしない涙は彼女の頬を何度も撫でて落ちていく。

今まで心の奥底に溜まっていた感情が一気に引き出されているのだろうか、昨日とは別人のようにマシンガントークを繰り広げる黒羽。この決心が付くまで彼女は何度も何度も低回したのだろう。

だがそんな間違った決心を芯から折らなければ…

…彼女には『死』しか待ち受けない。

俺は錯乱に近い彼女を少し強引ではあるがきつめの言葉で束縛を試みる。

しかし、暴れ馬に当てずっぱうで縄を投げたところで掛かるわけもない。

「だからって死んだってなんの解決にもならないし、それはただの自己満足にしかない！違うか！？」

「どうして！？どうしてまだ関わってくるの！？」

そこんところはやけに冷静な彼女に、なかなか手痛い反撃を受ける。

「ただのクラスメイトなのに…他人に近いのに…！」

動揺した顔が、ビリビリと伝わる。

「私のことはもう放つでおいて！私がいなくなっても…誰も悲しまない…むしろ望まれているのよ！そんな存在は…そんな存在は消えて無くなって！みんなのぎおくから消えてしまえばいいのよ！」

感情の波が満潮を迎えた黒羽は涙声を絞り出しながら自虐をひたすらに主張する。

…駄目だ。

これ以上口で言ったところで彼女の決心を決壊させることなんて心タルコントロール理掌握師でもないド素人の俺ではできない。

…だったら…

発想を逆転させる。

「ハア…ハア…！」

金網が小刻みに震える黒羽の手に連動して、カサカサと揺れている。
…確かに今の俺に彼女を止める根拠ソースなんて持ち合わせていない。フラットに近い、行き当たりばつたりの全くの無対策で黒羽ボスに望んでいる状態だ。

だからってこのまま放置しておけば彼女は自殺する。それはつまりどうしようもない、王手詰チェックメイトみを意味する。

こうなるのも無理はない。彼女の背後に隠れている、自殺しようと思っ程の経緯を俺は断片的しか知らないのだから。

…だが、その結論に至る奴は凡人の発想。

どんなに状況に置いてきぼりを食らっている俺でも分かることが一

つある。

『黒羽は死ぬ必要がない』

だったら死なせなければいい。

「違う！！！」

「！！！」

饒舌に意見を一人歩きさせる自殺未遂者に叫声で驚愕させ、取りあえず時間稼ぎをする。

「誰もそんなことは思っていないし、望んでもいない！」

「あなだにわだじのなにがわかるっていうの！？」

その言葉は必殺技であり、俺のこれ以上の反論の余地を殺す。だが俺はそこに反論はしない。

「ああ！わからないさ！知り合って間もない人間の気持ちなんてないじめも受けたことも、したことのない俺にはな！」

その頭にクエスチョンマークが浮かんだだけで、十分だ。

「だけどな！ただ一つ言えることがある！」

もう一度言おう、このクエストの成功条件は『黒羽を死なせない』こと。

その結果さえあれば、過程など、どうでもいい。

ここは将棋同士が戦っている、頭や言葉だけで命をやりとりする戦場ではない。

状況が詰んでいるのなら王を手にとって移動させてやれば『詰んだ』という結果は死ぬ。

精神的に彼女を止めることができないのなら、肉体的に止めてやればいい…ただそれだけだ。

俺は金ではかりきれない『命』をかけた賭にでる

それは赤いものを見て興奮している闘牛のような気が荒い彼女に対しての挑戦を意味する。

近づき終わる前に手を離されてしまうことがあるかもしれない

だが、荒療治は時に壮絶な効果を生み出すことがある。

しかしその分リスクは高い。

一歩間違えれば彼女は死ぬ。

だが迷っている暇なんかない。

ハイリスクハイリターンの、生死を分ける賭に俺は打って出る。

4月6日／木曜日（前）（後書き）

という訳で前半終了です。

中々酷い展開ですが、彼女の運命は…？

辻村君は彼女を救うことはできるのか？この結末はまた次回で！
それでは最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250w/>

はなだね small bouquet for you

2011年11月30日12時57分発行